

### 新聞發行及藩籍奉還

脱兵の騒ぎも鎮まつたから、木戸は、薩摩へ、渡る事になつた。岩倉右大臣の一行が、既に薩摩へは、行つて居るのであるが、是から出掛けて、一行に、落合ふ事が出来るか、何うかは判らないが、兎に角、先年來の、長州藩との行掛りもあるし、旁、一應は、島津久光にも對面して、毛利の名代として、一應の挨拶を述べて置く必要もある、といふやうな次第で、遅れ馳せながら、鹿兒島へ、乗込む事になつたのである。

聯合の事が成つて、愈々、時局は迫り、長州の藩士が、續々、京阪の兩地へ、入込む事になつた當時は、未だ、毛利侯の入京を、許されてなかつたから、藩士が、公然、京地へ、這入る事は、出来なかつたのだ。其場合に、薩藩の旗印を用ゐて、表面は、薩藩士である、といふ風を、裝ふて行つたのであるから、縦令、長州藩との聯合を、保つ上に於ての必要から、左様した事になつた、としても、それまでの便宜を、與へて呉れた、薩藩に對しては、一應の挨拶をするのが、當然であつた。其他、長州征伐の時の一條といひ、旁、それ等の挨拶を、なさねばならぬのであるから、政府の使者と、いふ事の他に、毛利侯の名代といふ、資格も帯びて、木戸は、鹿兒島へ乗込んで、久光に對面して、直に其足で、東京へ、引返したのであつた。

歸京の後、極めて小さい事のやうではあるが、木戸は、新聞發行を思ひ立つた。此事を、簡単に述べて置く。今日の時勢になれば、新聞雜誌の必要は、言ふまでもなく、特に其必要を説く者があれば、却て、迂闊な人間のやうに、他からも思はれるほど、新聞雜誌は、欠くべからざるものには、なつて居るが、未だ明治二年の頃には、新聞雜誌の必要を、一般の人が、認めて居た、とは、いへぬ。廟堂の斑に列して、政治家面を、仕て居た者でも、新聞雜誌の事なぞに、深い考を、有つて居たものは、殆んど無かつた、といふても、可い位である。

左様した時代に、木戸が、其處へ眼を着けた、といふのは、矢張り偉い所があつた。尤も、文久年間から、新聞雜誌は、既に發行されて、或は興り、或は倒れ、興廢、更に定まりなかつたが、兎に角、それに似寄つたものは、發行されて居た。けれども、一般の人から、注意を引くやうな、立派なものとは、いへなかつた。

徳川時代には、瓦版なるものがあつて、世間の耳目を、驚かすやうな出来事には、其日の中に、版を起して、極めて粗末な、印刷物を作つては、江戸、八百八町を、呼賣をさせたものだ。赤穂の義士傳に、俗説ではあるが、大竹重兵衛と、勝田新左衛門の話の時に、義士討入の状況と、其連名を、呼賣に來る、といふ一節がある。即ち、瓦版なるものが、それであつた。今日でいへば、新聞號外と、いつたやうなもので、逆も、今のに比べたら、物には、なつて居なかつたが、兎に角、さうしたものが、行はれて居たのである。

それよりか、體裁の好いものにして、殊更に、大きな事件が、起きるのを待つまでもなく、日々、の出来事を報じて、傍、大政府の布達や、布告のやうなものを、掲げる事にしたならば、可からうといふのが、木戸の意見であつた。

併し、木戸が、自身に、其事に當るのでなく、相當の人を選んで、之をやらせよう、といふ考へになつて、漸く見出したのは、同じ長州人で、山縣篤藏と、いふ人であつた。學問もあるし、文筆も達者で、奇才のある上に、足を運ぶ事や手数のかゝる事を、少しも厭はぬ、といふ、重寶な男であるから、斯ういふ者なら、必ず成し遂げるに違ひない、と見込をつけて、木戸は、山縣を招んだ。



「急の御用でも、出来たのですか」  
「イヤ、外の事でもないが、お前に、少し相談したい事が、あるのぢや」  
「ハ、ー、そりやア、何ういふ事ですか」

木戸は、膝を進めて、  
「西洋諸國には、毎日の出来事を、其儘に印刷して、多數の人に配る。我國にも、今までにあつた、瓦版の如きものがある。之を、ニューズ・ペーパーと、いふて居るが、我國でも、さういふものを始めたら、よからうと思ふのぢや。第一に、大政府が、是から新に、布告を、人民に示す事が、頻繁に起つて来る。それに就ても、隅から隅まで、裏店の者にも行渡る、といふ位に、布告を示す、といふ事は困難であるが、今、言ふたやうな、ニューズ・ペーパーの方法に依つて、一般の者に、政府の御趣意を行渡らせる事は、最も必要である。その上に、日々、の出来事を、一般の人に、早く知らせてやれば、人智開發の一端にも、なるのであるから、是非、之を行つて見たい、と思ふが、お前が引受けて、やつて見る氣はないか。實は、之に當る可き人物を、考へて見たのぢやが、容易に、適當な者が見當らず、お前なら、確かに出来るぢやらう、と思ふて、呼んだのぢや。やつて見れば、どうぢやな」  
「成程、西洋には、さういふものがある、といふ事は、豫て聞いて居つたし、又、横濱のブラツクが、既に作つて居るのを、一兩度は、見た事もある。貴下から、さういふ御話なら、宜しい、やつて見ませう」  
「それは、辱ない。是非、やつて見て呉れ」

木戸は、五百兩の包みを二つ、それを山縣の前に並べた。

「サア、此處に千兩あるから、之を受取つてくれ。此金は、生さうと殺さうと、お前の自由ぢや。我輩は、此事に、口出はしない積りぢやから、お前の思ふ通りに、やつて見て呉れ。其成行を見てから、又、金を出す必要があれば、我輩にも考へがあるから、今は取敢ず、これ丈を、渡して置く」

「承知いたしました。それでは、確かに御預りして、直に着手する事に致します」  
山縣は、新聞發行の手續に掛かつた。

一一

明治の初年に、千兩の金は、今日に比べれば、一萬圓以上の、比較は取れる。若し上手に使へば、今の十萬圓の働きは、なし得るのである。新聞に就て、大した知識も無く、唯、西洋には、さうしたものがあつた、といふ事を、知つて居る丈で、これを眞似て見よう、といふ考から、木戸が、千兩の金を投出して、何の干渉も爲すに、一切の事を、山縣に委せた、といふ處に、木戸の偉い所があつた。

千兩の金を、投出したから偉い、といふのではない。金なんぞは、天下の湧物であつて、欲しいと思へば、幾らでも出来るもので、使はうと思へば、何んな馬鹿にでも使へるのであるから、只だ、金を出したから偉い、といふのではないが、兎に角、新聞事業が、何ういふものであるか、といふ事も、能く知らずに、是から、文明國の仲間入をする、日本の國としては、特に必要なものである、といふ事を、認めた丈で、直に大金を投出して、何等の干渉する所もなく、其者に、一切を委せた、といふ所が、偉いのである。

山縣が、木戸に答へた、言葉の中に、横濱のブラツク云々と、いふ事がある。それに就て、説明して置く事がある。ブラツクといふのは、イギリスの人である。その伴が、寄席歩きをして居た、落語家のブラツクであつた。そのブラツクは、詰らない男であつたが、親父のブラツクは、實に偉い者であつた。尤も、落語家のブラツクの弟は、サミュエル商會の、番頭をして、貿易商の間には、相當の勢力を、有つて居たが、落語家のブラツクは、大した代物ではなかつた。

父のブラツクが、出して居たのは、日新眞事誌と稱して、一口に、ブラツク新聞と、呼んで居た。有識者の間には、



勢力を有つて居た、新聞である。山縣は、それに倣ふて、發行の手續を始めた。發行する前から、山縣の苦心は、その名稱を、何としたものか、といふ事について、可成り悩んだが、結局、『新聞雑誌』といふ名で、發行する事になつた。印刷の都合もあるし、記事は、集めるのに骨が折れるから、當分の中は、毎月六回といふ事にして、神田の今川小路に、本社を構へて、日新堂といふ、看板を揚げた。所が、山縣は、却々細かい事にまで、能く気が付いて、非常に働きのあつた所から、到頭『新聞雑誌』が、成切した。其後に、木戸を訪ねて来て、

「ヤア、到頭、物にしましたよ」

「ウム、大層な評判で、實は蔭ながら、喜んで居るのぢや。此上共に、骨を折つて、立派なものにして貰ひたい。我輩は、未だ見た事はないが、敦敦タイムスといふのが、世界一である、といふ事を、聞いて居るが、それまでにならずとも、其半分にまでは、進めて貰ひたいものぢや」

「ナアニ、四五年も辛抱したら、何うか、斯うか、物にはなるでせう。就ては、金も儲かりましたから、先生から、預つて置いた金を、半分だけ返す事にしませう」

と言ひながら、五百兩の包を、前に出した。之には、木戸も、意外の思ひをして、

「ナニ、さういふ事はせずとも、宜しい。我輩は、あれだけの金を、棄てた積りて掛かつたのぢやから、返して貰はうとは、思はなかつたのぢや」

「イヤ、さうでもありませんが、是だけは是非、御收めを願ひたい。私も、貴下から、金を貰つて、之れを起した、となつと、心中、甚だ平ならぬ所が、あるのですから、この金子は、受取つて置いて下さい」

「さうか。さういふ事情なら、兎に角、預つて置く事にしよう」

「其代り、先生に、願ひの筋があります」

「何ういふ事か」

「半分だけは御返ししたが、尙ほ半分の金は、社の爲に使つてあるが、是は、密附して貰ひたい。今後、何ういふ成行に、なるが判らないが、盛衰、何れもせよ、残る半分だけは、密附といふ事にして、貰ひたいのです」

「そりやア、勿論の事、初めから千兩は、出す積りて居たのぢやから、宜しいとも、君が、よいやうにしたら、宜からう」

「それぢや、改めて、さういふことに、願ひ置きます」

「併し、山縣」

「ハイ」

「僅かな歳月に、何うして、それ程儲けたのか。あの位なものを、刷り上げて、一枚の代價も、僅少なやうであるが、また、發行の枚數も、大概は知れて居るが、五百兩といふ大金が、浮き出したのは、何うも可怪しい、と思ふが、何ういふ都合で、是だけの餘裕を見たのか。それを聽いて見たい」

山縣は、ニコ／＼笑ひながら、

「流石の先生も、是は解りますまい」

「ウム、何うしても、其事情が解らぬ」

「それぢや、御話いたしません。紙に文字を刷つて、一枚何程と、代價を極めて、配つた所で、其紙代は、極まつて居るので、儲けは、固より薄いものです。併し、其外に、綺麗にして儲かる事がある。それは、廣告料といふものです」

「ハ、ア、廣告料といふと、何ういふ事になるのか」

「例へば、或商店が、一つの品物を賣出す。それを、紙上で吹聴して貰ひたい、といふので、その吹聴料を取る。そ



れが、場合によつて、新聞紙を百枚二百枚と、賣つたよりも、澤山の金になるのです。人の目に付かないで、其収入が多いのぢや。又、依頼する方でも、新聞の上で、商品を褒めて、書いて貰へば、自然、其新聞を見た者が、商品を買ひに行くやうに、なるのぢやから、それを依頼して、書いて貰ふ、賃料は高いにしても、品物が賣れれば、何でもなく、回収が出来るのであるから、快く先方でも、之に對して、金を出すのです」

「成程、さういふ秘術もあるのか。お前は、兎に角、之をやつて行くが、宜からう」

未だ其頃には、新聞事業に就ては、少しも判らなかつた時代であるから、木戸の如き、才智の廻る人でも、廣告料の所までは、氣が付かなかつたのであらう。山縣が、早くも其處に、氣が付いて、新聞經營の上には、此収入に依つて、維持の策を、立てなければならぬ、といふ所へ、注意したのは、流石である。

二二

木戸が、山縣に申付けて、『新聞雜誌』を起した外に、尙、獨力を以て、新聞を出して居たものも、多少はあつた。其一人が、賣藥の精錡水を賣出して、評判を取つた、岸田吟香と、いふ人である。岸田も、既に故人になつたが、精錡水の評判が、あまり大かつた爲に、新聞の創立者として、岸田の名は、却て知られて居ない。僅かに、識者の間に、いくらかは、知られて居たが、兎に角、岸田は、新聞の創設者として、その一人であつたのみならず、今の新聞體の文章は、岸田に依つて、或る點まで、工夫されたのである。其後、福地源一郎が、東京日日新聞を、やるやうになつてから、岸田が、力を一つにして、兩人の間に、色々と研究されて、到頭、物になつたのが、新聞體の文章である。此點から言へば、福地と岸田は、實に偉い人であつた。我國の人は、斯ういふ事に就て、その功勞者を、重く見ない風があるから、何でもなく、見過されてしまつた。が、福地と岸田は、新聞歴史の上から見て、大なる功勞者であつた。

さうして見ると、木戸ばかりが、早く此事に、氣が付いた、といふ次第でもない。唯、在官者として、人に先んじて、斯うした事に、氣が付いたのは、木戸が、第一人であつた、といふ事になる。

月日の經つに従つて、新聞雜誌の効能が、判つて來たから、そこで、各所に、同じやうな企てが、起つて來た。福地が、堂々と、日日新聞を創めると、司法卿の江藤新平が、福地を訊ねて、三百兩の金を寄附して、歸つて來た。それが、どういふ人だか、よく判らなかつたが、後日になつて、江藤である、といふ事が知れて、福地が、態々、江藤の所へ、禮に行つた、といふやうな、逸話もある。して見れば、實に木戸ばかりでなく、在官者の中でも、新聞の必要を、認めて居た者は、いくらか在つたに違ひないが、兎に角、木戸の奨励に依つて、山縣の『新聞雜誌』は、成切したのだ。其後、明治八年頃になつて、山縣は、何ういふ事情からか、此『新聞雜誌』から、手を引く事になつて、青江秀といふ人が、其後を引受けた。それが後に、改題して『嶺新聞』と、なるのである。

新聞雜誌の必要が、斯ういふ風に、一般から、認められて來る、といふ時代に、なつたのであるから、何事に就ても、進んで來たには、違ひない。

所が、王政復古と、いふ名は行はれたが、其實は、更に擧がらない、といふ事に就て、段々、八釜しい議論が、政府の内部から、起つて來た。

それは、何ういふ事情か、といふと、昔の大名の如き、格式はないにしても、依然として、諸侯は、地方に分れて、領地を、有つて居たから、其領分の人民は、藩主の言ふ事でなければ、どうしても、肯かぬといつた習慣が、未だ残つて居て、藩主の方からも、自分の人民として、視て居たのである。斯くて、大名と、領地内の人民は、昔ながらの關係が、保たれて居たのだ。

尤も、幾百年といふ、長い歲月の間、其習慣で、育てられて來た、一般の人民の頭が、今俄に、王政復古に、なつたから、といふて、藩主の側から離れて、朝廷の方へ走る、といふやうな事は、なかく、行はれぬ事ではあらうが、



それが爲に、大政府の威令と、いふものが、六十餘州に、治く行渡らない事になる。

それと、猶ほ一つは、藩主と藩臣の關係も、なか／＼面倒であつた。動もすれば、藩主が、昔の主人風を吹して、大政府に、仕へて居る、藩臣を威壓する、場合がある。中央の舞臺へ乗出して、相當な官位を、得て居る者は、今までのやうに、只だ理由もなく押付けられても、容易に、藩主の言ふ事を、聽かうとしない。それが爲に、自然と、藩主、藩臣の間に、軋轢が起つて来て、何時も、其事で惱まされたのが、舊藩臣である。

彼是する中に、世界の事情も、判つて来るし、智慧も、段々、進んで来て、此儘に、過して置く事は出来ぬから、是非、廢藩置縣の世に引直して、全然、封建政治を、廢てしまはなければ、王政復古の實は、擧がらないのである、といふやうな、議論が、其方此方に、燃え出して来た。是が體で、廢藩置縣の、運動の端緒に、なるのである。

其前に、愈々、王政復古となつて、明治政府が出来ると、第一番に、播州の姫路藩が、藩籍奉還を、願つて出た事がある。詰り、藩の財政が、逼迫して居た折柄、王政復古といふ事になつて、藩主が、今までのやうに、隨意の行ひが出来ぬ、となれば、迎も、藩の獨立を、保つて行く事が、むづかしくなるから、寧そ、藩籍を奉還したい、といふやうな、願ひであつた。

當時、兵庫の知事であつた、伊藤俊輔の手許へ、その願書が、出て来た。流石に、伊藤は、其時分から、新しい頭を、有つて居たから、之れを切ツ掛けに、時代の轉機を圖らう、と考へた。

『こりやア面白い事が、始まつて来た。藩籍奉還を、啻に姫路藩だけでなく、一般の藩にも及ぼして、全く封建政治の基礎を、破つてしまはなければならぬ。それをするには、絶好の機會であるから、是非、之を土臺として、廢藩置縣を、中央政府に、促して見やう』といふ考へになつた。

折柄、不平で、政府を辭して居た、陸奥陽之助が、和歌山へ、歸つて居たので、伊藤は、陸奥を呼出して、兩人が相携へて、東京へ上り、廢藩置縣の運動を始めた。

### 廢藩置縣の経緯

陸奥と伊藤が、連立つて上京した。姫路藩の、藩籍奉還の願出を幸ひとして、此際、全國の、廢藩を實現させやう、といふのが、兩人の意見であつた。

兩人は、相談の上、手を分けて、運動する事になつた。陸奥は、岩倉を説き、伊藤は、木戸を説く、事に、その分擔が定まつた。

いかに名論卓説でも、其時を得ざれば行はれぬ。兩人が、姫路藩の事から、廢藩置縣を、思ひ付いて、活動を始めたのは、流石に、一隻眼を有つた、遣方ではあつたが、まだ其時は、全般的の機運が、其處にまで、進んで居なかつた。折角の奔走も、其甲斐が無く、終つたのは、それが爲であつた。

伊藤が、木戸を、訪ねた時に、木戸の答へは、

『それは、よい所へ、眼を着けた。我輩にも、異存は無いが、未だ其時でなからう。實は、其件に就て、それ／＼に、取調べも終り、何時でも、差支の無いやうに手順は運んであるが、此事は、幕府を倒すよりも、猶ほ一層の困難がある。迂闊に、を着けると、意外の變が起ると、思ふ、巧く行けば、何の苦もなく、スラ／＼と通過するが、一つ失敗したら、それこそ、一大事になるのであるから、餘程、其時を考へて、上手にやらぬと、徒に失敗する事にな



る。どうせ、長い事ではない、近く其時は来る、と考へるから、其時には、君等の骨折を、頼むやうになる。参考の爲に、見せて置くが、我輩は、是までに取調を、済ませているのぢや」と、言ひながら立つて、木戸は、大きな箱を、持つて来た。それを開いて、見ると、その中には、調査の書類が、一ぱい詰めてあつた。伊藤は、一々、書類を見て、更に驚いた。廢藩置縣に關する、一切の取調べが、總て書類になつて居るから、流石に、先輩の木戸は、偉ひ者だ、と思つて舌を捲いて、驚くのみであつた。

是までの調査が、済んで居るにも不拘、今は其時でないから、待つて居れ、と言はれたのであるから、それでも、即時に着手しろ、とは、いへぬのであつた。

伊藤は、姫路藩の、藩籍奉還に刺戟されて、急に思ひ立つて、上京して來ると、案外にも、先輩の木戸は、既に一切の取調を終り、偏に其時を待つて居ると、いふのであるから、其儘に、引取つて來たが、陸奥の方は、何としたか。それを聞いてから、第二段の策動に、移る外なかつた。

岩倉へ廻つた、陸奥は、鋭い辯舌で、頻に岩倉を説きつけようとしたが、岩倉も、之には即答を與へなかつた。維新の大局に處して、あれだけに、立派な功績を、擧げた人であるが、諸藩の事情には、暗い所が多くあつて、今俄に廢藩置縣を實行する、といふ事は、斷言し兼ねて居た。

「貴下のやうな御方が、此際に、大英斷を以て、廢藩置縣の實行が、出來ぬやうな事では王政復古の實は、何時になつたら擧がるか、殆ど知る事が、出來ない。實は、薩長二藩の專横には、貴下も、苦んで居る事と考へるが、我等としても二藩の態度に就ては、甚だ不満に堪へぬ事が多い。今日の有様で、押して行つたならば、徳川幕府を倒しながら、それよりは、質の悪い、薩長二藩の政府を、迎へた事になつて、折角の維新も、何の爲か、判らぬ事になる。現に、今日の事が、もう其状態になつて居る。して見れば、速かに廢藩置縣を行ふて、普天の下、率士の憤、

ひとしく王土王臣たるの名の下に、彼等の頭を押へ付けてしまふ、といふ事は、何より先に、爲なければならぬ事であつて、貴下のやうな御方が、之を躊躇せられるのは、其意を知るに苦しむ」と、陸奥一流の辯舌を以て、捲し立てるやうに論じ詰めた。

伊藤と相談して、廢藩置縣の、運動に來た、陸奥が、岩倉を、説く場合に、薩長二藩の專横を罵つて、彼等を押へ付ける上から、廢藩置縣は必要である、と説いた所に、陸奥の本領が、現はれて居る。何處までも、藩閥打破で、固まつて居た、陸奥としては、當然の事であらうが、當時の岩倉を、此論鋒を以て、説き落さうとしたのは、無理であつた。薩長二藩に對する、感情は別として、廢藩の事は、急に行ふ可きであるが、前後の事情も、よく考へて見る必要がある、

岩倉も、此件については、可成り、大事を取つて居たらしい。

「足下の言ふところにも、道理はある。されど、今俄に、それを實行する、といふ事は、御約束いたしかねる。遠からぬうちには、さういふ事にも、ならうが、今は、其時機であるまい。まア、暫く待つが宜い。是だけの大問題を決するのには、西郷や大久保の、意見もあらう、と思ふから、何れ相談はする積りであるが、今が今、直ぐ返辭をしる、と言はれても、自分は、何とも答へる事は出來ぬ」

岩倉は斯う考へた。

陸奥としても、此上は、致方がないから、一時引取ることにした。伊藤に會つて見ると、木戸の返辭も、矢張り大同小異であるが、併し、木戸は、既に調査も、届いて居るのみならず、近く實行する覺悟である、といふ事を、確め得たので、態々、上京した甲斐は、あつたといふ譯だ。

此時に、一つの珍談があつた。陸奥が、小二郎と、いふて居た頃の事で、坂本の海援隊に這入る、ずつと前、江戸に



出て、安井息軒の門に入り、修業して居る間に、放蕩を始め、到頭、退蕩させられると、悪い腫物が、體中、一ばいに出て、歩行にさへ憚むほどであった。遇々、神田の花岡といふ、醫者に救はれて、厄介になつて居る中に、入院患者の一人、吉原の甲子樓の遊女で、歌川といふものと、好い仲になつた。歌川が退院してからは、日夜、甲子樓に、遊び暮して居た。果は、遊ぶ金に詰つて、歌川も、身揚りを、爲るやうになつた。歌川は、熱々、考へた末、年期を増して、二十五兩の金をつくり、小二郎に、異見を加へて、別れる事にした。歌川の戀は、冷めたものではなかつた。小二郎と、末を遂げられぬ、と視て、双方の將來を、想つた爲に、冷めぬ戀を、あきらめてしまつたのである。それから、小二郎は、京都へ引揚げて、父の宗廣にも逢ひ、義兄の五郎とも、相談の末、本統の浪士生活に入つた。坂本龍馬との關係は、それからの事である。

歌川が、普通の女郎と異つて、小二郎の前途を、考へてした事であるから、それ丈に、小二郎の頭には、歌川の事が、残つて居る。若し、自分が、志を得て、身分が出来たら、歌川には、酬いるつもりで居たが、今度、出て來たのを幸ひに、甲子樓へ行つて見ると、歌川の姿はもう、見えなかつた。

深川の假宅へ、行つたとも聞いて、ひそかに、探して見たが、どうしても、判らなかつた。今では、陸奥の姓を名乗つて、堂々たる身分にはなつて居るが、此一事は、氣懸りてならなかつたのだ。

或夜、伊藤と、酒を飲んで居る時に、此話を漏したので、斯ういふ事には、洵に親切で、物好きな所もある、伊藤の事であるから、頻に乗氣になつた。

「そりやア、面白い。俺が、手傳つてやらう」

と、頼まれもしないのに、馬に乗つて、陸奥と兩人で、毎日のやうに、歌川の行方を捜して歩いた。

歌川は、深川の假宅に移つて、名を改めて居たから、容易に判らなかつた。それを、やうやく、捜し當てたので、兩人は、訪ねて行つた。歌川には、二世と言交した、羅興服の商人が、あつた

ので、陸奥は、その男にも面會して、歌川の將來を頼み、改めて夫婦にしてやつた。商業の資本も與へたから、夫婦は共稼で、楽しい日を送るうちに、商運が、うまく巡つて、大きな店を、有つやうになつた。日本橋の横山町で、木綿問屋の何某と、人にも尊敬されるやうな身分になつて、晩年を、氣安く送つたが、廢藩置縣の運動に、出て來た、陸奥が、内密の仕事としては、斯ういふ事もあつた。

一一

岩倉は、公卿でありながら、何處となく、公卿離れがして、一種風變りの、人物であつた。徳望を擔ふて、内閣の首班に列し、偉い連中を、纏めて行く事は、三條の人格が、よく之を成したが、實際の働きは、岩倉の手に依つて、裁かれて居た。其代り、岩倉は、膽玉が太かつただけ、又、機略に富んで居ただけに、時には、機略を弄ぶの傾きがあつた。

三條と岩倉は、初め悪く、後に相和して、明治になると、復た脊中合せになつた。四年の頃には、三條の方で、岩倉を、避けるやうになつて居た。木戸と大久保は、西郷が、岩倉を喜ばなかつた程には、悪く視て居なかつた。後に征韓論で、此兩人が、岩倉と結ぶやうになつたのも、西郷が、岩倉を、悪く視て居た程に、兩人は、岩倉を、信用しなかつた譯でもない、といふ事が、想像し得るのである。

世の諺に、棺を覆ふて、名、初て定まる、といふ事がある。岩倉が死んで、既に四十幾年になるが、是非の評が定まらない、といふほどに、岩倉の人格にも陰翳が、多く在つた。大概な者は、その死後に、批評は定まるが、岩倉は、死して四十年の今日、尙、是非の評が、定まらないのであるから、怪物といふ可きである。

その岩倉でさへ、廢藩置縣の當時は、全く除外されて、三傑以外、その相談に與るものは、一人も無かつた。殆ど事後承諾にひとしき、取扱を受けたのに對しては、流石に、岩倉も憤懣に堪へなかつたが、胸を撫つて耐へた。三



傑が、若し岩倉に、相談するとなれば、勢ひ、三條にも、打明ける外なかつた。併し、此問題は、無事に、遂行し得てから、之を視れば、何でもない事のやうであるが、一步を過まれば、兵亂の禍になるのであるから、三條は、一切の責任を負ふて、必死の覚悟を以て、之に當つたのである。従つて、何人にも、それを知らさず、三條の専行で、やりつけた所に、却て苦心の深いものはあつたのだ。

三條は、温厚の長者で、敢て經世の才があつた、といふ次第でもなく、いづれかといへば、斯うして問題について、あまり有力な、相談相手でもなかつたから、岩倉にさへ、秘密にして居た以上、三條を除外したのは、當然の事であつた。

▲此問題に就て、三條の苦心、大久保と木戸が、西郷を憚かつて、容易に、手を下し得なかつた事や、長州派の人が、いかに活動したか、といふ、内情は、南洲傳を、参照せられたし。

西郷と大久保が、木戸の屋敷に集つて、大方針を定めて、翌朝は、三人が打揃ふと、内閣へ出て来た。今日は、大切な相談があるといふので、豫め、三條へ、通告して置いたから、三條は、岩倉と共に、待ち受けて居た。三條からは、廢藩置縣の、即時斷行を、持出した。岩倉は、苦い顔をして、三條の態度を、見詰めて居たが、三條は、眼を丸くして、

『そりやア、大い事を、極めなはつたのう。そないな事になつて居るのなら、前以て、相談をして下はつたなら、我等にも、考へはあつたのぢやが、今俄かに、そないな事をしなはつても、若し騒動が起きたら、どないにしまはる積りか、俺や、それが心配でならぬが、先づそれを、聽かせて貰ひたい』  
木戸は、膝を進めた。

『其處ぢや。それは我等とても、同じ考へてござつたが、併し、其點に就ては、西郷さんが、一切を引受る、といふので、是までに相談を定めた次第ぢや。其席には、大久保さんも居られて、よく聽いて居つたのぢやから、間違ひ

は無い。又、引受けたのが、西郷さんだけに、俺も安心して、覺悟を強うしたのぢや』

三條が、誰を信じて居たか、と言へば、一番に、西郷を信じて居たのだ。西郷が、此事に就て、それまでに、踏張つて引受けた、といふのでは、此上、三條は押返して、異議を唱ふる氣もなく、黙つてしまつた。

是から、大久保が代つて、廢藩置縣を實行する、手順に就て、詳しい説明をした。莊重な辯舌を以て、諄々と、説いて行く。大久保の説明に、疏漏は無い。長い間、木戸が、苦んで調べて、大久保が、之を吞込んで、賛成したのであるから、此兩人が、代る／＼説明をすれば、何んな者でも、切込んで行く隙は、無い譯だ。況して、諸藩を廢して王政復古の實を擧げる、といふのに就て、岩倉や三條に、異議のあるべき筈は無い。強ひて言へば、自分等が、密議に、參加し得なかつた、といふ事であるが、それは、自分等の私情に過ぎず、此席に於て、論ずべき限りのものでない。殊に、實行の後に起る、騒擾の責任に就ては、西郷が引受ける、と聞いては、もう反對の餘地がなかつた。其處まで、三人が、取詰めた計畫をして、今、内相談をする、といふのであるから、流石の岩倉も、一言半句、故障のいひやうがなく、此提議に、賛成する事になつた。

岩倉は、多少の不平があつても、いよく同意したとなれば、三條よりも強い所があつて、先づ内容の改造を主張した。

『此問題は、維新の變革以上に大事件であるから、先づ各參議を、辭任せしめてから、更に三人が、新たに參議となつて、斷行の責任に當る』

といふのが、岩倉の意見であつた。

これには、相當に異論もあつたが、結局は、それと決して、三頭内閣が、茲に成立したのである。



凡そ天下の事は、其機運を見て、ドシ／＼やり付けければ、大概は、成就するものである。其機運を見ながら、徒に左顧右盼して居ると、何時か、機運が、通り越してしまつて、更に機運の到るを待つ、といふまでには、容易な事ではない。併し、其機運なるものを、見付け出すのが、なか／＼難かしい。成敗の跡に就て視れば、機運の去來は、よく判るが、實地に臨んで見ると、傍て觀る程、機運が乗ずる、といふ事は、やさしいものではない。雜新の鴻業も、過ぎた跡から、理窟を附會すれば、何とでもいへるけれど、兎に角、幕府の力は、相當に強かつたのであるから、之れを易々と、押付けてしまふ迄には、可成りの苦心があり、只だ機運を捉へる事に、すべての知能を、働かした點は敬服す可きである。廢藩置縣の如きも、洵に難かしい事があつたが、只だ其機運を、巧く捉へて、鐵石の如き、決心を以て、斷行し去つたから、美事に、成功したのであつた。

新政府の基礎は、追々に、固くなつて來て、もう廢藩を行はなければ、新政府の威令が、行はれぬ事になる。唯だ恐る可きは、その場合に、舊藩主や、藩臣にして、頭迷なる輩が、騷擾を引越す事である。然るに、政府には、それを鎮壓する丈の兵力がない。全國へ渡つて、一時に起る騷擾は、兵力に據つて、叩きつける外はないのだが、その出來ぬからは、危険、此上なき事である。

けれども、此一事は、何時まで待つても、同じ事であつて、廢藩を行ふからは、必ず一度は、避け難いのであるから、寧ろ、此際に、斷行してしまへといふのが、三傑の覺悟であつた。若し此時に、之を行はなかつたならば、或は十年の後になつても、尚行はれなかつたかも知れない。

表面に於てこそ、天下は穩かになつたやうに、見えて居るが、全國を通じて、未だ徳川の昔を、夢みて居るものは少なからず在つて、錆びた槍を、恨めしさうに眺めて居る連中は、頗る多く居たのであるから、一日も早く、廢藩置縣を行ふて、新しい舞臺を開けねば、却て、恐る可き、禍亂が起きて居たかも知らなかつた。於此、三傑の勇斷は、時機を得て居たと、いへる譯だ。

三條や岩倉には、其點に就て、暗い所があつた爲か、初めは、三傑の決心を、早計の如くにも思ひ、且、諸藩の反抗を恐れて居たが、西郷の保證で、いくぶんの安心もあつたのだ。

乍併、此事は、百官有司の間に於て、さういふ風に纏まつても、陛下の觀慮が、其處に及ばなかつたならば、矢張り行はれた事であつた。然るに、明治天皇は、御列聖中ても、殊に優れたる、英主にて、あらせられし爲めに、是程の大問題を、少しの御懸念も無く、御裁可に相成つたのは、實に難しい事である。三傑の苦心も、さることながら、明治天皇の御聖斷を、國民は、深く感謝しなければならぬ。

是程に、大きな問題でなくとも、陛下の御裁可を、仰ぐべき事柄に就ては、一切の書類を整へて、差上げる事に、なつて居た。従つて、書類を御覽になれば、少しの疑義も起らずに、御裁可が願へるやうには、仕組んであるのだが、如何なる問題に就ても、決して盲判をなさらぬ、陛下は、必ず何事かの御下問があつて、何時も、奏請者が、御答へに苦しむ、といふやうな事があり、殊に、大きな問題に就いて奏請のありし場合には、必ず急所を突いて、御下問があるの、奏請者は、御答に窮して、御前を下る事も、屢々、あつたやうに、漏れ聞いて居る。

況して、廢藩置縣の如き、國政上に、大變革を來す可き、問題に對しては、流石の二傑も、顔を見合せる程に、急所を突いて、御下問があつたが、それには一一、御答へを申上げて、即日、御裁可といふ運びになつた。

一切の布令、其他の書類も整へて、もう是で宜しい、といふまでの臆立が出来てから、愈々、諸藩へ對して、御沙汰を下す事になつた。

第一に、藩長土肥の四藩主が、參内を仰せ付けられる。是が、明治四年の七月十三日であつた。

其時、四藩主に對して、下賜つた御沙汰の文意は、斯うである。

「天下の大勢に鑑みて、舊來の藩制を廢し、府縣を設けて、王政の普及を圖る。それに就ては、幾百年の因襲を、一朝にして打破るのであるから、汝等は、先づ以て、維新の鴻業に従ふた、精神を忘れず、飽くまで、此大令を奮發



して、他の諸藩主をして、必ず過なからしむるやう致せ』  
 既に覺悟はして居たであらうが、御沙汰を承つた時、四藩主の心持は、どんなであつたらう。三百年來、傳へられた舊領土は、此御沙汰一つで、全く失ふのであるから、所謂、藩主としての權威も、全く消えてしまふのだ。四藩主の感慨は、非常に深いものがあつたらう、と察せられる。  
 それから、熊本、尾州、徳島、鳥取の四藩主へは、勅書を以て、御沙汰を下す事になつた。是等の藩主も、豫め覺悟して居たから、藩の代表者が、直に参内して、御受けをする事になつた。  
 當日の宮中は、異常な忙しさを、何となく、重々しい空氣が、掩ふて居るやうな、氣がしたと傳へられてある。杉孫七郎が、今、御廊下を、急いでやつて來ると、向ふから來たのが、鳥取藩の沖操三と、いふ者であつた。杉の姿を見ると、沖は、ずつと進んで、

「イヤ、杉さんか」

「これは、沖さん」

「今日は、御目出度う」

と云ひながら、沖が、頭を下げたので、杉は、聊か面食つた。何が目出度いのか、杉には、判らなかつた。

「今日は、廢藩の御沙汰が下つて、先づ王政復古の實も擧つた、といふものぢや。倒幕の御趣意も、愈々、相立つ事になつて、此以上の目出度い事は無い」  
 と、いふのを聞いた時には、思はず、杉が、一步進んで、沖の手を握つた。

「イヤ、有難い。君から、其一言を聴かうとは、思はなかつた。斯んな嬉しい事は無いよ」  
 と言ふて、其日は別れたが、鳥取藩の沖は、有繋ぢや、といふて、其名が、漸く百官有司の間に、知られたとの事である。

四

人が、出世をする動機は、意外の所にあるものだ。前に言ふた、沖操三といふのは、後の守固の事で、鳥取藩から出た者は、其當時に、幅が利かなかつたのであるが、沖は、鰻昇りに出世して、神奈川縣令に迄なつた。其原因は、宮中の御廊下で、杉に向つて言ふた「お目出たう」の一言からである。

後年には、奥田義人と、いふやうな人物も、出て來て、大臣にもなれば、東京市長にもなつて、頗る評判は善かつたが、是は時勢が、人材を容るゝやうな、世になつた結果である。奥田に、それだけの値打があるから、それ迄になつたのも、當然であるが、まだ、明治の初めには、必ずしも、人材が登用される、とは限つて居なかつた。薩長二藩が、權威を專にして、之に次いで、土肥の二藩であつたが、兎に角、此四藩から、出た人ならば格別、其他の藩から、出た人は、大概な智者でも、昇進する事は、容易に出來なかつたのである。沖が、神奈川縣令まで漕付けた、といふのは、先づ異數の出世と、言ふて宜からう。

四藩主が参内して、御沙汰を受けた。其晩の事であるが、西郷の許へ、藩主茂久から、直に來い、といふ、使者が來た。彼は、此一條に就いて何か苦情があるのだな、と、其處は、西郷だけに、豫め覺悟して、藩邸へ、やつて來ると、直に拜謁を許される。茂久は、澁い面をして、幾分か精神も、興奮して居るらしく、顔は上氣して、赤味を帯びて居た。左右に控へて居る、家來は、恟々して居るやうに見えた。

「今日、御沙汰に依つて、参内致すと、藩制廢止に就て、御説が下つたのぢやが、之に就ては、其方等は、豫て承知の事でもあらうが、何故に一應、余の耳に入れなかつたのか。其次第を聴きたうて、招いたのぢや」

西郷が、豫め覺悟した通り、矢張り其事であつた。

「恐れながら、御答へ致します。此事は、豫め申上げずとも、君侯に於かせられては、既に御承知の儀と、考へて居



りました」

西郷の一言に、茂久は、不審に思ふた。

「フ、ム、余が豫め心得て居つたらう、とは、何ういふ意味か」

『されば御座います。維新の際に、討幕の大義を唱へて、朝廷の御意に従ひ、出兵まで致して、各所の戦ひを、御引受けいたしたのは、ありや、封建政治を破つて、王政復古に、致す爲てござつた筈、して見ますれば、今日を待つまでもなく、既に廢藩の事は、行はれて居らなければならぬ譯でありました。それが、今日まで延々になつたのは、朝廷にも、御都合があり、又、諸藩の人心も、全く鎮靜に至らざりし爲で御座ります。斯くして、延び居りましたのが、今日になつて、やうやく行はれたまでの事で、敢て此件に限り、君侯の御耳に、入れるまでもなく、豫ての御覺悟と、考へて居りましたが、何故に、斯やうな儀に就て、御尋ねがあるので、ござりまするか、頓と御意が解りません』

斯う答へて、西郷は、茂久の顔を、じつと見詰めた。之には、茂久も、返す辭が無かつた。

維新の際に、討幕軍を、眞先に繰出した、薩藩は、廢藩置縣に、反對する事は、出来ぬ筈だ。維新の變亂に先立つて、王政復古の御沙汰が、既に出て居る。して見れば、廢藩置縣は、其時に、既に實行す可きであつた、と云へる。西郷は、流石に、巧い所を捉へて、答へたものだ。けれども、茂久の、西郷に對する不満は、管にそればかりでなく、外にもあるから、簡単に、怒の解ける譯はない。

『其方が、申す所は、一應の道理がある。供し、徳川を倒した結果が、自然に、さうなつて来る、といふ事は、固より覺悟の上ではあるが、今日、俄に御沙汰が、下る前には、豫め其方等が、陛下に向つて、申上げた事は、判つて居るのぢやから、何故一應は、余の耳に入れなかつたか、それを、申して居るのぢや』

「ハッ、其儀に就ては、何とも申譯は、ござりませぬ。廢藩置縣と、輕くは申しましても、實は、天下の一大事を、

斷行いたすのでありますから、晝夜をかけて、幾日かの會談でありました。様々の難關を押し退けて、此處まで漕付けまするには、容易ならぬ苦心も御座りました。且つ、秘密の中に、急速に運ばなければならぬ、といふやうな、事情もござりまして、前以て言上する事は控へましたが、それと申しますも、既に君侯に於かせられては、其儀を御承知とのみ考へた爲めて御座います。併し、只今の御言葉、賜りましたに就ては、偏に私の手腕りて、ござります故、幾重にも、御詫びを、仕ります」

前には、強く答へて、後には、優しく謝つて行く。其應答は、如何にも巧妙であつた。茂久も、此以上は、叱り付ける事もならず、其晩は、それで免されて、西郷は、歸る事が出来た。

薩藩でさへ、斯ういふ事が、あつたのだから其他の藩にも、同じやうな事が、あつたには違ひない。是だけの事を、考へて見ても、廢藩置縣の、容易でなかつた事は、判るのである。

五

三傑のみが、參議として居残り、大體の方針が定まつて、再び内閣の改造が行はれ、これから、廢藩置縣の問題が、閣議に上つて來たのである。

その間に、奏請の事は、二卿三傑が、既にすまして居る。手續きとしては少し可怪しいが、當時は、さうした遣方をしたのである。

この閣議に、連なつた人々を擧げて見やう。土州藩では、板垣退助、後藤象二郎、福岡孝悌、佐々木高行、肥前藩では、副島種臣、江藤新平、大木喬任、大隈重信、薩藩では、西郷吉之助、大久保利通、長州藩では、木戸孝允と、いふやうな顔觸であつた。是等の人々で、やり付けてしまつたのだから、陛下の御裁下と同時に、迅速に、運びが付けて行つたのも、當然な譯だ。



乍然、諸藩の中には、動搖も起きて、激しい反對の議論を、唱へるものも出て来たが、此時分には、藩主の意氣込が、昔のやうでなく、それに恐ろしいものは、時勢の潮流で、多少は、世界の趨勢も、解つて居たから、何うか、斯うか、反亂を起す、といふまでには至らずして、存外に、軽く済んでしまつた。第一に、政府が、何處までも安靜を装ふて、少しも遲疑なく、やり付けてしまつた、といふのが、是程の大問題を、手際よく片付け得た、一つの原因にもなつたのである。

江藤新平が、江戸城明渡しの際、人知れず、集めて置いた、國別地圖と、いふのがあつた。それは、幕府に於て、多年、其道の人に命じて、拵へて、置いたものであるが、之に依つて、廢藩置縣の分布が、巧く行渡つて、非常に便利を得た、といふ事である。城明渡しの際、混雑中に、在り乍ら、江藤が、さうした文書を、集めて置いた、といふのは、洗石に、江藤だけの事はある。

内閣には、有ゆる人材が、頭を揃へて居て、やり付けたし、畏れ多くも、天皇陛下の御裁下を経た、といふ事を、眞向に振翳して、掛かるのであるから、諸藩の動搖も、多少はあつたにしても、巧に壓へてしまつたのだ。

けれども、其後、尙ほ頑迷な輩は、舊藩政の習慣を襲ふて、何處までも、中央政府の命令を、拒否するが如き、態度に出て居た、といふ傾きはあつた。現に、福岡藩に於て、中央政府が、發した、紙幣が、一行に通用せず、却て、藩札の方が、氣受が好かつた。中央では、廢藩置縣の布令が、出て居るにも拘らず、福岡藩では、藩札でなければ、品物を買ふ事が出来ぬ、といふ、奇怪な事實があつた。

廢藩置縣に對する、一種の反抗と、視る可きであり、舊藩の勢力を以て、中央政府に、威嚇を興へて居たものである。其頃の大藏省は、非常に權力が強く、未だ内務省の無い時で、大藏省が、廢藩置縣の事務を、執つて居るのであつた。

大藏省の擔任する、政務は、頗る多端であつたから、その役人にも、人材を網羅して、何の方面にも、向くやうに

はなつて居た。試に重立たる者を、擧げて見れば、伊藤博文、中島信行、松方正義、上野景範、遠藤謙助、陸奥宗光、安場保和、前島密、吉田清成、津田出、益田孝、伊集院兼寛、澁澤榮一等の遺手は、大藏省に集まつて、井上の指揮の下に、働いて居るのである。

されば、當時、井上の勢力は、實に豪いものであつた。世話好の氣象が、何時か知らず、干渉好になつて、何事にも、自分から、手を着けなければ、やらせなかつた、といふ風であつたから、各省との折合が、非常に悪かつた。

然るに、福岡の藩札一條が、涌いて来た。井上は、斯うした場合に、問題を、自然の成行に、委せて置く、といふやうな人ではなかつた。民部省の役人で、親しい交りのある、大江卓を呼んだ。

『福岡藩に於て、廢藩置縣の今日、猶ほ藩札の行はれて居る爲に、中央政府の金札が、更に行はれぬ、といふのは、甚だ怪しからぬ次第であるから、早速、之を押し付けて、嚴重な處分を、加へて来るやうにして欲しい』

『宜しい、早速、參つて、手を着ける事にするが、それに就ては、從令、鐵砲は撃たぬまでも、多少の兵威を、示さなければならぬ、と思ふから、其點だけは、豫め御含みを願ひたい』

『宜しい』

と、打合せが済んで、大江は、福岡へ下つた。

此時には、大江も、死を決して、乗込んで来たのだ。昔からの大黒田の城下であつて、其藩臣が、中央政府の、威令に従はずに斯ういふ事をやつて、居る位であるから、無論、之を壓へやうとすれば、自分の生命が危ない位な事は、覺悟して掛かつたのだが、幸にして、大江の遺方が宜かつたので、兵力を用ひずに済んだのは、此上もない事であつた。

黒田藩の重臣を二三人、犠牲にして、東京へ引揚げて來ると、民部省は、既に廢止されて、自分の行く可き役所が無かつたのである。



まさか貸家の札は、貼つて無かつたが、民部省の門は、固く閉ざされて、番人も居なかつた。大江は、非常に憤激して、大蔵省へ、怒鳴り込んだ。  
 『自分は命賭て、是だけの大役を、果して來たのに、役所は廢されてしまつて、歸つて來ても、戸惑ひさせられるといふが如き事は、甚だ怪しからぬ』  
 と言ふて、怒つたが、政府の都合で、廢止になつたのであるから、怒るには怒つたが、誰一人として、對手になるべき者もなく、井上に迫つて、嚴談に及んだので、井上は、頭を掻きながら、頻に申譯けをする。  
 『洵に氣の毒だが、斯ういふ都合になつたのだから、何うか、免して呉れ。併し、君の働きに對しては、政府でも、決して放任しては置かぬ、我輩も、充分に盡力するから、さう怒らずに、我慢して呉れ』  
 といふ譯で、大江も、泣寝入に、なつたが、併し、此事が原因になつて、大江は、神奈川縣廳へ移つて、今といふ内務部長と、同じ役に就いた。

### 岩倉大使一行の洋行

非常に難しく思はれた、廢藩置縣の事も終り、政府の基礎は、漸く固くなつて、今は、内に顧るの憂ひが、少しも無くなつた。そこで、然るべき人物を見立て、海外に送り、各國の、帝王や大統領にも會見して、修交の誼を固め、傍ら文明國の風俗や、政治の實況を、視察して置く必要がある、といふので、頻に相談が始まつた。最初は、さまで計畫でもなかつたが、追々に擴がつて、果は、大袈裟な計畫に、なつて來た。勿論、其一行を率ゐて、行く者は、陛下の御名代といふ、資格を有つのであるから、従つて、一列に加はる者も、其人を選ばなければならぬ、といふ事になつた。  
 岩倉具視が、特命全權大使と、いふ事になつて、木戸孝允、大久保利通の兩人が、副使の格であつた。隨行者は、工部大輔の伊藤博文、外務少輔の山口尚芳、外務少書記の田邊太一、外務大書記の鹽田篤信、一等書記の福地源一郎、久米邦武、二等書記の柴田昌吉、渡邊洪基、小松濟治、其他、村田新八、岡内重俊、安藤太郎、金子堅太郎、山縣伊三郎、相馬永胤、田中貞吉、安場保和、佐々木高行、田中光顯、香川敬三等の人々であつた。其他に、鍋島直大、東久世通禧なども、附いて行く事になつた。尙、津田梅子や、山川捨松、其他に、十數名の婦人が加つて、一行の人数は、殆ど百五十人と、いふのだから、實に素晴らしいものだ。



昭和の今日でこそ、洋行するといふても、別に珍しくも思はれず、大してまた、難しい事でもなく、十六か七の青年が、小さな靴、一つ持つて、桑港通ひをして居るのは、横濱や神戸へ、行つて見れば、普通になつて居る位で、洋行したからといふて、それ程に驚きもしないが、まだ、明治の初年に於いて洋行といへば、大層なものであつた。若し、西洋へ行つて、歸つて来ると、其日から、月給取ならば、二割や三割の給料が、増す位であるから、洋行の有難味は、非常なものであつた。近頃では、怒な洋行なら、却て其人の相場は、下落するやうになつた。

「彼奴は、洋行歸りのハイカラだから、役に立たぬ」と、一言に、抹殺されてしまふ位だ。

岩倉大使の一行中では、四五人を除いて、初めて行く者ばかりであるから、仕度の業々しい事は、又、格別であつた。殊に、百五十人といふ、十ダース以上の大連中であるから、銘々の煩はしい仕度で、實に混雑を極めた。それが、ゴツチヤになつて、大騒ぎを爲るのだから、今の不規則な、團體旅行と、何の擧げ所は無かつた。赤毛布を背負つて、右大臣首め、百五十人が、揃つて押出したのだから、流石の毛唐も、之には驚いたらう。乍併、特命全權大使といふ、名義で乗出すのだから、各國政府でも、此一行を迎ふるのには、相當の準備をして、待構へたのは勿論である。一列中の、重立たる人の事は、少しく述べて置きたい。岩倉、木戸、大久保、伊藤の四人は、姑く措き、先づ鍋島直大の事から、言ふて見ると、是は、佐賀の藩主であつて、伶俐な殿様であつた。あまりに伶俐であつたから、維新の際には、極めて曖昧な、態度であつた。伏見鳥羽の一戦が済んで、大勢が定まると、初て乗出して来て、それから上手に立廻つたので、薩長土三藩の外に、肥前も加はつて、之を薩長土肥と、稱へるやうになつた。

伏見鳥羽の戦ひが、起る前には、薩長土肥の稱は無く、土州藩が、開戦と同時に、加はつて来たので、三藩聯合の形になつた。鍋島藩に限つては、沈香も焚かず、屍も放らずで、僅に江藤新平が、輕輩の身を以て、或は薩邸に隠れ、或は長州藩士の、庇護の下に、辛うじて勤王詩幕の、働きをして居たに過ぎなかつた。是が爲に、鍋島藩の、面目の

幾分は、保つ事が出来たのである。尤も、鍋島の殿様は、昔から狡い人が、續いて居たものか、聞く所に依ると、無暗に、妾を置いて、子供を産へては、領分内の、金満家を見立て、それに子供を授けて、色々な名義で、金を捲上げる、といふやうな事を、盛にやつたものだ、といふが、其所因か、佐賀人には、他を疑ふやうな調子があつて、一種、險しい氣象を、有つて居るのは、藩主が、斯うした風の遺方であつた爲に、自然、一般の氣風が、人を見たら、泥棒と思へ、といふやうに、なつて来たのであらう。但、此一事は、傳聞の儘を述べるのであるから、或は誤つて居るかも知らぬ。

それは、兎に角として、鍋島が、此一列に加はつて、洋行した事は、後日になつて、非常な利益であつた。といふものは、西洋から、歸つて来ると、直大の氣風が、全く一變して、佐賀の舊大守であつた、といふやうな點が、事毎に、現れて来た所から見れば、正に洋行の賜物である、と言へる。

一列中の小松濟治は、有名な才物で、一生を、通人として送つたが、一と頃は、裁判官として、評判の高い人であつた。殊に、守田勘彌とか、市川團十郎とか、或は中村芝翫とか、いふ人達が、借金で動けなかつたのを、救ひ出したので、東京の劇通の間では、小松を、神様のやうに、言傳へて居た。また、吉原へ行くと、今日でも、小松大盡の噂が、残つて居る位だ。こんな調子で、道樂が、過ぎた爲に、其末路は、甚だ振はなかつたが、福地と、此人が、東京の花柳界や、劇界に於ける、信望は、大したものであつた。

一一

貴族院議員として、世を終つた、男爵岡内重俊は、土州藩士であつて、八十歳前後迄、長壽を保つて居られたが、若い時分には、俊太郎といふて、相當に、活動した人である。

禁酒會長として、有名な安藤太郎、體格も立派だし、人物も洒落て面白い人であつたが、昔は、盛に酒も飲んだ



し、女にも戯れて、此人に就ては、随分、馬鹿らしい逸話もある。兎に角、酒を飲み厭てから、禁酒會を作る、といふやうな所に、此人が、世間を馬鹿にして居る氣象が、現れて居て、一寸面白い。

村田新八は、征韓論が破れて、西郷と共に、國へ歸つた時は、陸軍大佐であつたが、併し、其爲人は、頗る大きい所があつて、同人の間には、非常に尊敬されて居た。大西郷の如きも、此人に對しては、心から許して居たやうに、思はれる。大概の難しい事は、村田の意見で極めた、といふ位に、信用されて居た。岩崎谷の洞窟に籠つて居た西郷が、愈々最後の一戦を、試みた時分にも、村田を相手に、洞窟の中で、碁を打つて居た、といふ事である。洋行の時、村田は、大臣として、恥しからぬ見識もあり、人物も大きい、といつて、一行の者から、非常に、尊敬されて居た。

田邊太一は、舊幕臣で、幕末の際には、外交の事務を、執つて居た、といふやうな關係で、幕府の外交に就ては、重い關係を有つて居た人である。號を、蓮舟といふて、詞藻にも、富んで居た人だ。三宅雪嶺博士の夫人、花岡女史の實父である。

金子堅太郎は、伊藤博文の、配下の中でも、伊東巳代治、末松謙澄と、並び稱されて、世間からは、伊藤の三乾分といはれた一人で、一頃は、司法大臣にまでなつたが、今は、樞密院に隠れて、閑散に、日を送つて居る。福岡に近い、田舎の百姓家に生れて、今日の地位に昇つたのは、本人の努力が原因であつたらうが、人に優れた、才識が無ければ、あれだけには、なれなかつたらう。

相馬永胤は、彦根藩士である。初期の議會には、代議士になつたが、一度で、懲り懲りして、それから、候補も争はず、正金銀行の頭取で、ウンと、金を溜込んで、世間とは、殆んど没交渉になつた。此人と、目賀田種太郎と、星亨が、日本人として、パリストルの元祖である。

久米邦武は、文藝博士として、聞えた人だが、奇説を吐いて、世間を驚かした事、一再のみならず、學者の中では、

一應ある人物だ。古い話ではあるが、神武天皇を、神様の子でない、と斷じ、今までの歴史家が、神様扱いにして居たのに、嘲笑を加へ、神武天皇は、平凡の御方であつたやうに、論證した爲に、世間からは批難され、政府からは、蛇蝎の如く忌まれた、學者である。此洋行に就て、日誌の大部分は、此人の筆になつた。岩倉全權大使歐米回覽實記と、いふ書物が、六冊か七冊、出て居るが、此人の筆になつたのだ。

それから、安場保和と、いふ人は、細川の藩士であるが、一目眇して、其上に、念入りの跋で、風采の悪い人であつたが、一種の快男子として、傳へられた、曾て、水澤縣の知事を、勤めて居た時、給仕に使つて居た、兩人の少年があつた。それを、安場は、非常に愛して、水澤縣を去る時に、兩人の給仕を呼んで、

『お前達は、將來の見込があるから、是非、出て来い』

といふて、東京へ引上げてしまつた。少年は、安場を慕ふて上京したが、その見込通り、偉い者になつた。一人は今の朝鮮總督、齋藤實であつて、他の一人は、後藤新平であつた。同じ縣廳に、同じく給仕を、勤めて居て、而も、生れた町が、同じである、といふなぞは、西郷、大久保が、同じ所から出て、あれだけになつた、それに比ぶべき、珍しい話だ。併し、人物の比較は、及びも付かぬが、唯、同じ町内から、二人の大臣が出た、といふ事だけは、よく似て居る。

香川敬三は、皇后宮大夫として、長く隠れて居たから、世間からは、全く忘れられてしまつたが、維新の際には、大江草、中島信行等と、一つになつて、侍従、鷲尾隆聚を、擔ぎ上げて、紀州の高野山で、攘夷討幕の旗揚げをした時、參謀の一人であつた。伏見鳥羽の戦ひが濟んでから、官軍の一部將となつて、岩倉具定の、配下に屬し、江戸の南千住に、陣を取つて居た。新選組の隊長、近藤勇を生捕にして、世間に知られた。

田中光顯は、初め濱田辰敬といふて、吉田東洋を斬つた、那須信吾の甥に當る。薩長聯合の爲には、相當に盡した。その頃は、田中顯介と、いふて居た。



其他の人についても、種々の話はあるが、すべて略する事にした。

二二

此洋行に就て、随員中、最も働いたのは、福地源一郎である。他の人の事は省略しても、福地の事は、少しいふ置き度い。

日本の遊廓で、第一に數へらるるのは、長崎の丸山である。石で疊んだ、ダラ／＼坂を、丸山の方から、下りて來ると、左の出口が、有名な、カステラ屋の本家である。其筋向ふの所の、折曲りに出來て居る、一棟の長屋がある。其角から、二軒目の家で生れたのが、源一郎である、といふ事が、傳へられて居る。

生れ付いて、學問の才が、非常に優れて居た。十四歳の時に、人の爲に、碑文を書いて、非常な評判になつた。源一郎の生涯は、何ういふ事になるか、といふて、多くの人から、眼をつけられたほどであつた。

初の名は、一太郎といふて、十七八歳の頃には、幕府の書物役に、召出された位だ。安藤對馬守の手附であつたら、つまり内閣大臣の秘書である。未丁年にして、殊に舊幕時代に、此拔擢をうけたのは、異外といふ可きである。學問に就て、天才を有つて居た者は、何事に付けても、一般の若者よりは、優れて居たものか、早くから、女道樂を覺えて、吉原などには、足繁く通つた。何處の家でも、評判が好く、花魁などには、ひどく可愛がられた、といふ事であるが、兎に角、福地の女道樂と言ふたら、此頃になつても、築地邊りの、古い待合には、話の種が、遺つて居る。

明治の文壇に於ける功績と、其位地に就ては、敬意を、表す可きものがある。今の新聞紙の文章は、岸田吟香の力に依つて、其大體が出來て、更に福地が、相談相手になつて、研究した結果、上下を通じて、誰にでも解るやうな、一種の文體となつて、それが今、用ひられて居る、新聞紙の文章である。單に、これだけの點から言ふても、福地が、

今の新聞界に、貢獻した力は、大したものであつた。

殊に、西南戦争の時、新聞記者として、砲煙彈雨の間に出入して、其戦況を新聞に掲げた。それが爲に、東京日日新聞の聲價が、益々上がつて、讀者は、著しく殖えたのみならず、戦役が終つて、歸つて來た時には、木戸孝允の紹介で、畏れ多くも、明治天皇に、拜謁を賜はり、西南の戦況を、奏上に及んだ。恐らく布衣の士にして、御前講演は、福地が、元祖であらう。

それから後の福地が、東京に於ける、勢力は、日一日と、加つて來て、到頭、府會議長になつた。今日のやうに、猫でも杓子でも、少し運動費があつて、冠婚葬祭のお附合が、萬遍なく、やつて行ける者ならば、すぐ議員になれる、といふやうな、時代と違つて、其頃の公職に、就く者は、相當の力量が、有る者でなければ、なか／＼に、なれなかつたのであるから、同じ議長にしても、昨今の議長とは、頗る違つて居たのだ。

福地の住居は、下谷の池の端に在つた。郵船會社に、關係の深い、浅田正文の伴、正吉が、住んで居る家が、即ち福地の建てた家であつて、其時代には、豪華な生活をして、世間の問題に、上つた位である。花柳社會では、其名を言はずして、池の端の御前と呼んで居た。

芳町の奴は、都下一流の名妓であつた。二代目は、川上貞奴であるが、初代の奴は、生粹の江戸藝者であつた。貞奴が、奴といふた時代に、世間の問題になつたのは、實に容貌が美かつた、といふだけではなく、初代の奴を、繼いだ爲である。

福地が、初代の奴に、嵌り込んで、有頂天になつたのは不思議な位であつた。道樂といふ道樂は、やり盡して來て、殊に、女の事なら、善いことも、悪いことも、根こそぎ知つて居る、通人といはれたほどの福地も、色は思案の外で、奴の前に出ると、グニヤ／＼に、なつてしまつて、終にはお定まりの、落籍の一段になつた。

一貴郎の御眞實を受けて、是までに引立て戴いた、御恩は忘れませぬ。落籍のお話も、嬉しうござんすが、妾には、



中村時藏といふ、古い馴染がありまして、何の因果か、何うしても諦める事が出来ません。旦那が落籍して下さつても時藏の事だけは、思ひ切れませぬから、それさへ、御承知ならば、御意に従ひます』  
と、やつて退けた。

流石に、奴は、大した女である。大概な藝者が、今、落籍される、といふ場合に、最良客に向つて、是だけの事を言ひ得る者は、多くあるまい。

『宜しい。藝者商賣をして居る、お前の事だから、其位の隠食はあるだらう、豫ての覚悟だから、それを承知で、世話をしてやる』

『それさへ、御承知下されば、妾に、意存はありませぬが、併し、それでも、旦那は旦那として、崇めなければならぬので、寧ろ落籍をなさらないで、藝者の儘で、御世話をして下さる譯には、なりませんまいか。其代り、時藏さんの外には、浮いた心は有ませぬから、それだけは、特別に、許して置いて下さい、ネー、旦那』

福地は、煙に捲かれてしまった。斯うした事情で、福地は、奴の旦那として、世話を爲る事になつた。藝者はして居ても、福地といふ後桶があるから、何の不自由もなく、立派にやつて行く。別に、客を取らないでも、芳町の奴で何處へでも、押廻して行かれた。情夫の時藏は、吉右衛門の親父で、後に歌六といつた。

四

それ程に、惚込んで居た、奴が、病み付いて、醫藥の手當に、怠りは無いが、重體になつて、醫者が、見放してしまつた。福地の心配は、一と通りでなく、新聞社や、府會の用事などは、殆ど手に着かない位で、毎日のやうに、枕許に坐つては、慰めて居たのだが、何ういふものか、更に奴が、嬉しさうな顔をしない。

『お前が、病み付いてから、随分、長い月日になるが、只の一度も、僕に、笑ひ顔を、見せて呉れないのは、何ういふ譯か、病氣付いて居れば、誰にしても、苦しいものであるから、普通の人のやうに、浮いた心もあるまいが、偶には、笑顔を見せて呉れたら、宜からう』

何んな、偉い者でも、足駄を穿いて、首ツたけ惚れてしまふと、斯んな馬鹿者に、なつてしふのだから、女の魅力ほど、恐しいものはない。奴は、福地の言ふ事を聴いて、

『何と仰つても、可笑しくないから、笑ふ事は出来ませぬ』  
福地は下女を呼んで、姐と金槌を取寄せた。それを、奴の枕許に据えて、

『少し響くかも知れないが、我慢して居なさい。僕が、面白い事をして見せる』  
と言ひながら、帯に挿んで居た、金時計を取り出して、姐の上に戴せた。福地が自慢の、瑞西から取寄せた、有名な金時計であるが、奴は、之を見て居ると、臆て、金槌を取上げて、ガチ／＼叩きはじめた。見る／＼中に、硝子は壊れて、時計の形までが、滅茶々になつてしまつた。福地は、毀れた時計を、二本指で、摘み上げた。

『オイ、コラ』  
『ハイ、何の御用でございますか』

『裏の芥溜へ、之を棄てゝ來い』  
餘りの馬鹿々々しさに、奴が、ニヤリと笑つて、

『旦那、詰らない事を、なさいますな』  
と言つた。福地は、膝を打つて、

『それ、笑つた。お前の笑顔を見たら、俺の思ひ置く事はない』  
と言ふて、其日は、歸つて行つた。斯んな馬鹿々々しい事は、多くあるまい。奴は、平生から、時計の蓋を、パチンと、音を爲せて、それを聞くのが、好であつた。福地は、それから思ひついて、毀す音を聞かせやうとしたのである。



其後、奴は療養の甲斐も無く、鬼籍に入つてしまつた。  
 下谷區の人民が、訪ねて来て、  
 「區内の繁昌策を、考へて呉れ」  
 と、言はれた時、福地は、胸を叩いて、承知した。それが、上野公園地へ、天皇陛下の行幸を、仰いだ一條になるのだ。

其頃には、陛下が、普通の場合に、普通の所へ、行幸遊ばす、といふやうな事は、容易になかつたものである。流石の下谷區民も、此事を聞いた時には、非常な喜びと共に驚いた。

福地は、政府の大官に、澤山の懇意があつて、それづくに、手裏をもつて居たので、到頭、請願が容れられて、明治天皇は、上野公園へ、行幸遊ばす、といふ事になつた。

是を機會に、下谷區に祝賀會を催す事になつて、さかんな、祭典を行つた。上野公園に、公園らしい値打が付いて市民の遊び場所として、評判されるやうになつたのは、之れが始めてあつた。下谷區は、東京の北に偏在して、この區域も、今日のやうに廣くなかつた。商業も、頗る振はず、貧弱な土地であつたが、これが段々、繁昌するやうになつて来たから、區民の喜びは、一と方ではなかつた。

所が、行幸の請願を、爲る場合に、東京府會議長と、いふ肩書を利用して、東京府民總代の名を以て、願つて出たのであるから、忽ち其事が漏れると、市民の一部が、騒ぎだした。殊に、府會に於ては、福地と拮抗して、相争ふて居た、毎日新聞社長の、沼間守一が、福地を蹴落してやらう、と、常にそればかりを、附視つて居たのであるから、沼間は、好機逸すべからず、と、公開演説を開いて、福地の攻撃を始めた。

『東京市の、一部分に過ぎざる、下谷區の爲に、陛下の行幸を仰ぐ、といふ事が、既に不敬であるのみならず、何人も依託せざるに拘らず、東京府民總代の、各稱を濫用した、』といふのは、怪しからぬ事である。斯やうな事を許して置いては、將來の慣例にもなるから、大に福地を、責めなければならぬ』

と言ふて、例の雄辯を以て、福地の攻撃を始めたが、唯、一時の勢ひを、作つたゞけに留まり、大した反響はなかつた。長い間、福地が、養つて置いた、潜勢力は、遂に沼間が必死の攻撃も、左までの甲斐が無かつた、何時か沼間の方で、泣寝入になつてしまつた、といふやうな事もあつた。

沼間は、明治十四年の政變に乗じて、大隈重信の一派を、巧く説付けて、改進黨を組織した、發頭人である、維新の際には、佐幕軍の一部將で、板垣退助の、奥羽征討軍の、先鋒を擧めました。佛蘭西の兵法に、明るい人であつたが、一時に、座敷牢の苦を視て、特赦されてから後は、東京横濱毎日新聞を創めて、一と頃は、島田三郎、肥塚龍、角田眞平、青木匡、波多野傳三郎等の人々を、乾兒同様に扱つて、藩閥政府に、反對の論客として、なか／＼活動したものである。須藤時一郎、高梨哲四郎と、兄弟であつた所から特に其名を知られ、一時は、政界に於て、大立者として鳴らした。

五

もう一人は、渡邊洪基と、いふ人である。後には、帝國大學の總長にまでなつて、達磨總長の綽名を付けられたのが、此人である。此綽名は、面壁九年、何んな事にも辛棒する、といふ意味から、附けられたのではなく、體の恰好から顔付、癖は、髯の生え振までが、よく似て居る、といふので、この綽名を、得たのである。

今の、集會政社法の本に、なつて居る、昔の集會條例は、此人の作つたものだ。自由民權の議論が、盛になつて来て、政府に、反抗する者が、追々、殖えて来るので、此儘に、棄て置いたのでは、逆も、政府の權威を、保つ事が出来ぬ、といふので、民間の有志家を、壓迫する爲に出來たのが、集會條例である。原敬は、其時代に、渡邊の書記生として、地方行脚の時、一緒に、歩いて歩いた。



最初は、慶應義塾に這入つて、福澤諭吉の教を受けたが、其時分には、悪戯者が多く、寄宿舎に轉つて居た、學生には、却々、利かぬ氣のものが、多く居た。犬養毅、尾崎行雄等も、其一人であつたが、或る年の暮に、寄宿舎へ集つて、寒さ凌ぎに、土瓶酒を煽つて居るうちに、問題が起つた。

『もう、一日か二日、正月になるのだが、何うかして、雑煮餅を食ひたい』

と言ひ出した者があつた。けれども、そんな餘裕がある者は無く、工夫した末が、賄の爺を説きつけて、醬油や、鯉節の都合は出来たが、肝腎の餅を、買ふ錢がない。

『よし、それだけは、俺が、工夫してやらう』

と言ひ出したのが、渡邊であつた。達磨が、餅の工夫をする、といふのだから、こりやア有難い、といふて、一同は大喜びであつた。

『サア、渡邊、早く買つて来い』

『今、持つて来るから、先づ汁を拵へて、待つて居れ。序に、餅を焼く、金網も、取寄せて置け』

といふ掛聲で、出て行つたから、一同は、首を長くして、待つて居ると、稍や暫くして、渡邊は、歸つて来た。例の達磨面を、ニコ／＼させながら、

『サア、この通り、餅は、持つて来たから、小さく切つて、早く焼け』

と、投出したのを見ると、大きな供餅を、半分に分けたのである。

『イヤ、こりやア、渡邊、供餅だな』

『さうだ』

『フ、ム、貴様が、買つて来る、といふから、普通の熨斗餅だ、と思つたら、供餅を、買つて来たのだ、實に面白いな』

『此方が、厚くもあるし、雑煮としやちやア、一番に甘いのだからな』

『そりやア、さうだと』

『サア、始めろ』

といふので、小さく切つて、焼いては、鍋に投込み、舌鼓を鳴して、食つてしまつた。

所が、福澤の表玄關に、飾り付けてある、大きな供餅の蔭になつて、居る方を、半分、切取つて行つたものがある、といふので大騒ぎになつた。

全體、福澤といふ人は、あれだけの大學者であつたが、極めて、吝嗇な人で、夫人も、非常な干渉家であつたから、下女を初め、玄關番までが、取調べを受けて、大變な騒ぎになつた。段々、調べて見ると、渡邊が、そつと、忍んできて、半分だけ切取つて、持つて行つた。といふ事が判つた。それを、塾生が、一同で食つた、といふ事も知れたから、福澤先生、怒るまいことか。眞赤になつて、渡邊を呼び付けて、眼の球の飛出る程、劍突を食はした。

それから、二十幾年の月日を経て、渡邊は、大學總長になつた。福澤は、自分の學校から、出た者が、大學總長になつたのは、心からの喜びであつた。或日、渡邊を聘して、祝宴を開かう、となつた。併し、先生の家族だけが集つて、心ばかりの招宴を、催すのである。眞に水入らずの、師弟ばかりで、一夜を過ごさう、といふのであつた。渡邊は喜んで、三田の邸に出掛ける。昔話が、出て来て、主客共に、時刻の移るのを忘れた。其うちに、膳部の支度が出来た、といふ、一室の中に移つた。福澤は、渡邊の手を取つて、

『サア、それへ、直つて呉れ』

と、床の間の前へ、据ゑられた。今日は、渡邊も、御客さんとして、聘ばれたのだから、遠慮なく、上席に着いた。所へ、福澤の妻君が、恭しく持つて来たのが、大きな膳部の上に、鏡餅が半分と、庖丁が付いて、其脇には、大きな鍋に、雑煮の汁が、ブツ／＼沸いて居る。福澤は、眞面目な顔で、



「サア、渡邊君、今日の祝意は、是より外に、趣向の仕様が無かつた。遠慮なく、食つて貰ひたい」  
之を見て、渡邊は、思はずクワツと、顔が赤くなつた。塾生時代に、例の供餅の、盗み食をやつた、當時の事を、思ひ出して、思はず、頭を押へた。

「イヤ、こりやア、恐れ入りました。あの時は、御叱りを受けましたつけな」  
福澤も、ニコ／＼笑ひながら、

「何うちや、渡邊君、大學の玄關には、供餅は飾らないからね、ハツハツハツハ」  
夫人も、共に膝を進めて、

「渡邊さん、あの時位、私は、腹が立つた事は、ごさいませんよ。お正月のお祝ひに、供へ付けたものを、半分切つて行くなんて、随分、貴下は、悪戯者でございましたね。オホ、」  
渡邊は相好を崩して、

「ハツハツハ」

築しき一夜の、師弟の小宴は、是だけの趣向であつたが、甚だ味ひのある話だ。

六

岩倉大使の一行が、愈々、洋行と極る、最後の會議で、内閣に、意外の波瀾が起きた。

徳川を倒して、明治政府を造つた時から、文治、武斷の兩派は、自然と、其立場を異にして、軋轢して居たのだ。

乍、併、文官と武官の、單純な争ひに、なつて居たのではなく、武斷派の方にも、文勳のある者が、這入つて居て、文治派の方には、軍將であり乍ら、加擔して居る者も、あつたのだから、一概には言へないが、先づ大體に於て、文治、武斷の二派に別れて、暗闘は、随分、激しかったのだ。

西郷の方には、板垣、後藤、副島、江藤の四參議が附いて居る。それに、陸軍の重立ちたる者は、大概、西郷の部下に、喰付いて居たので、之に對して、岩倉右大臣を、主として、木戸、大久保、大隈、大木、伊藤などいふ、連中が、自然、相密つて對抗する、といふやうな傾きに、なつて居たのだ。文治派の重立つた者が、打揃ふて洋行する、といふのであつた。殊に、洋行の日限は、殆ど二年以上も掛かる、といふ見込であるから、其留守中の事も、豫め極めて置きたい、といふやうな譯で、閣議が、開かれたのである。

其時に、參議の一人たる、大隈重信が、斯ういふ事を、言ひ出した。

「此度、洋行する一行には、殆ど政府の主腦部とも、いふべき人が、半數以上も居るのであるから、不在中の政務に就ては、今から、約束して置くべき、必要があらう、と思ふ。僕の考へては、岩倉公以下の諸公が、不在中は、内外の政治の方針は、是まで通りとして、其上に、甚しい改革を加へぬといふ事にして、置きたい。又、文武の役人に就ては、奏任以上の者は、妄に黜陟を加へぬ、といふやうな事も、豫め此席に於て、極めて置きたい」といふ、意味の事を、言出したので、各參議の間には、澁つ面をした者もあつた。板垣退助は、元來が、理窟ツばい入で、疝積も強かつたから、直に立上がつて、

「唯今の、大隈參議が、述べられた事に對しては、全然、同意が出来ない。勿論、洋行する者は、國務を帯びて行くのであるが、留守をして居る者も、亦、國務を帯びて居るのであるから、獨り洋行する者にばかり、重きを置いて、留守をする者を輕んずる、といふやうな事は、甚だ怪しからぬ。大隈參議は、我々を、何と考へて居られるか」

晩年の大隈は、なか／＼の人氣役者で、何處へ行つても、大持に持囃されて、殊に、老人の演説としては、大隈が、一番に覇氣があつた、自分も、舌の動くに任せて、頻に喋り廻つて居たが、明治四年頃大隈は、閣臣の中でも、甚だ威力のない方であつた。尤も、維新の際に、何等の功績もなかつたが、唯、薩長土肥といふ、名稱の釣合の上から、鍋島藩を代表して居た、參議である、といふに、過ぎなかつたのであるから、勢力の無かつたのも、無理はない。板



垣が、指撥を振立て、大隈を一喝して、席に着くと、今度は、副島種臣が立つて、  
 「唯今、板垣参議が、述べられた事は、至極同感であつて、拙者も、板垣君と、同じ考へを、有つて居る。我々、留守をする参議の、面目にも關する事で、大隈参議が、いはるゝ事には、賛成が出来ぬ。大隈参議は、如何なる考へを以て、斯やうな説を吐かれたのであるか、明かにして貰ひたい」  
 副島は、鍋島藩で、大隈とは、同じ出身であるが、全然、性格の違つて居る所から、閣議の上では、屢々、斯うした衝突が、あつたのである。斯うなると、洋行連の方でも、大隈を、助けなければならぬ事になつて、段々、議論は、難しくなつて来た。之を、此儘に棄て置けば、洋行も、延期となる外なく、各國政府へ對しては、何月何日に出發する、といふ通知を出して、各國に於ても、それ／＼に、歡迎の準備を、爲て居る、といふのに、今更に、斯んな事で、洋行が延びるやうになると、國の體面上、甚だ面白くない、といふので、大隈参議の説には、甚だ不同意であるが、國の體面上、此場合は、滞りなく、洋行をさせよう、といふ考へを、有つて居た者も、少くなかつたのだ。江藤新平も、さういふ考へを、有つて居た一人で、副島が、席に着くと、直に立上がつて、  
 「大隈参議の注意は、唯、洋行せられる諸公が、留守中の事を、心配して居られるから、それに就て、安心を與へる爲に、注意したといふに過ぎまい、と思ふから、左までに、責むる程の事でもなからう。依つて、折角の發議を、此儘に打消す、といふのも、穩かたないと思ふから、参議の言はれた、言葉の中に、改革といふ二字があつたが、潤飾といふ文字に改めて、記録に遺す事にしたら、何うだらうか」  
 大隈が、斯う言ひ出したのは、無論、洋行派の意を受けて、爲たには違ひないが、江藤が、其一分を立てやらう、と思つて、言ひ出した説は、所謂、眞の引倒して、洋行派の急所を突いて、改革の二字も、潤飾と改めるなぞは、随分、戯けた言ひ分であつた。けれども、大隈は、大勢非なり、と見たから、流石に、惻巧な人で、其後は、何一つ言はずに、其日の閣議は、終つたのである。

七

斯ういふやうな次第で、折角の閣議も、滅茶々になつてしまつたが、洋行連も、斯んな事で、萬一、洋行が出来なくなると、一大事である、と思つたから、大隈参議を押へて、其後は一切、何も言はせない事にして、先づ大隈は、洋行連が、歸つて来るまでは、内政外交の上に、甚だしき潤飾を加へない、といふ事にして、納まりを付けてしまつた。

けれども、此一事から、居残りの参議連中は、甚だ不快の念を以て、洋行派を、見るやうになつた。何うしても、人は、感情の動き一つで、喧嘩もすれば、調和も出来る。斯ういふやうな事がある、と、不斷、思つて居た、様々の不平が、一時に出て来て、それからそれへと、感情を、悪くする事ばかりで、何時も、大事が破れるのは、斯うした事から、始まるものだ。洋行連に對する、留守参議の反感は、縱令、閣議は、それで治まつても、決して消えるものではない。

明治四年の十二月十二日、午後一時を以て、横濱から乗船する事になり、岩倉大使の一行は、新橋を發した。西郷首め、留守参議は、見送りとして、横濱まで行く事になつた。其他、本人の家族だとか、友人だとか、いふ者を加へると、此時の見送りは、實に盛なもので、同時に、其出發の有様を見物しよう、とする、野次馬が混るのだから、横濱の波止場は、随分の混雑であつた。

亞米利加政府が、好意を以て、廻して呉れた船に、乗つて行くのであるから、相當な船ではあつたが、併し、今日の歐洲航路の、定期船に比べたら、逆も、お話にならぬ。それでも、其時代には、非常に大きな船だ、といふて、送つて来た者は、眼を剝いて、驚いた位である。斯くて一行は、横濱を解纜して、亞米利加へ向つた。歸途に、汽車に乗込んだ、連中が、様々の戯談話の中に、或一人が、



「何うちや。随分、大きな船ぢやが、あアいふ大きな船へ、乗つて居たら、何んなに、波の荒れた時でも、恐ろしい事はなからう」と言ふと、直ぐ隣席に、居る者が、

「そりやア さうだとも、あの位の船に乗れば、安心には違ひないが、併し、音に聞く、印度洋の荒波には、へこたれるだらう。殊に、大暴雨にでも出會つたならば、如何に、大きな船でも、萬一の事は、保證が出来ぬぞ」

「そんな事はあるまい。大概な、暴風雨を受けても、あの位の船なら、大丈夫だ。我國の千石船でも、支海難や、遠州灘の暴風雨を乗切るから、如何に、印度洋の暴風雨でも、あれだけの船ならば、大丈夫だらう」

と、他愛もない事を言ふて、ワイ／＼言つて居ると、隅の方の腰掛に、ヂツと、腕を組んで、考へて居た、西郷は、暴風雨の話を、仕て居る連中の方へ、グツと向直つて、

「君等の話は、あの船が、暴風雨を受けて覆へる、といふ話をして居るので、ごわすか」

「こりやア、西郷さん、必ず覆へる、と言つて居る譯ではないが、暴風雨を受けては、堪るまいといふのですよ」

「イヤ、そりやア、暴風雨を受けたら、逆も堪るまいが、その儘、沈んでしまつたら、面倒が無うて、宜か思ふよ、ハツハツハー」

此悪辣な戯談には、流石に、車中の人達も、顔を見合せて、黙つてしまつた。西郷は、随分、戯談も言ふが、斯ういふ極端な、悪口を言ふやうな、人ではないのだ。それが、今日は何うしたのか。岩倉大使の一行が、暴風雨を受けて、その儘、沈んでしまつたら、寧ろ世話が無からう、と言つたのは、前からの感情も、あつたらうが、此頃の閑談に於て、洋行派が唱へた、例の發議に、不満を懷いて居た結果、斯んな戯談を言ふたのであるまいか。洋行連が、之を聞いたならば、あまり好い感じはしないだらう。此一事を以て見ても、洋行連と留守參謀の間に、酷い反感のあつた事は、判る。

俗て、洋行連は、横濱を出帆して、亞米利加まで直行しよう、といふので、船の中の混雑は、ひと通りでない。全體、日本人は、昔から旅行慣れないので、サア、旅行となると、我人共に、大騒ぎをする癖がある。僅か五日位の旅をするにも、大きな鞆を、四つも五つも、持つて歩く、といふのが、日本人の常例だ。旅行するのか、引越しをするのか、區別の判らないやうな、騒ぎをする。其處になると、外國人は、旅行慣れて居るから、大概な旅には、小さな鞆を一つ位で、済ましてしまふやうな譯で、甚だ輕便に、何の苦もなく、長い旅をする。尤も、服装からが、それに適して居るのだ。兎に角、日本人が、旅行慣れないのは、評判になつて居る位だ。殊に、明治四年の當時、初めて、西洋各國に旅行する、といふのだから、随分、其仕度も業々しく、手荷物も、大した數に上つたらう、と思はれる。又、一行の中には、津田梅子、山川捨松と、いふやうな人を首め、數名の婦人も居たのであるから、其連中の仕度だけでも、好い加減であつたらう。捨松は、大山元帥の夫人になつた。梅子は、女の古い洋學者として、評判の高い婦人であつた。此人達は、まだ年齢は若かつたけれど、其他に、相當の年齢になつた、婦人も居たのであるから、船の中の混雑は、ひと通りでない。殊に、大きいと言つても、其時分の船であるから、客室の設備なども、左迄に十分ではない、旅慣れない人達の、船中生活だから、逆も、締りの付くものでは、なかつた。従つて、此旅行中には、様々の奇談もあつて、詳しく書いたら、一冊の書物が、出来る位である。

八

一つ船に、乗つて居るのだが、岩倉は、何處までも奉られて、別物扱ひに、されて居たのだ。岩倉自身も、大勢の中へ出て、戯談を言ふたり、氣安く、對手になる、といふやうな事はなかつた。其代り、大久保と木戸が代つて、隨行員に對しては、一切の事を取締つて居た。併し、其下には、伊藤を首め、それ／＼に、受持を極めて、用事を擔任して居たから、木戸や大久保が、直接に取締をするのでは無かつた。



大久保は、極めて厳格な人で、平生は、邸に居る時でも、袴を着けて、人に接見した、といふやうに、極く眞面目な、人であつた上に、自から進んで、人と打解けて、話をするといふ風がなく、何となく、大久保に對しては、隨行員も、遠慮勝にして居て、成るべく、近寄らぬやうにして居たが、木戸は、大久保とは、全く違つて、有ゆる苦勞をして来た、果の人として、なかく、洒落な所があつて、戯談も言へば、悪戯もする、といふやうな譯で、隨行員も、心置きなく、木戸には、戯談も言へるから、自然、木戸の室には、隨行員が、何時でも、ガヤ／＼言ひながら、集つて居た。大久保が、何れ程、厳格な人であつたか、といふ證據には、後に、内務卿になつてからも、大久保のテーブルの上にあつた、煙草盆の掃除をする、必要が無かつた、といふ位に、大久保に、會ふ者は窮屈がつて、煙草すら喫まずに、用談を済ますと、ズン／＼歸つてしまふ、といふやうな、調子であつた。岩崎彌太郎が、あれだけに豪傑肌の人であつたが、大久保には、一目も二目も置いて、思ふやうに頼む事も、言ひ出せなかつた、といふのであるから、是等の事情を以て考へても、大久保が、非常に厳格な人であつた、といふ事は、明かである。従つて、さういふやうな點から、あまり人が、懐いて來たい爲に、幾分か誤解もされて、西郷の如く、人氣が無かつた、といふのも、或は是等の事が、原因になつて居たかも知れない。

今、伊藤が、木戸の前へ、やつて來て、何か頻に話をして居る所へ、食堂ボーイが、ツカ／＼と、這入つて來た。伊藤は、之を見ると、振返り乍ら、

「何ぢや」

「一寸、伺ひます」

「何ういふ事か」

「唯今、大久保さんの所へ行きましたら、此方へ行つて話をしろ、と言ふもので、ございますから、此方へ参りました」

「フ、ム、木戸公に、何か申上げる事がある、といふのか」

「さうで、ございませう」

「そりやア、何ういふ事か」

「外の事でも、ございませぬが、食事時になりました、御供の方が、如何にも亂暴で困りますから、一應、其事情を申上げて、取締を願ひたい、と思つて、参りました」

「そりやア、何ういふ事柄か」

「第一に困りますのは、食堂で、煙草を喫んで、其喫殻を、食器の中へ、突込んで置かれるのは、實に困りますから、其事を、一二の方に申上げましたら、今度は、啖唾を吐込んで、置くやうなことがあります、掃除をすれば綺麗になる、とはいひながら、さういふ事をされては、洵に困りますから、何うぞ食器の中に、汚い物を入れる事だけは、御差止め下さるやうに、願ひたいのです」

「成程、それは、宜くない事だ。此方から、厳しく言ふて置くから、免して呉れ」

「それから、もう一つは、盛込の食物を、我勝に手を御出しになつて、丸で奪合ふやうにして、御取りなされる事は、私の方にも、それ／＼都合のある事で、ございますから、さういふ事の無いやうに、願ひたいのです。又、果物や菓子のやうなものが、ありますのを、食事中に、無暗に取つて、食へてしまはれますが、後で配ります時に困りますから、是も一應、御注意を願つて、置きたいのです」

今改めて、ボーイに言はれないでも、その状態は、伊藤も、今迄に、見て見るのだから、困つた事だと、思つて居た所へ、ボーイから、此苦情が出て來たのだから、何とも申譯のない事であつた。

「如何でございませうか、只今、お聴きになつた通りの次第で、何とか取締りを付けなければ、船長が、外國人ですから、後で笑はれるやうな事があつても、困りますが、何うしたものでございませう」



「さうぢやね。氣の毒ぢやが、君、其取締りを、やつて呉れ」  
 「イヤ、私は、御免蒙る」  
 「何故か」  
 「何故か、といふて、あの連中の取締りなぞが、出来るものではありませぬ。寧ろ外の者に、申付けた方が宜しいてせう」

「さうか、それぢや、誰でも、然るべき人を、選んだら宜からう」  
 流石に、伊藤は、伶俐な男で、此取締りを引受けずに、外の者に、押付けてしまはう、とは、巧い考へであつた。伊藤が、木戸に、言ふた通り、この取締りが、普通の人間に、出来るものではない。そこで、伊藤は、木戸の部屋を出る、と、取締の方法を、いろ／＼と考へた。

随行員の中に、内村良藏といふ、男があつて、既に一度は洋行して、頗る西洋慣れて居る、男であるが、何事にも出這張つて、人の世話を焼くのが、好きな性質である、といふのを、見込んで居たから、自分の部屋へ、内村を呼んだ。

「君に、頼みがある」

「ハイ、何てございますか」

「今まで、氣が付かずに居たが、是だけの人數になると、何事に付けても、規律を正しくやらぬと、間違ひ勝ちになるから、第一に、食堂の取締りを選ばう、と思ふのぢやが、君、それを引受けてくれる事は、出来ぬかい」

食堂の取締りなどは、詰らない事だけれど、世間には、よくある奴で、何でも、役を言ひ付かつて、肩書が出来れば、嬉しがるといふ、俗に謂ふ、幹事病なるものに、取付かれて居る者は、多くあるのだ。内村が、其患者の一人で、是非、何かの世話を、焼いて見たい、といふ風の男であつたから、一も二もなく承諾して、

「宜しうございます。それでは、食堂の取締りは、私が、御引受け致しますから、御安心下さい」

内村は、大した役でも、言ひ付かつたやうに、非常に喜んで、肩を怒らして、出て行つた。其後姿を見て、伊藤は、ペロリと、舌を出したが、伊藤も、罪な事をしたものだ。

九

西洋料理は、一皿宛、持つて来て、其食ひ終るのを待つて、直に皿を引込まして、それから代りの皿が、出て来る、といふやうな事に、なつて居るから、何時でも、テーブルの上は、綺麗に片付いて、居る。之に反して、日本の料理は、一品宛運ぶのだけれど、食事の終るまでは、運んだ器を、片付けずに置く、といふ仕方になつて、居るのだから、長い間、其習慣に慣れて居る、連中が、俄に西洋料理の、一品宛、片付けて行く、急がしい食ひ方になる、と、誰しも閉口するやうであるが、澤山の品物を、狭い膳の上に、列べて置いて、彼方、此方と、箸でツツ突き廻して、それから、美しい不味い味を、といふのは、西洋料理の方には、ない事だから、洋食の宴會などに、出掛けると、よく日本人が失策つて、ポールの物笑ひに、なる事がある。洋食が、流行り出してから、もう五十年にもなるが、まだ、洋食のテーブルに着く、と、ヘドモドする人が多いのだから、況して、明治四年の頃の、船中の食卓に、着く人達が、ポールに、苦情を言はれないやうに、食事をやり終る、といふやうな者は、さう澤山に、無かつたのは當然である。殊に、そんな事には、一向に頓着しない、傑豪連が、揃つて居て、それが無遠慮に、禮儀も構はず、食卓を騒がすのだから、何うせ、ポールから、苦情が出るのは、不思議でもなかつた。

僕等が、よく精養軒や、帝國ホテルへ、行つて見ると、不慣れた日本人が、這入つて来て、ポールが、皿を引きに來るのが、早いのに驚いて、膝の上に、新聞紙を擴げては、ピフテキの食ひ餘したのや、コロツケの食掛けたのを、



「コツリ包んで、袂へ入れて居るのを、屢く見掛ける事がある。スープを飲むにしても、匙をガチャガチャやつて、スー／＼音をさせて飲むが、嚴ましく言ふと、あれも、不可いのだ。日本の椀盛などは、初めから吸ふやうに、教へられて居るのだから構はないが、西洋人に言はせると、スープは飲むものであつて、吸ふものではない、といふのが、一般の慣ひに、なつて居るのだから、少しも音をさせないやうに、コツリやつてしまふのが、作法である。けれども、そんな作法なんぞに頓着なく、スー／＼吸ひ込むばかりでなく、ヒドイのになると、皿の縁へ、口を付けて、吸ひ込むのなんぞが、あるのだから、逆も堪つたものではない。食方が、間違つて居るのは、猶だ宜いとして、美しい皿を、背中へ忍ばせたり、フォークや、ナイフの綺麗なのがあると、袂へ入れて、歸るなぞといふ、恐ろしいものもある。先年、東京に於て、宗教家と教育家が、集合した時にも、精養軒で非常に食器が、無くなつた爲に、精養軒の支配人から、政府へ對して、器具の粉失料を、請求して來た、といふやうな、珍談もある位で、斯うした場合に於ける、日本人の公德心は、實に驚くほど、缺けて居るのだから、困つたものだ。況して、宗教家や教育家が、やる事だとして見ると、さういふ者に、教へられる國民は、實に禍であると思ふ。

備、内村は、伊藤から、言ひ付けられて、自分は、一ばしの役目を引受けた積りで、第一に作つたのが、食事心得書と、いふものであつた。之を十數枚作つて、食卓の上に、列べて置いた。愈々、食事が始まる、と、自分は、指揮役として、食卓にも着かずに、ボーイと、一つになつて、遠くの方から、立番をし乍ら、一同が食事を始めるのを見張つて居る、といふのだから、面白い、伊藤は、内村が、威張つて居るのを見て、可笑いとは思つたが、ヂツと可笑しさを怵へて、成行を見て居ると、頻に何處かで、バリ／＼と、はげしい音がするから、軟かい肉が、出て居るのに、そんなに、音がする譯はない、と思つて、其方を見ると、村田新八が、フォークを、バリ／＼噛んで居る。皿の中に、食物が無くなつたから、といふて、フォークを噛るのなぞは、随分、亂暴な譯だが、内村の書いた、食事心得書を見て、頻に觸つたので、態と、フォークを、噛んで居るのだ。フォークは、何ういふ持方をしろ、とか、ナイ

フは、何ういふ風に置け、とか、いふやうな事が書いてあるから、態と、斯ういふ悪戯を、爲るのであつた。内村は、苦い顔をして、チロ／＼見て居ると、そのうちに、岡内重俊が、口に一ばい肉を頬張つて、ムシヤ／＼やりながら、頻に高聲を揚げて、喋つて居たが、可笑しな事でもあつた、と見えて、プツと、吹出したから堪らない。口に這入つて居た肉が、四方に、ペラ／＼と散つて、周囲に居る人が、之を吹掛けられるやうな譯で、ドツト、聲を揚げて、それを避けやう、として立つた機に、誰か知らぬが、テーブルの角に、引ツ掛かつたので、ガタ／＼ツと、はげしい音がする、と、テーブルの上に、戴つて居た壺が、ガタ／＼轉がつた。之を見て居た、内村が、怒るまいことか、眞赤になつて、傍の臺の上に立つて、

「諸君」

と、一と聲呟鳴つたから、大騒ぎを、やつて居た、連中も、流石に、鳴を鎮めて、ヂツと、其方を見た。

「吾輩は、伊藤閣下より、御指名に預つて、食堂の取締りを、命ぜられたのであります」

ドツと、喊の聲を揚げて、一同が笑つた。内村は、何て笑はれるのか、少しも解らない。益々、上氣したらしく、

「依つて、我輩は、食堂心得書と、いふものを書いて、諸君の御手許へ、出してあります。然るに、諸君の中には、其心得書に反いて、亂暴な、食事の仕方をする、人がありますが、さういふ事をなさる、と、是から先、それ／＼外國人の中へ這入つて、食事をしなければならぬ、といふ場合に、差支が生じやう、と思ひますし、第一、斯ういふ事が、外國人に知れますと、日本の國辱に、なるのでありますから、何うか、さういふ下行儀な事は、ないやうに願ひます。そこで、一應、御注意をして置きますのは……」

一同が黙つて、聽いて居るのを、宜い事にして、内村は、益々、西洋通を振廻して、食事の講釋を始めやう、とした時に、誰か知らぬが、プツと一發、大きな尻を放つたので、又もや、一同は、ワツと、喊の聲を、揚げて笑つた。流行に、内村は、眞赤な面をして、眼ばかりパチつかせて居る、と、此時に、村田が、



「イヤ、内村どん、少々待ちなさい。君が、如何に食堂の取締りて、殿しい事を言ふても、君の指圖には、従はぬよ。今の一發は、君の言ふ事に不平ぢや、といふ證據ぢや。即ちブウブウ言ひ居つたぢやないか」  
到頭、村田の混返して、内村の演説は、オジヤンに、なつてしまつた。

一〇

食堂の騒ぎが鎮つて、一同は、自分の部屋へ、歸つて来た。伊藤は、木戸の前へ出て、頻に笑ひながら、食堂の話をして居る。

「何うも、困つたものぢやね。内村も、あまり世話を焼き過ぎるからぢやが、一同も、あまりに不行儀ぢや。併し、船の中は退屈ぢやから、あの位な事は、黙つて居た方が、宜からう」

「どうです。マア、閣下は、あまり仰しやらぬ方が、宜しうございませう。そりやア、内村のやうに、殿しく言はずとも、ヤンワリと、話をした方が可いのぢやが、あの連中が、容易に、人の言ふ事を、聞くものでないのですから、私は、貴下から仰せ付かつて、御免蒙つたのです。内村の奴は、見得坊で、何でも、役さへ付けば、喜んで居る奴ですから、チヨイト、試みてやつたのですが、到頭、一度で失敗つてしまひました。アツハツハー」

「君も、なか／＼、人が悪いな」  
所へ、足音暴く、這入つて来たのが、例の内村だ。

「ハツ、一寸、申上げます」

「イヤー、飛んだ御迷惑でしたな」

「私は、唯今限り、食堂取締は、御免蒙りますから、御届けに参りました」  
「マア、さう言はずに、もう少し辛抱して、やつて見て、貰ひたいものぢや」

「イエ、何と仰せられましたも、アアいふ亂暴な連中を、對手にして居ります、と、遂に食事の爲に、果合ひをするやうな事が出来ます。命賭で、食堂の取締りは出来ませぬから、御免を蒙ります」  
如何にも、其態度や言語が、眞面目であるから、木戸も、可笑しさを懐へて、

「よし／＼、それぢや、君は罷めたら、宜からう」

「ハイ、斯んな馬鹿々々しい、目に遭つたのは、初めてでございます」

「マア、さう怒らぬでも、宜からう」

「あまりに人を、馬鹿にして居ます。私が、心得方に付いて、話をして居ります時に、放屁をするなぞとに、實に人間の禮を、辨へない連中で、ございますから……」

伊藤は、堪らなくなつて、

「ハツハツハー、君のやうに、さう眞面目では、逆も、長生は出来ぬぜ」

「貴下も、亦、私を混返へすのでございますか」

「決して、さういふ譯ぢやないが、マア宜いさ、彼方へ行つて、息んで居たまへ」

内村は、プ／＼怒つて、出て行つた。

「如何です、アアいふ、眞面目な人間は、澤山ありますまい」

「君が見立てた、食堂取締係ぢやから、適任でもあらうが、今の連中の取締には、チト不向ぢやらうよ」

兩人が、頻に話込んで、居る所へ、掃除係のボーイ頭が、這入つて来た。伊藤は、チロリと、それを見て、ハ、ハ、又何か苦情を、言つて来たな、と、思つて居ると、案の定、

「貴下方、連れて来ました、皆様、亂暴あります。私、困ります。叱言言ふて下さい」

「ハ、ハ、何ういふ事をしましたかな」



「便所、汚しをして困ります。大便、戸の外に致します。掃除いたします時、困ります。殿しく取締つて下さい」  
「宜しい、承知しました。よく言ひ付けて、もう、さういふ事は、無いやうにする」

「ノー、いけません。私と一緒に来て、見て下さい」  
「イヤ、見なくても宜しい。よく判つて居る」

「ノー、判りません、来て、御覽なさい」  
無理遣に、伊藤の手を引張るから、之には伊藤も、聊か閉口した。木戸は、ニヤ／＼笑ひながら、

「折角、来て見ろ、といふのぢやから、汚い所も、見て来たら、宜からう」  
「さうですな。それぢや、行つて見ませうか」

不承々に、伊藤が、ボーイに、連れられて来て見ると、イヤ、ハヤ、御話にも、ならぬ仕儀で、便所に、内外の區別が、殆どない。足も、踏み立てる事の、出来ないやうに、糞小便が、放れ流しに、なつて居るのだ。之には、流石の伊藤も、鼻を摘んで、歸つて来た。

「閣下、なか／＼、エライ事ですぞ」  
「フ、ム、何んな事か」

「何んなにも、斯んなにも、逆も問題にならぬのです。あれでは、ボーイが、苦情を言ふのも、無理はありません」  
「それぢや、一應、皆に言ふたら、宜からう」

「併し、内村の二の舞をするのも、馬鹿々々しいですから、御免蒙りたい」  
「イヤ、さういふ事の無いやうに、我輩が立會つてやるから、一應、言ふて置いたら、宜からう。食事の時の、戯談と違つて、さういふ事は、嚴格に、取締つた方が、宜からう」

流石に、苦勞人の木戸も、自分達が、這入る便所を、さう汚されては、矢張り迷惑をするのだから、伊藤を連れて、甲板の運動場へ、やつて来た。直に一同を集めたから、皆、やつて来て、控へて居ると、伊藤は、一段高い所へ上がつて、

「是より、諸君に、一應、御注意申します。是は、木戸公より、確く命ぜられたのでありますから、我輩の言とせず、木戸公の御言葉として、御聴取を願ひたい」

流石に、伊藤は、場慣れて居るから、巧い所へ、遁を張つて、木戸公の名前を、頻に言ふので、一同も據所なく、謹んで聽いて居た。

「外の事では、ありませんが、便所の取締りに付いて、申述べて置きたい。誰にしても、汚い事は嫌ふものであるから、各自は用心して掛ければ、さう汚さずに、済む事だらう、と思ふ。全體、普通に使つても、汚い所であるのを、内外の區別なく、放れ流しをする、といふやうな事になると、益々汚くて、ボーイの方の苦情も、起つて居るので、すから、此上、諸君が、自から制して、さういふ不都合な事を、しないやうにせない、と、船長の方から、苦情が出た時、我々の不面目になる。此間の食堂では、屁一發で済んだけれど、今度は、音ばかりでなく、正味の話ですから、よく／＼御注意を願ひたいものです。一寸、此事だけを、御注意して置きます」

汚い事に就ての訓示だが、それを巧に、愛嬌を振舞いて話したから、一同は、可笑しさを堪へて、クス／＼やつて居たが、反抗して騒ぐやうな者は、更に無かつた。兎に角、一同が、洋服を着たり、脱いだりするものが、不慣である爲に、斯ういふ疎勿もしたので、中には、悪戯半分に、やつた者もあらうが、大概は、袴の取脱しが、億劫であるに、愈々といふ時まで、我慢して行かずに居るから、サアとなつて、便所へ駆込んで、思ふやうに、鉦が脱れない。袴吊が引掛かる、といふやうな譯で、間に合せに、外へやつた者も、あるのだ。其後へ、来た者は、汚なくてはひれないから、更に其手前で、用事を済ませて来る、といふやうなのが、段々、重つて来て、到頭、便所の外が、便所になつた、といふやうな事にも、なるのであつた。けれども、伊藤の訓示が、存外に利目があつて、これからは、



便所を汚さずに済んだ、といふ事である。連名を見ても、實に立派な者ばかりであるが、昔の洋行には、斯んな事もあつた。

一一

今のやうに、一萬噸以上の、蒸汽船が、僅かに十二三日で、亞米利加へ着く、といふ時代とは違つて、小さい船が森々たる、大洋の中を、這ふやうにして、行く時代の事であるから、従つて、航海の日數も要かり、船中の無聊は、言ふまでもない。従つて、様々な珍談も、湧いて来るのは、無理のない事だ。

大久保の部屋は、相變らず、人が集つて來ない。何時も、大久保は、眞面目な顔をして、椅子に掛かつて居る。所へ、福地源一郎が、急足で、飛込んで來た。

「オー、福地君か」

「ハイ、一寸、申上げたい事があつて、來ました」

「何ぎや事かな」

「外の事でもありませんが、斯ういふ事を、打棄て置くと、將來の風紀にも、關係する事でもありますから、一應、述べます」

「フ、ム、何ぎや事か」

「随行員中の、或男子と婦人が、怪しからぬ所業に及んだのですが、斯ういふ事は、嚴重に取締つて置かぬ、と、是から前途も、長い事ですから、是が爲に、飛んでもない醜態を、外國人に、見られるやうな事が出來やう、と思ひますから、嚴重の御取締を願ひたい、と思ひます」

「フ、ム、そりやア、何ういふ事か」

「つまり、一言すれば、く、ツ、つ、いたのですな」

「何が、く、つ、つ、いたのか」

「男女の野合ですな」

「そりやア、怪しからぬ事ぢや」

「何うでせう。随行員の中から、裁判官を選んで、兩人の取調べをした上、相當の罰に處するといふやうな事にしたら、何んなものでせうか」

大久保は、澁い面をして、

「馬鹿な事を、言はつしやい。そぎや事が、出来るか」

福地は、色々と、大久保に勧めたが、眞面目な大久保は、一向に取合はない。どう話を持ちかけても、取合つてくれぬから、仕様が無い。そこで、福地は、大久保との相談では、駄目だと思つた。

「それぢや、私は、御免蒙ります」

「ウム、あまりそぎや事は、騒がぬ方が、宜か」

福地は、室外へ出て、考へたが、此儘に止むのは、癪に觸つて叶はぬ。今度は木戸の部屋へ、這入つて來た。

「一寸、御相談があつて來ました」

「オー、福地か、何ぢやい」

「實は、同行者中で、野合いた奴があるのですが、之を何とか、處分しなければなるまい、と思ひますが、何うしたものでせう」

「野合いた者が——そりやア、何ういふ譯なのか」

「こりやア、驚きましたな。閣下のやうな、酸いも甘いも、知つて居る方が、野合いたの一言が解らぬ、とは、驚き



入りました。男と女が、野合したのです』  
 『叱ッ、大きな聲をするな。そりやア、飛んでもない事が出来たな。それは、誰か』  
 福地は、男と女の名を言ふて、處分方を相談した。流石の木戸も、之には聊か困つたのは、此狭い船の中に、大勢の男と女を、一緒に連れて来たのだから、初から、取締は嚴重にする、必要があつたのだ。斯ういふ事が、出来てしまつたのでは、今更に、幾ら不取締を、繰返した所で、致方がない。といつて、打棄て置けば、其外にも、婦人が居るのだから、さらに間違ひが出来るだらう、と、幾分は不案の念に驅られた。

『何うしたものぢやらうな』

『私の考へては、随行員の中から、裁判官と検事を選んで、それに、男と女を、被告人として引出し、他の随行員を傍聴人に擬して、公衆稠座の中で、面目の悪い思ひをさせたら、後の者は憤んで、さういふ事は、仕なくなりませうし、既に犯した者は、之に懲りて、再び醜行を續けぬ事になるだらう、と思ひますが、何うてせうか』

馬鹿らしい事だ、とは思つたが、木戸は、全體、そんな悪戯が、好きな方で、實は、無聊に苦しんで居た折柄、やつて見るのも面白からう、と考へた。

『それぢや、伊藤を呼んで、相談して見やう』  
 と、いふ事になつた。

此男女は、誰かといふ事を、ハツキリさせたい、と思つて、色々と搜つて見たが、當時の關係者は、決して其名を言はず、男の方は、兎に角に、婦人の方が、今、立派な身分になつて、居るのだから、恐らく遠慮しての事だらう、と思ふが、當時、同行した婦人の名を、調べて見て、大凡の想像は、つくだらうと思ふが、今、此場合には、さういふ次第であるから、男女の名は、憤んで掲げない事にする。

伊藤を呼んで、相談すると、下地は好きなり、御意は良し、斯んな悪戯は、極く好きであるし、殊には、一行中

の或る一人が、同行の婦人と、野合したといふのだから、幾分の嫉妬も混つて、懲しめの爲に、窘めてやれ、といふ考へになつて、伊藤は、直に賛成した。そこで、裁判官と、検事と、陪審官と、別に辯護人を極める、といふ事になつて、誰が宜からう、といふので、段々、相談になつた。

『如何てせうか。閣下が、自から裁判官の役を、勤めて戴く譯には、なりませんまいか』

『宜からう。我輩が、やつて見やう』

木戸が、裁判官を、引受けてくれたから、伊藤は喜んで、

『さうなれば、私が、検事の役を、勤めませう』

『ウム、そりやア、宜からう。辯護人は、誰にするか』

『安藤は、何うてせうか』

『それは、適任ぢやらう。福地の考は、何うぢや』

『宜しいでせう』

『陪審官は、誰にしようか』

福地は、少し考へて居たが、

『田邊が、宜いでせう』

『田邊は、眞面目すぎて、面白うあるまい』

『イヤ、陪審官は、眞面目の方が、却て面白いです。是非、田邊になすつたら、何うてせうか』

『それでは、田邊でも、宜しい』

『それぢや、私が、話して参りませう』

『ウム、うまく話してくれ』



福地は、田邊の部屋へ、飛込んで来た。  
田邊太一は、頻りに書物を出して、読んで居る所であつた。福地が、這入つて来るのを見て、

「ヤア、何ぢやい」

「外でもないが、今、斯ういふ事件が起きて、木戸公が、自から裁判官となつて、調べると言ふのぢや。誠に濟まないが、君は、陪審官に、なつて呉れぬか」

田邊は、俄に顔の色を變へて、

「怪しからぬ事を、言はつしやるな。悪意は平生の車だ。君は、全體、拙者を、何と思つて居るのか。同行の男女が、

下品行な事をしたからといふて、辱るやうな事をする、立會人に、なれるか、なれぬか考へて見なさい。苟も覆幕世盛りの頃には、外國係を勤めた、拙者ぢや。無禮な事を、言はつしやるな」

叱り飛ばされて、福地は、這々の體で、木戸の部屋へ、逃げ込んだ。

「駄目です。田邊は、石部金吉金兜で、迎も、融通は利きませぬ。外の者にしませう」

「さうか、それぢや、誰でも好いから、他の者にしたら、宜からう」

三人が相談して、それ／＼役が極つて裁判を、開く事になつた。

一一一

一列中の男女に、秘密の情事が、あつたからといふて、直に、それを捉へて、裁判に掛ける、といふのは、如何にも、念の入つた、悪戯であるが、長い航海中、無聊に堪へない所から、何か事あれかしと、待構へて居た、連中に、見付かつたのだから堪らない。伊藤や福地が、斯んな事に就て、騒ぎ廻るのは、敢て不思議もないが、木戸のやうな人までが、一つになつて、騒ぎ出した、揚句に、自から裁判官に、なるなぞは、實に悪戯も、茲までになる、と、それ

れに引掛かつた、男女も、腹は立つまい。愈々、それと、決した事が判つたので、其評判は、大したものである。

「オイ、愈々、裁判が、始まるさうぢや」

「フ、ム、さうか、例の一件だな」

「さうだとも」

「そりやア、其位の事は、ありさうぢや。獨身者が、百人以上も、集つて居る中で、我物顔に、好い事として居たのだから、其位な事はあるのが、當然ぢや」

「貴様、厭に妬き居るな」

「ナアニ、別に妬く、といふ譯でもないが、あまりに、人を馬鹿にした、仕方ぢやからな」

「何しろ、裁判官が、木戸公だ、といふのぢやから、被告人も、甚だ名譽な譯だ、アツハツハ」

「時に、検事は、誰が勤めるのだ」

「伊藤だ、といふこつちやよ」

「フ、ム、伊藤が、検事か。そりやア、一層面白いな。奴が、検事に、なるなんざア、頗る振つてるのう」

「其道に掛けては、十人並の手腕を、有つて居る、伊藤の事ぢやから、こりやア、聴きものだぜ」

三人寄れば、其噂ばかりである。今は、一刻も早く、裁判が開けるのを、待遠しい、といふやうな譯で、ワイ／＼騒いで居るが、被告人になつた者は、色々に、手を廻して、裁判中止の運動をしたが、木戸等は、なか／＼承知しない。といふて、岩倉や大久保に、斯んな事を、頼む譯にも行かないので、身から出た錆、とは言ひながら、殆ど打消しやうがないので、閉口して居る。何事に就ても、苦勞人の木戸が、濟まして居て呉れるならば、程好く、始末も付

くだらうが、木戸は、面白半分に、自から裁判官になるといふのだから、もう防ぎやうはなかつた。被告人も、スツ

カリ諦めて、呼出しの来るのを、待受けるやうになつた。



上甲板を、スツカリ飾らせて、美事に、公判廷が出来た。それと、通知があつたので、随行員は、悉く傍聴席に、詰込んだ。厭がる男女を、無理に、引張つて来て、其前に立たせる事にしたから、まだ、裁判の始まらぬ中から、喊の聲が、揚がる騒ぎだ。手を拍ち、靴を踏鳴らして、喜ぶ者もある、といふやうな譯で、兩人は、流石に、眞赤な面をして、下を伺いた切り、頭が擧げられない。聽て、裁判官の席に着いた、木戸は、眞面目な顔をして、被告人の名を、呼び上げた。

「其方共に對する、野合の件について、裁判を開くが、併し、事實の取調べは、最早、必要は無い、と思ふ。其方等、兩人に於ても、野合の事實は、認めて居るのであるから、直に辯論に移らう、と思ふが、それ共に、異議があるならば、事實の取調べから、始めても差支ないが、何うぢや」

眞面目腐つて、裁判官を氣取る、木戸に、斯う言はれて、何と答への仕様も無い。兩人は、益々、頭が下るばかりだ。傍聴席に這入つて、窃に之を見て居た、福地は、獨り笑聲に入つて、膝を打つて、喜んで居る。後になつて、段々、聽いて見たら、此女を、福地が、小當りに、當つて見たのだが、ピンと、撥付けられて、其後に、外の者と、好い仲になつた、といふのを、開いた所から、福地が附廻して、到頭、現場を押へて、此騒ぎを始めたのだから、福地としては、美事に復讐をした事になるのだから、嬉しかつたらう。辯護人の席に、着いて居た 安藤太郎は大きな體でノツソリと立上つた。

「エー、裁判官に伺ひますが、是より直ちに、辯論に移つても、差支はありませんか」

木戸は、鷹揚に首肯して、

「宜しい」

安藤は、咳拂ひをして、氣取氣味になつた。

「本辯護人は、被告人、兩名に對して、無罪の宣告を、與へられん事を、請求いたします。といふものは、被告人等

の野合は、天理自然の結果で、人間の力を以て、如何とも仕難い事であるから、今更、之を罰する、といふ事は、出来ないものだ、と思ひます。航海をする者が、最大切にして居るのは、羅針盤であるが、其羅針盤をして、時に用をなさしめなくするものは、夜這星の働きであります。一度、夜這星に、襲はれる時は、羅針盤も、其用をなさなくなるのです。是は天變で、人力を以て防ぐ事は、出来ないものであります。夜這星が現れた、羅針盤の效用を妨げた、といふて、天を罰する事は、出来ないものでありますから、此理由に於て、本件は、無罪にするのが、至當と考へます。即ち、被告人兩名は、人間社會の夜這星であつて、自然の情理が合體して、現れたものでありますから、斯やうな者を、罰する事になります、と、恐らく傍聴席に居る人の總てが、是から先の、長い旅行中に於て、悉く被告人に、なるやうな事が出来やう、と思ひます故、一同の爲から考へても、本件は、無罪とするのが、至當であります」

辯護人が、何んな事を言ふか、と思つて、一同が、固唾を呑んで、聽いて居ると、流石に、天才の安藤が、夜這星の説明から、始めて来たので、可怪しさを、噛み殺して居た、連中も、思はず、どツと、聲を揚げて、笑ひ出した。木戸は、伸び上るやうにして、傍聴席を睨んで、

「静になさい。笑つてはいけません。此處は、神聖なる裁判廷で、ありますから、謹んで御居てなさい」

と、極め付けたので、サア、一層、可笑しくなつて、もう何うしても、笑ひが止まらなくなつた時、伊藤が立上つて、

「本職も、亦、被告人に對しては、無罪の考へであります。是は、力の弱き夜這星が、力の強き夜這星を訴へた、といふのが、本件の成立でありますから、若し、此夜這星を、處分する事になると、力の弱い、夜這星も、傍聴席から引出して来て、處分しなければならぬやうに、なるのでありますから、左様になります、と、却つて、力の弱い夜這星が、本件を申告して来た、趣意にも違ひませう、と思ひますから、無罪の言渡しをするのが、至當と考へる、或



は進んで、澤山の眼球を誤魔化して、是だけの秘密を、成し得た、といふ事は、流石に傑いものであるから、傍聴人一同から、相當の賞與を與へる位の事はあつても、然るべしと、考へます」

又もや、傍聴人は、喊の聲を掲げて、笑ひ崩れた。被告人は、眞赤になつて、頭を下げて居たが、辯護人と、檢事の議論が、如何にも可笑しかつたので、クス／＼笑ひ出したのは、後の方から、見て居ると、肩が動くので、よく判る。流石に、裁判官の木戸も、可笑しかつたものか、笑を含んで居た。

「本件に對しては、改めて無罪を申渡す。併し、再犯の場合に於ては、嚴重に、處分を致すから、再び斯やうな事を、爲す事は許さぬぞ。宜しいか」

被告人は、軽く首肯した。同時に、傍聴人は、一度に立上つて、被告人の周圍を取巻いて、ワイ／＼嘯し立てる。到頭、被告人は、自分の部屋へ、這入つた切り、出て來なくなつた。然るに、伊藤が、福地の秘密を許して、力の弱い夜這星とは、實に面白い、といふて、これからは、一同が、福地を逐廻して、膨鐵砲の事を聞かう、とするので、福地は、恰で被告人のやうに、へこ垂れて了つた。

一二一

航海中の珍談は、なかく／＼に多くあつたが、先づ此位にして置く。船は、十二月七日に、桑港へ、無事に着いた。

赤毛布連中が、ゾロ／＼揃つて、市中の見物をする、といふのだから、何處の町へ行つても、此一行が、歩いて居る所は、人の山であつた。怪しげなる、洋服を着て、喜劇にでも出さうな、ハイカラもあれば、全然日本の服装で、濟まして居る者もあつて、左なきだに、日本人である、といふので、珍しさに見て居るのが、服装や、其外の容姿が、見馴れないので、ワイ／＼言ふて、附いて來る。されば、色々の失策をしては、話の種を遺す者は、嘗に一人や

二人でなく、一行の百幾十人が、大概は、一日に、二度や三度の失策を、爲るやうな譯で、夜になると、宿屋へ、歸つて來ては、其話を繰返して、笑ひ轉けるのであつた。

村田新八に就て、面白い話がある。薩南の健兒中に於て、指折の人物だが、年齢も、未だ若いし、血氣は盛であるし、長い間、船に乗つて來て、勇氣は勃々として、抑へる事が出来ない、といふやうな所から、通辯の役に、當つて居る者を、こつそり呼んで、

「オイ、異人の女を、買つて見たい、と思ふが、何ぎやしたら、宜いかな」

「宜しい、承知しました。今晚、御案内をませう。其代り、私にも、買はせて下さい」

「それは宜いとも、其位の事は、俺ども承知ぢやから、成るべく美か奴を、探して呉れ」

「承知しました」

「他の者には、秘密ぢやぞ」

「呑込んで居りますから、御安心なさい」

相談は、直に出來て、日の暮れるのを待受けた。やうやく夜に入ると、通辯が案内者となつて、トある町の珈琲店へ、やつて來た。

近來は、日本でも、頻に廢娼論が盛になつて、頻に公娼は、宜くないといふて、盛に攻撃が、始まつて來たが、根本の理窟は、文明國に、公娼が無い、といふ事が、第一になつて居るやうであるが、公娼の無い、文明國の裏面へ、這入つて見れば、密淫賣の盛なる事は、逆も、日本などの及ぶ所でない。尤も、公娼を嚴禁すれば、密淫賣が盛になる、といふのは、公娼があつてさへも、密淫賣があるのだから、若し公娼を禁じたら、一層、盛になるのは、物の道理で、據所ない事だ。淺草公園に、三千人の密淫賣が居た。而して、吉原へ、行つて見ると、二千人足らずで、却て、公然、看板を掛けて居る所よりは、内密で、やつて居る所の方が、人數が多いので、東京府會でも、八釜しい問題に



なつたが、警視廳の方針は、到底、警察力を以て、密淫賣を嚴禁する、といふ事は出来ぬ、といふのであるから、總て區劃を制限して、或る點までは、默許する。其代り、驅徴上の手續きに就て充分に世話を焼いてやつて、成るべく、淫賣婦の居る、範圍を狭めよう、といふやうな方針だ、といふ事を、警視廳の當局者は、答へて居たが、斯ういふ事は、理窟一點張では、いかぬ事であるから、或はそんな事にでもなるだらう、と思つて居たら、警視廳の方針が、全く一變して、嚴禁主義になり、それから、千束町の巢窟を、一掃してしまつたが、逐はれたものは、龜戸や玉の井の方面へ、追々に、落ち込んで行つて、今では、千束町の當時よりも、さかんになつて居る。

桑港邊りの密淫賣は、實に恐ろしい程の、勢ひを有つて居てさうした所へ、内密で行く者は、何處までも、自分の恥になるのだから、秘密にして居る。外へは、醜聲が漏れないけれど、一度、其窟窟へ、這入つて見れば、是が、内密にして居る、商賣であるか、と思はれるほどに、百般の設備が、整ふて居て、驚くべき程だ、といふ。

村田は、初めて、斯んな所へ、連れて來られて、其盛なものには、一驚を喫した。兎に角、身分は、通辯に委せて、一切の切盛を、させてあるのだから、何でも、向ふの言出し放題に、金を取られて、一夜の春を、貪る事になつた。相方に出た、女は、非常な美人であつたが、外に、約束がある爲に、一晩泊る事が出来ない、といふので、一時間か、二時間の約束で、宜しければ、といふのであるから、通辯から、村田に、其旨を通ずると、村田も、

「宜しい」

と、言ふて承知したから、通辯は、自分の女と、共に別の一室に、隠れてしまつた。

彼是する中に、其美人は、歸つてしまつた。サアさうなる、と、村田は、啞の旅行で、何を何うして宜いのか、少しも判らない。通辯が、出て來るのを、待受けて居るのだが、通辯先生は、なか／＼出て來さうも無い。彼是する中に、二時間餘り、經つてしまつた。小便をしたいが、何處へ行つて宜いか、判らないので、暫くは我慢して居たが、そのうちに、我慢が仕切れなくなつて、そつと、扉を開けて、廊下へ出て、其處此方と、徘徊して見たけれど、便所

のある所が、更に判らない。斯うした家の室内には、必ず寢床の下に、便器があるのだが、そんな事に、不慣れた村田であるから、廊下へ出て、探して居るのだ。といふて、振鈴を鳴らして、ポイを呼んで、便所を尋ねるにしても、言葉が、一向通じないのだから、薄暗い長廊下を、ブラブラやつて居る中に、もう堪らなくなつたから、袴の釦を脱して、廊下の隅に、小便を始めた。所へ、折悪くも、ポイが、見廻りに來て、是から騒ぎになつた。頻に解らない言葉で、パーパー言はれるが、それは、小便してはいけない、と言ふのだらうと、想像は付いたが、其處は、村田の事であるから、ナアニ、やりかけたものだから、寧ろのこと、仕舞ひまで、やつてしまはう、と、到頭、騒いで止めるのも肯かずに、小便をしてしまつた。ポイは、プン／＼怒つて、談判して居る所へ、通辯が、ノツコリ出て來て、此有様を見たから、驚いて、側へ寄つた。

一四

ポイは、通辯を見ると、頻に手を引張つて、村田が、小便した場所を指しながら、

「貴下が、連れて來た、お客さんは、此處へ、斯ういふ不都合な事をしたのだが、貴下は、何うする積りか」

と、いはれて、流石の通辯も、之には驚いた。

「イヤ、是は、飛んだ粗忽をしました。併し、此人は、此方へ、初めて來たので、少しも勝手が、判らない所から、斯ういふ失策をしたのですから、何うか、勘辨をして貰ひたい」

「勘辨なりませぬ。部屋の中に、便器が、這入つて居るのに、斯ういふ所へ、小便するのは、詰り惡戯にしたのですから、相當の損害賠償を貰はなければ、免す譯には、なりません」

「イヤ、決して、そんな譯ではない。便器の事は、話して置かなかつた爲に、斯ういふ粗忽をしたのです。何うか、勘辨して下さい」



「なりませぬ」

ポイーが、餘り頑固に、否をいふから、通辯も、少し癢に觸つた。

「それぢや、何うすれば、宜いんですか」

「罰金を、御出しなさい」

「宜しい、幾ら出しますか」

ポイーは、少し考へて見て、

「此汚い物、掃除いたします。私一人では、出来ませぬ。他の仲間にも、手傳はせなければなりませぬから、五十弗御出しなさい」

通辯も、之には呆れた、女へ、拂つた枕金が、僅かに十弗か十五弗で、小便代が、五十弗とは、高いと思つたから、

「もう少し、お負けなさい」

「負かりませぬ」

「此人、日本政府の、大きい役人あります」

「オー、左様な、大きい役人なら、尙更、負かりませぬ、何うしても出させぬ、といふなら、私、巡査に訴へます」

通辯は、役人風を吹かせて、負けさせよう、と思つたのだが、亞米利加のポイーは、そんな事に、少しも頓着ない

から、尙負からない、と言ふて、果は、巡査に突出す、といふのだから、そんな事にでも、なつた日には、それこそ、

不面目千萬だ。據所なく、村田に向つて、

「先生、飛んだ事を、仕ましたな」

「ウン、其奴が、怒つて居るやうぢやが、何と言ふのか」

「罰金を出せと、言ふのです」

「ハ、一、何程出せ、と言ふのか」

「五十弗だつて、いふのです」

流石に、村田も、顔を曇めて、

「五十弗は、少し高いやうに思ふが、何うぢや、其半分位に、負からぬか」

「如才なく、値切つては見たのですが、何うしても、負からぬと言ふのです。それだけ出さないならば、巡査に訴へると、言ふのですから、そんな事になると、見つともないから、寧ろ出した方が、宜しいでせう」

村田も、據所なく、首肯した。

「宜し、そいぢや、五十弗出す」

是て漸く、小便事件は、落着いた。一度の小便で、五十弗は、随分高いものだ。

是は、汚い失策であるが、綺麗な失策もある。それは、金子堅太郎が、一行中でも、殊の外のお洒落であるから、

頻りに船中でも、頭を撫でては、氣にして居た。愈々、上陸したから、今日こそは、といふので、通辯を、連れて行け

ば宜いのに、見得坊の金子は、判つた振をして、自分一人で、理髪店を、探しに來た。漸くにして見附けたから、其

處へ飛込んで、理髪をさせる事になつたが、美しい椅子に、凭り掛かつて、手際の良いい職人に、掃除をして貰ふのだ

から、此位、氣持の好い事はない。そのうちに、理髪を終つて、幾何か、と聴くと、一弗だ、といふから、之を渡し

ながら、不圖、前の臺を見ると、綺麗な罎が、一本備へてある。見れば、香水のやうだから、お洒落の金子は、其罎

を取つて、口の所を、チョイと捻りながら、一滴二滴垂して、掌で擦つて見ると、實に何とも言へない、芳い香り

がする。何か判らないが、職人は、金子の顔を見ながら、手眞似で付ける、といふやうな、様子を見せたから、そこ

で、上衣から、チョツキから、果は、掌へあけて、顔にまで擦り込んだ。實に晴々しい、好い氣持だから、獨りニコ

ニコもので、出ようとすると、後から突然、押へ付けられたから、振返ると、右の手を擡げて、金を寄越せ、といふ



のだ。金子は、無代と思つたから付けたのだが、斯うなつて見ると、金を取られるのだから、少し驚いたけれども、今更、仕様が無いから、手真似で、幾何かと聴くと、片手の指を擴げて、是だけ寄越せ、といふのだ、五十仙か、と思つて出すと、

『ノー』と、言つて、掌を振上げたので、金子は、  
『五弗か』と聞くと、

『イエス』と答へた。這々の體で、五弗を、投出して、表へ飛出した。金子は驚いて、芳い香りがする、と思つたばかりで、五弗取られちやつた、と、獨りブン／＼怒りながら、出て来たが、時々、鼻をヒョコつかせては、

『あゝ、芳い香だ、五弗だけの香はする』

香水を付けて、金を取られた、と思へば、癢に觸るけれども、香のする度毎に、是が五弗だ、と思つて居れば、左まで高くもないのだから、宿へ歸つて来て、一人黙つて、済まして居た。

其他、色々の珍談もあつたが、大概な事にして置いて、是から愈々、華盛頓まで、汽車で、大陸を横斷するのだ。

七日七晩も、續いて乗つて居るのだから、其間には、矢張り珍談が續出して、随分、臍の皮を擦るやうな事もあつたといふ事だが、一番の親玉の、岩倉大使が、糞詰りになつてしまつた、といふ話がある。

何處の、停車場へ着けば、何分休んで、其間に、小便して行けば、間に合ふ、といふやうな事もよくは、判らず、それに、着押れない、洋服を着て居ると、尙更であるから、到頭、汽車の中で、絹帽の中へ、大便をするやうな事になつた。其上へ、新聞を掛けて、窓から表へ、投出したまでは宜かつたが、汽車が、紐育へ、着いた時は、絹帽

が無いので、下りる事が出来ない。一行中の帽子を借りて、被つて見たが、岩倉の頭が、特別に大きく、出来て居るので、何うしても、帽子が、頭に這入らない。何うにも仕様が無いので、持つて来た、烏帽子を被つて、宿屋へ行つた、といふやうな事もあつて、随行員の中にも、之に類した、失策をした者は、澤山にあつた。

### 條約改正の着手

岩倉大使の一行は、約一ヶ月の航海をして、明治四年、十二月六日、米國のサンフランシスコに着いた。それから、華盛頓へ着いたのが、翌年の正月二十一日であつた。當時、公使をして居たのが、例の森有禮である。文部大臣になつてから、暗殺の難に會ふて、斃れたけれど、今日までの文部大臣としては、此人を以て、第一位に推さなければならぬ。

鹿兒島に在る、城山の東北、大西郷の討死で、有名な岩崎谷と、一つの丘を隔て、百戸ばかりの戸數を有つ、城ヶ谷といふ所がある。其處に、森喜右衛門といふ人があつた。島津の藩士ではあるが、貫つて居る知行は、極めて少なく、貧乏に生活して居たが、他の助けも求めずに、貧乏生活の中から、六人の子供に對する、教育の如きは、充分にやつて退けたので、知る人の間では、可成り評判にもなつて、居た位である。

後妻のお里が、家政の遺縁に、上手な人であつた。喜右衛門は、家政の事には、あまり立入らず、すべては、お里にまかせて、俗事を顧みぬ風があり、どことなく、仙骨を帯びた人であつた。お里は、よく細かい事に行届き、不足勝の家政を、何うか斯うか繰廻して、子供の教育を、満足に成し遂げた、といふのは、實に感すべき婦人である。

弘化四年の七月十三日に生れた、第六番目の子が、初め助五郎といつて、後に金之丞と改め、後年には、有禮と稱



した。兄の喜三次と、いふ人は、後に正太郎と改めて、横山安容の養子となり、明治三年の七月、新政府の失政、十數箇條を痛論した書面を携へて、集議院の門前に、切腹した程の、快男子である。

薩藩歴代の、藩主中に於て、齊彬が、殊に優れた人物である、といふ事は、前にも屢々、言ふた事であるが、或は海外貿易に、或は軍艦製造に、其他、さうした新しい事に就ては、薩藩に先んじて、努めた人である。従つて、藩の中でも、西洋の事情を、研究する者が多くなつて、和蘭語と英吉利語は、盛に行はれて居た。

薩藩といへば、頑固な士族の集團で、眼先の見えぬ、人ばかりであつたやうに、思ふて居る者もあるが、實際は、そんな譯でなく、開國進取の氣象を、養ふ事に於ては、諸藩に、一步を先んじて居たのだ。其點は、薩藩の事を調べ行く間に、意外の感に、打たれるほどである。

齊彬が、亡くなられた後も、幼主、忠義を奉じて、父の久光が、よく藩政を、整へて行つたから、薩藩が、海外に對する方針は、幕府と同じやうに、開國的に、傾いて居たのは、長州藩などが、遠く及ぶ所てなかつた。

元治元年の三月に、藩の若い連中が、海外へ渡航する事になつた。新納刑部(大目附)五代才助(友厚) 鮫島誠藏(尚信) 田中靜州、町田久成、寺島陶藏(宗則) 吉田清成、市木勘十郎、長澤鼎、磯永彦輔、松村淳藏、森金之丞等、十六名の入達が、それ々に變名して、串木野の海岸から、帆船に乗つて、先づ上海へ渡り、それから英國へ、直航したのである。

久光は、齊彬と異つて、西洋嫌ひの方であつたが、時勢に押されて、少しは解つて來たらしく、殊に、五代と寺島は、頗る進取的の氣象があつて、久光を説きつけ、留學生の派遣を、許させたのである。

一行中の年少者は、十二歳の長澤であつた。その次が、森の十四歳である。森は、英國で、學問を修め、明治になると、歸つて來て、廢刀の建白をしたり、又は、男女同權論を唱へたので、よく人に知られた。

岩倉大使が、アメリカへ、着いた時、森は、公使として滯米中であつた。

森は、大使の一行が、ワシントンへ着くと、直に之を迎へた。先づ大久保に會つて、洋行の目的を聴く事になつた。大久保は、藩の先輩ではあるし、殊に、一行中に於ては、最も勢力のある一人で、岩倉大使を、動かす點に於ては、此人か木戸の外には、無いのであるから、森が、同藩の關係から、先づ大久保を訪ふたのは、當然の事である。

「ヤア、森か、相變らずぢやね」

「貴下も、よく遠路御無事で、御着きになりましたな」

「途中は、雪が深く、汽車が遅れ勝て、漸く昨夜、遅く着いた、といふやうな譯ぢやよ」

「就ては、取敢ず伺つて置きたいのは、此度の洋行は、何ういふ事が、主なる目的になつて、居るか、それによつて、我輩の働きやうもあるから、先づそれを示して戴きたいのです」

「そりやア、道理ぢや。實は、海外視察といふ事が、名義になつて居るが、條約改正の下相談を、遂げて行きたい、といふ積りも、あるのぢや」

「ハ、ア、現在の條約を、改正するに就ての下相談と、いふのですか」

「さうぢやよ」

「それよりは、寧ろ、直に改正談判に、着手せられたら何うでせうか、再びこれだけの一行が、乗出して來て談判する、といふ事は、容易であるまいし、又、既に舊條約は、多く期限が、切れて居るのであるから、此際に於て、直に改正談判を開始して、その大體だけでも、定める事にしたら、何うだらうか、と思ふのですか、御考へは如何ですか」

「成程、それも宜からう、と思ふから、一應、岩倉公にも御話して、更に取極める事にしよう。貴下からも、岩倉公には、意見のあるところを、充分に申上げて貰ひたい」

「宜しい。承知しました」



そこで、森は、岩倉を訪ふて、大久保に語つたと同じやうな、意見を述べると、岩倉も、非常に賛成であつた。木戸を呼んで、相談して見ると、木戸も、敢て異存が無い、といふので、愈々、改正談判を、開く事に決した。安政條約を始め、其他の條約が、既に期限の切れて居るものもあり、まだ期限のあるものでも、一二年の中には、何れも期限が切れるのであるから、此洋行を利用して、改正談判を、遂げて置く、といふ事は、勿論、必要な事ではあるが、乍併、外國の事情も知らず、世界の大事にも、通じて居ない。此連中が、果して其談判を、有利になし遂げられるか、何うかは、甚だ怪しいものである。兎に角、森に勧められて、急に乘氣になつたのは、輕卒の非難は免れない。

森は、自分が米國公使として、滞在して居る以上、此際に於て、改正談判を開かせて、自分が、其後始末をする、といふ事になれば、公使として、一つの立派な仕事が出来るのであるから、岩倉や大久保に勸めて、改正談判を始めさせる、といふのは、當然の事であるが、斯うした事情から、俄に談判を開いて、果して何れだけ、舊條約にある、悪い點を改める事が出来るか、それは、實に疑問であつた。尤も、それを慮れるが爲に、談判を開かぬ、となれば、當分のうちは、舊條約を、其儘に行ふ外は無いのだ。縱令、世界の事が解らなくても、此一行にして、改正談判が、出来ないものとすれば、留守番をして居る、閣臣を以て、之に當らせた所で、矢張り同じやうなものであるから、森が、自分の功名心のみで、之を勧めたものとも、思へない、何れにしても、改正すべきものである以上、此際に改正の根本を、極めてしまはう、としたのは、或は當然であつたかも知れない。

一一

二十五日には、大統領のグラント將軍から、一行の重立ちたるものが、招待されて居て、宴會に臨まう、といふのであつた。

グラントは、南北戦争の際には、一個の將校として、奮闘したのであるが、其後に、人望を收めて、遂に大統領になつたのみならず、此人は、前後二回まで、大統領に當選して、退職した後までも、評判の好い人であつた。我國へも、一度は遊びに来て、非常に歓迎され、上野公園には、將軍が、自ら植ゑた木が、大層大きく育つて、例の大佛の背後に、小さい柵を巡らされ、奴箇の記念物となつて、残つて居る位である。

北米合衆國に於て、白堊館の主人となるのは、非常な名譽であつて、是が爲に、四年毎に起る、大統領の選舉には、非常な競争が起り、共和、合衆の二黨は、いふ迄もなく、全米の人を擧げて、殆んど熱狂させるほどである。

縱令、豆粒程に、小さい國の大統領でも、名譽の位地には違ひないが、況て、亞米利加合衆國の大統領と、なつたならば、其名譽は、一層の事である。グラント將軍が、前後二回まで、何等の故障も無く、無事に勤め了せて、今日に至るまで、其徳を謳歌されて居る、といふのは、その人格が、然らしめたものであらう。當年の人望から、推してみれば、憲法を破つて、もう一度大統領をやりたい、といつても、或はなれたかも知れないのだ。ルーズベルトのやうに、見苦しい失敗を遂げなかつたらう、とは思ふが、グラントは、強ひてそれを求めず、潔く二回で勇退したから、今日に至るまでも、其徳を謳歌するものが、あるのではなからうか。斯うした位地に昇る事は、誰しも望む所ではあるが、欲を言ふては、限りが無いのだから、程の好い所で引込む、といふのが、賢明な人の、執る可き道である。

岩倉大使以下、數十名の者は、白堊館へ招かれて、御馳走になつた後、別室に移つて、頻に話を始めたが、言葉の通ずる人は、格別の事として、一言一句、通辯に取次いで貰ふ、といふやうな者は、啞と聲の押合みたやうなもので、餘り楽しい事は、なかつたらう。其時の事を、通辯の取次を挿んで、物語る事は煩はしくもあるし、敢て其必要も無からう、と思ふから、茲では、直接の對話にしまふから、其積りて、讀んで貰ひたい。



「岩倉さん」

グラランドは、岩倉の方へ向直つた。岩倉は首肯しながら、グラランドの顔を、ヂツと、見詰めて居る。

「貴下、此度の御外遊は、條約改正の下調べをする、といふ事でありますが、それは、眞實の事でありますか」

「左様です。何うせ、斯うして歩く序ですから、下調べもして行きたい、と思ふのです」

「それならば、寧ろ、改正談判を開いてしまつたら、如何ですか。貴下が、今下調べをして、歸國の後、更に談判委員を向ける、といふよりは、其方が、便宜でせう。今まで條約を結んで居る國々は、總て貴下の國に、同情して居るのですから、唯一通りの相談で、改正の事は纏まらう、と思ひますから、さうしたら如何ですか」

岩倉は、意外な思ひをして、

「ハ、ア、さういふ事が出来るものでせうか」

「それは出来ません。我米國政府は、快く其御相談に應じよう、と思ふのです」

「さうなれば、此上もない事ですから、是非願ひたい、と思ふが、貴國政府ばかり、それを承知せられても、他國で

承知しなければ、却て困りますから、實は考へて居たのでした」

「否、其考へは必要ありません。我米國政府が同意しますれば、英吉利でも、佛蘭西でも、不同意を言ふ筈はありません」

「せぬ」

そこで、岩倉は、木戸と大久保に向つて、

「大統領が、是までの好意を、有つて下さる以上は、寧ろ談判を開く事にしたら、何うであらうか。足下等の考へも、

聞いて見たい」

木戸は、體を乗出すやうにして、

「そりやア、極めて都合ですから、さうなされたが宜しいでせう。大久保さんも、之に異議のあるべき譯は無から

う、と思ひます」

と言ひながら、大久保の方を振向く、と大久保は、靜かに首肯して、

「私とても、木戸さんと、同様に考へて居りますから、貴下は、是より談判を開く事にしたら、如何ですか」

此兩人が、同意して呉れれば、それで可いのでから、グラランドの方に向直つて、

「然らば、更に日を極めて、御相談申したい、と思ひますが、宜しうございますか」

「宜しい。併し、此談判をするに就ては、歐米各國を視察する、全權大使といふだけではいけません。別に其件に對

する。國際委任狀が、なければならぬのですが、それは有つて居りませうな」

「ハ、ア、國際委任狀と申しますと、何ういふものですか」

これには、グラランドも驚いた。苟も歐米視察に來た、全權大使ともあらうものが、國際委任狀の性質を知らないと

は、何事であるかと思ひながらも、

「此條約改正の談判を、いたします事は、日本帝國の皇帝陛下が、貴下方に、一切の談判を委せる、といふ意味を書

きました、書面が無ければ、縱令、此場に於て、貴下と、堅い約束をしても、それが無効になるのでありますから

其書面を持つて居らなければ、談判を開く甲斐はないのです」

斯う言はれて見れば、成程、それは道理だ、と思ふが、兎に角、簡単な意味で、出掛けて來た、此一行が、國際委

任狀を、有つて居る筈は無い。グラランドに言はれて、初めて氣が付いたのだ。併し、それは言はれないでも、愈々、

談判を開く場合には、それ位のものが必要だ、といふ事は、解つて居さうなものだが、其時分の大政治家は、これ位

の事も、まだ解らなかつたのだから、面白い。

宿に歸つて、段々、相談した結果、グラランドが、是までに乗込んで居る以上は、此機會を逸せず、改正談判に、着

手した方が、利益である、といふ事に、意見は一致したが、國際委任狀の事になると、何れも當惑してしまつた。結



局、さういふ譯ならば、此一行の中から、誰か歸國して、委任状を持參するのが宜からう、といふ事に決した。所が、誰を歸國させるか、といふに就いても、入釜しい議論があつた。兎に角、大切な委任状を、取つて来る事であるから萬一にも、留守番をして居る、參議の中に、異議を言ふやうな者が、あつた時に、それを壓へるだけの力が、ある者でなければならぬ。又、多少は、外國の事情も、説明すべき必要が起るだらう、といふので、種々、協議の末、大久保と、伊藤の兩人が、一旦、歸朝する事に決した。

三二

所が、茲に一つ、面白い問題が起つた。岩倉大使の一行が、條約改正の談判を開く、といふ事が傳はると同時に、米國の各新聞が、頻に其事を吹聴したので、歐羅巴各國の新聞へも、報道された。普通の觀光團とのみ、思つて居たのが、俄に米國へ来て、此談判を始める、といふのが、非常な評判になつて、密に雜報で書立てるばかりでなく、頻に論評を掲げる、新聞なぞもあるもので、當時、英國に留學して居た。馬場辰猪、尾崎三良、河北俊彌等の書生が、其新聞を見て、非常に驚いた。

縱令、通辯が附いて居るにせよ、肝腎の大使首め副使等が、世界の事情も知らず、言語も不通でありながら、此大切な談判を始める、といふのは、何といふ無謀な事であらう。萬一そんな事でも始めて、却て改正前の條約よりも、悪い條約を結ぶやうな事があつては、日本の國家に、非常な不利益を來すのであるから、是は大いに忠告して、何も止めさせなければならぬ、といふやうな、相談が始まつて、尾崎、河北、兩人が、留學生の總代として、米國へ渡る事になつた。

其時の代表者には、ならなかつたが、自から進んで、アメリカへ渡り、専ら此説を主張した、一人として、馬場は非常に骨を折つたのである。

尾崎は、晩年に、樞密院へも、出て居たが、文久年間には、京都の政變に就て、例の七郷を警護して、九州まで落延び、長い間、太宰府の天満宮に、三條中納言を、護つて居た、といふ爲に、幕末史の上では、屢々、名前も語はれて居る。

尾崎の妻君、テオドラの實父は、此人である。留學の當時、大層世話になつた、下宿屋の主人を孕ませて、生れたのがテオドラであつた。然るに、尾崎は、日本へ、歸つて來てから、英吉利の方へは、音信をせず居たが、其娘さんは、貞節を守つて、三良の子供を、育て上げたのである。幾度か書面は出したが、一向に、要領を得られないて、年を過す中に、昔の娘は、何時かお婆さんになつて、生れた娘も、婚期が過ぎた。此儘に、父の顔も知らずに暮す事は出来ぬ、といふ所から、多くの人の止めるのも肯かずに、態々、日本へやつて來て、父の三良を訪ねたが、既に三郎は、立派な役人になつて、妻子もある身の上であつたから、遙々、訪ねて來た、テオドラの悲しみは、一通りでなかつた。今更に、國へ歸る事もならず、非常な覺悟を以て、身分ある人の、家庭教師を、爲る事になつた。

然るに、罇堂が、東京市長をして居た時、國許から來た、テオドラ宛の手紙が、何う間違つたものか、市役所へ、配達された。それを、罇堂が、碌に上書も見ずに、封を切つてしまふと、意外にも、其手紙は、テオドラに宛たもので、自分に來たものではなかつた。そこで、罇堂は、態々、テオドラの所へ、其手紙を、自ら持つて行つて、何心なく開封した罪を謝した。

人の縁といふものは、不思議なものである。罇堂は、前年、妻を亡ふて、まだ娶らずに居たので、手紙の行違ひから、惡意になつて、往復をして居る中に、其中間に立つて、盡力する者が、出て來る、といふやうな譯で、到頭、話が纏まつて、テオドラを娶る事になつた。此點から言へば、罇堂が、テオドラを娶つたのは、全く救ひの神のやうなものであつて、三良が、テオドラの母に不義理をしたのは、甚だ怪しからぬ事であるが、併し、斯うなつて見れば双方に、そんな苦情は、出ない譯だ。



馬場に就いても、一應、言ふて置かねばならぬ。所謂自由民権の時代、即ち明治十六七年の當時に於ては、馬場の名は、天下に鳴響いたものである。抑も自由黨創立の當時から、自由民権論を鼓吹した、馬場の働きは、非常なものであつた。今日のやうに、演説が盛になつて来たにつけても、馬場の生前が、思ひ出される。其場から、今日に至るまで、随分、長い間ではあるが、未だ曾て、馬場程の雄辯家に、接した事が無い。學問があつて、容貌や風采が、整ふて居て、其上に、辯舌が好かつた、といふのだから、何處と言つて、一點の申分は無かつた。馬場の演説は、唯止度もなく、ペラ／＼喋つて、速記者を苦しめるといふが如き、冗舌にひとしい、雄辯ではなく、一言一句、聽者に、感動を與へる、眞の雄辯であつた。

其後、政府と自由黨の軋轢が、甚だしくなつて來て、盛に政府の方から、各政黨員の間へ、間者を放つて、頻に中傷を試みた、それが、巧く當つて、板垣總理の洋行事件に、馬場は、末廣重泰、大石正巳の二人と共に、自由黨を脱して、獨立黨なるものを興したが、幾何もなくして倒れた、其前後に於いて、大石と馬場が、横濱の外國商館へダ イナマイトの値段を、聽きに行つた、といふ事が、端なくも一問題となつて、遂に兩人は、入獄の身となつた。豫審の決定では、有罪となつて、公判へ廻されたが、幸ひにして、此事件は、兩人共無罪になつた。けれども、此一條から馬場は、明治政府に對する、反感が、愈々、甚しくなつた。日本に居たのでは、自分の一身も危く、充分の意見も、述べる事が出来ぬから、遠く亞米利加へ渡つて、日本政府攻撃の演説會を、開いて歩いた。子供の時分から、英吉利に、留學して居て、英語が非常に巧であつた爲に、亞米利加邊りを、辯士となつて歩くには、最も適當の人であつた致る處、喝采を博したが、日本政府にして見れば、本國政府の祕密を計いて、攻撃しく歩くのだから、非常に困つて幾度か馬場に向つて、妥協を申込んだが、馬場は、峻平として、之を退けたのみならず、餽送も、政府攻撃の演説を續けて居たのだ。そのうちに、費府に於て、病氣が出て、治療に手を盡したけれど、其甲斐なく、到頭、異域の鬼となつてしまつた。

馬場が、未だ自由黨に、居る時分は、入官町の先生といふて、なか／＼黨内でも、重きをなして居た。英學は、非常に深かつたが、漢籍の力に、乏しかつた爲に、日本の文章は、極めて拙かつた。それであるから、自分が、意見を述べて、他の者に代筆させた、といふやうな事が多かつた。それでも、自由新聞の紙面は、馬場の論説に依つて、賑つたのは事實である。入官町の家といふのは、馬場から見ると、十五六も年長の、後家さんが居る家であつた。馬場が、頗る男振の好い所から、到頭、その後家さんと、好い仲になつて、ズル／＼バツタリに、這入り込んでしまつたのだ。所が、十五六も年長の女が、馬場のやうに、貴公子、といふても、恥しからぬ程に、綺麗な男を有つたのだから、三日に上げず、嫉妬が因の、喧嘩が始まつて、馬場の美しい顔には、爪の痕が、何時も附いて居た。本部へ、出て來ては、同人の間に、それが問題となつて、茶菓子を奢らせられた事は、幾度あつたか知れない。文學者の馬場孤蝶は、此人の弟である。

四

尾崎と河北の兩人は、華盛頓へ着いてから、木戸に面會して、段々、英國留學の書生が、改正談判に反對である、といふ趣意を、陳述に及んだが、木戸も、兩人の主張する所には、多少の理窟があると思つたが、大久保と伊藤が、日本へ引返した後の事であるから、今は後の祭に、いかんとも致方はなかつた。

「君等の忠告は、忝なく思ふが、さればとて、今更に中止する、といふ事は出来ぬ。充分の注意はする積りであるから、尙、此上共に、氣の付いた事は、助言して貰ひたい。態々、やつて來たのぢやから、マア緩くり遊んで行つたら宜からう」

流石に、木戸は、苦勞人の果だから、人を外らさない。無下に、頭から斷つてしまへば、それ迄の事だが、軟かに受けて、對手を外らさぬ所に、木戸の甘味は、あつたのだ。之を聴くと、尾崎は、



「而て見ますと、我々の申述べる所は、當然であるといふ御見込なのですか。それとも、私々の主張する所が、間違つて居るから、採用が出来ない、といふのですか。何ういふ風に、解釋したら宜しいでせうか」

「サア、さう理窟詰になると、洵に困る次第ぢやが、兎に角、君等が、是までに心配して、態々此處まで、やつて来て呉れた、其志は如何にも有難く受ける、といふ意味なのぢや」

「其處が解らないのです。我々の志は、有難いと思ふて受けるが、併し、議論は、間違ふて居るから受けない、といふのですか、何方でせう」

「そりやア、君等の言ふ所は、固より道理のある事で、我輩と雖も、それに反對する、といふ次第ではないが、既に斯く決した以上は、今更に中止する、といふ事は出来ぬ、といふのぢやから、其の積りで居て貰ひたい」

「それは、甚だ可怪しい次第ですな。我々の主張する所が、道理である、とするならば、直に中止なすつても、宜しいではありませぬか。事、苟も一國の盛衰に、關する程の大問題であるから、一私人の利害問題とは違ふのです。それほどに、重大な問題に、手を着ける、といふ場合に當つて、閣下等の爲す所が宜しくない、といふ意見を、吐いて居るものですから、若し我々の謂ふ所が、道理である、と、閣下が、眞に思召すならば、談判は中止して、然るべき事だらう、と思ひます。併し、我々の主張するところが、承認する所とならず、今迄の通りに、改正談判を續けるのが宜い、と思ふから、中止は出来ぬ、といふのなら、それでも宜しいのです。我々としては、それに對する考もありますから、要するに、曖昧な御答へでは、甚だ困るのです」

斯ういふ風に、書生理窟で、捲し立てると、流石の木戸も、何んと答へやうもなかつた。一時の勢ひに乗じて、

「それでは、やつて見やう」

と、いつたやうな、調子で始めた、改正談判であり、而かも、未だ談判に、入らざるに先立つて、國際委任狀が無ければいかぬ、と言はれて、伊藤と大久保が、日本へ引返した跡へ、此連中が来て、斯ういふ議論をするのであるか

ら、伊藤や大久保の歸朝を待たずして、それでは、談判を中止する、といふやうな、馬鹿らしい事を、いふ譯にもならず、さればといふて、若し此連中が、忠告する通り、自分等が、進んで談判をする、といふのは、或は思つた程に國のためならぬかも知れないが、併し、自分等は、何處までも、國の爲になるやうに、といふ考へて、やるのであるから、對手が、外國人だけに、それが思ふ通りに、なるか何うかは、頗る疑問である。従て、兩人の忠告も、或は用ひて見たいやうな氣にもなつたが、行掛が、斯ういふ風になつて居るのであるから、直に岩倉を勧めて、止めさせるといふ事も出来ないのだから、木戸の苦しさは、一通りでない。河北に、尾崎に代つて、

「閣下程の御方が、此事に就て、左までに躊躇して、確答をなされぬ、といふのは、道理の上に於ては、我々と争ふだけの點が無いから、程良く宥めて、追返して置いて、談判を始めやう、といふのだらう、と思ひますが、若し、そんな事にもなれば、我々は飽きても、反對しなければならぬ。閣下等の爲する事に對して、苟も留學生が反對するといふのは、可怪しい次第ですが、國家の大事には換へられぬのですから、是より倫敦へ歸り、同志を集めて、新聞の上では、勿論の事、内外の政治家に、檄文を飛ばして、飽きても改正談判に反對である、といふ趣意を、公表しなければならぬのですが、それについても、閣下から、確かな答へを、聽いて行かなければ、同志の人等へ報告も出来ぬから、御確答を願ひたい」

尾崎の言ふ所は、左までに強くもなかつたが、河北の議論は、木戸の疝癪に觸つた。苟も日本帝國を、代表して来た。大使の副使たる、自分に對して、若し忠告を容れなければ反對するぞ、と言はぬばかりの、言草を聽いては、まさかに、其儘、引込む譯にも行かない。

「然らば、君等は、條約改正の談判は不都合であるから、飽迄も反對する、と言ふのぢやね」

「さうです」

「宜しい。それなら、それで反對したら、宜からう」



「エツ、反對しろ、と、仰しやるのですか」  
「敢て反對を望むのではないが、君等が反對する、といふ以上は、仕方がない。随意に反對したら、宜からう」  
「ハ、ア、さうすると、反對しても差支へない、といふ意味に、なりますな」  
「マアさうぢやね」

「宜しい。それぢや、御話を打切つて、御別れするより外ありませんぬ」  
河北は、尾崎の方を振向いて、

「オイ、行かうぢやないか。斯ういふ答を聽いては、もう此以上、争ふた所で、致方は無いのだから、兎に角、倫敦まで、引揚げることにしやう」

「さうか。それぢや、さうしやう」

そこで、兩人は、亞米利加を引揚げて、倫敦へ歸る事になつた。

馬場は、個人の資格で、木戸に逢ふて種々と説いたのみならず、岩倉にも、大久保にも、強く反對意見を吐いて、深い注意を與へた。

要するに、側面から、兩人の働きを援けたのであるが、相當に、効果はあつたやうである。

若し、此談判が、續いて開かれるやうになつたならば、或は此連中の反對が、談判の進行に、意外な障礙を、與へたかも知れなかつた。幸にして、談判は中止になつたから、其争ひをせずに、済んだのである。

五

其頃、外務卿をして居たのが、副島種臣であつた。學者肌にして、人格の高い人であつた。大隈と同じやうに、佐賀の鍋島藩から、出て来て、參議と外務卿を、兼任して居たのである。

大久保と伊藤が、急の用事で、歸つて来た、といふので、早速、閣臣が集つて、其用件を聽取る事になつた。そこで、大久保は、グランド大統領、と相談の上で、愈々、條約改正の談判を、開くに就ては、國際委任狀の必要があるから、歸つて来たのである、といふ、趣意を、一通り述べた。伊藤からは、更に詳しい説明があつた。兩人の考へては、一も二も無く、閣臣が、承知して呉れる、と思ふて、極めて手輕に、話し込むと、意外にも、副島が、大反對であつた。

「此度の大使派遣に就ては、既に朝廷の思召として、歐米各國の文明を、視察して来て、我國の内政改革をするといふ必要から、此度の大使派遣になつたのであるから、それ以外に、大使の一行が、なすべき用件はない筈である。況して、條約改正の事の如きは、現に外務卿がある以上、其以外の人が、着手すべき事柄ではない。身不肖ながら、種臣外務卿の職に、就て居る限りは、若し其談判を、開く必要がある。とするならば、種臣、自から其衝に當るべきである。殊に、改正條約は、十五年なり二十年なりの間を、爾後續いて行はなければならぬのであるから、手許に於て一寸狂へば、先へ行つて、一尺狂ふの道理で、我國の前途を、考へて見ると、輕卒な改正は、出來ぬ澤である。依つて、この談判を開く、といふ場合には、一應、閣臣の議を経なければならぬ。陛下の思召もあらうし、旁、以て、此場合に、岩倉大使一行に、委任狀を渡す、といふ事には大反對である」  
と言ふて、頻に副島が、故障を唱へた。伊藤は、之を聽くと、

「其仰せには、一應の道理がある。けれども、此方より、主張せざる中に、先方から、改正の談判に應ずる、と言ふて呉れるのであるから、此位な好機會は、再びあるまい、と思ふ。固より我々が、此度の歐米巡遊は、他の目的があつた事で、是は臨時に湧いた事ではあるが、乍、併、出發の時に、近く開くべき、改正談判の下話位はして、差支ないやうな話もあつたから、従つて、斯ういふやうな場合にも、なつたのであるに依つて、是非、此際に於ては、我々兩名に、國際委任狀を、渡されるやうに願ひたい」



「イヤ、假令、何と言はれても、種臣が、外務卿である限り、その運びを致す事はならぬ。條約改正といふ事の如きは、外務卿が、なすべきものであつて、其他の閣員が、なすべきものではない」

成程、考へて見れば、副島の立場としては、斯う言つて、拒む外はなからうが、さればとて、左様でござるかと言ふて、歸る譯にもならぬから、サア斯うなると、兩人の立場は、頗る苦しくなつた。大久保は、頻りに副島を宥めて、委任状を出す事に、同意させようとしたが、副島が、何うしても承知しないから、聊か不快の念を以て、副島と、睨み合になつた、事態は、甚だ面白くない、と、早くも見抜いた、伊藤が、

「それならば、斯ういふ事に願ひたいが、如何でせうか。即ち是程の大問題を、外務卿が、唯一人で御断りになるといふのも、穩かてなからうと思ふから、外務大輔の寺島宗則君に、出席を願ふて、同君の意見も、聽いて見ようではないか。之には御不同意はあるまい、と思ふが、如何ですか」

「そりやア、宜からう。我輩は、唯頭固に、自分の主張を通さう、といふのではないから、寺島の意見も、聽いて見よう、と思ふ氣があるならば、呼んで見たら、宜からう」

「然らば、さういふ事に願ひたい」

茲に於て、寺島を、呼ぶ事になつた。

寺島の前名は、松木弘菴といふた。最初は寺島陶藏であつた。洋行から歸つて、外務省に入り、最も必要なる人となつて居たのだが、後には、外務卿になつた。

折柄、寺島は、英國へ派遣の命を受けて、出發の準備に、非常に忙しい時であつたが、副島外務卿から直に來い、といふのであるから、早速、やつて來て見ると、大久保伊藤の兩人から、國際委任狀の請求があつて、副島が、之に反對して、非常に激論して居る所であつたから、悪い所へ呼ばれた、とは思つたけれど、據所なく、席に着くと、伊藤は、寺島に向つて、

「非常に御多用だ、といふにも拘らず、御出席を煩して、洵に相濟まぬ。實は、御開及びでもあつたらうが、例の國際委任狀の一條に就て、御招きをしたのぢやが、君の御意見は、如何であらうか」

大久保も、之に口を添へて、

「副島君は、何處までも、委任状を渡すことはならぬ。條約改正の談判は、外務卿が、當然なすべきもので、他の者に、手を着けさす事はならぬ、と言ふて、頻に故障を言はれるのぢやが、君の意見は、何うぢやね」

一方には、副島が、睨んで居るし、又一方には、大久保といふ大頭が、睨み付けて居るのだから、其間に立つた、寺島は、随分、苦しいには違ひない。副島は見兼ねて、

「イヤ、寺島君、決して遠慮は、要らぬ事ぢやから、自分の思ふ通りに、答へて呉れたら、宜いのぢや。善いか、悪いか、唯一言てよい」

そこで、寺島も據所なく、

「然らば、自分の考へを申述べますが、自分としては、副島外務卿に、同意いたすの外はありませぬ」

此一言には、伊藤も、意外の思ひをした。

「ナニ、君は、矢張り委任状を渡さぬ、といふ方か」

「無論、さうです。外務卿が、已にある以上は、外務卿が、改正談判を開くべきもので、更に其上、必要の場合には、特別の大使を選ぶ、といふ事はあるが、謂はゞ文明國へ、見學に出掛けた、大使の一行に對して、條約改正談判の委任状を渡す、といふ事は、出来ませぬ」

副島は、如何に頑固な事を言ふても、寺島は大丈夫だらう、といふ見込で、呼んで見ると、案外にも、斯ういふ答へを、されたのだから、今更に、蕨蛇の形で、如何ともする事が出来なくなつた。



大久保といふ人は、平生、餘り人に向つて、争ひをしない方であるが、一度、斯うと申し出て、其事が行はれない、となると、随分、頑固に其主張を貫かうとする傾きはあつた。大西郷と、並び稱された、薩摩の二大人物ではあつたが、併し、此時分から、大久保は、既に薩摩といふ、臭を離れて、日本の大久保となつて居た位に、偉い人物であつた。

それほどの人物、大久保に對して、副島が、飽迄も自説を突ツ張つて、一步も譲らなかつたのは、副島の立場としては、何うしても、左様する外は無かつたのである。

伊藤が、小細工に、寺島を呼んで見たのは、大層宜かつたやうであるが、寺島に、反對されて見ると、却て都合の悪い事になつた。寺島に限つて、反對は爲し得まい、といふ見込が、違つて、斯ういふ事になつたのだから、伊藤は、沈黙してしまつた。他の參議にしても、大久保に對して、氣の毒である、とは思つたが、出發の際に、前回に言ふた通りの紛紜が、あつた丈けに、此問題に就ては、強ひて副島を宥めて、大久保を、救ひ出さう、といふ迄の考へは無く、手を束ねて、双方の争ひを、聽いて居るばかりであつた。

極めて沈着して居たが大久保の語調には、悲愴な覺悟が、現はれて來た。

「成程、伺ふて見れば、副島さんが、言はるゝ所にも、道理はある。併し、我々兩人が、斯やうに引受けて、歸國した以上、委任状を御渡して下さらぬ、となつては、自分等の面目は、立たぬ譯になるのであるから、何とか所決の途を求めなければならぬ。それに、亞米利加の政治家に對しても、再び合す顔も、無いやうな次第ぢやから、此儘、亞米利加へ歸る事は出来ぬ。斯く相成つては、切腹の外は、ござるまい」と言ひ放つて、ヂツと、副島の顔を、見詰めたが、大久保の眼の色は、變つて居た。

斯うなると、まさか、棄て、置く事も出来ぬ。外の人と違つて、大久保の事であるから、切腹すると言ふたら、必ずやり兼ねないのだから、之を打棄て、置いた日には、それこそ、面倒が起さるのである。さうなると、飛入にやつて來た、寺島は、一番に苦しい立場になるので、何うしても、黙つて居る事は、出来なくなつた。

「斯ういふ事に、なされては如何でせうか。委任状は、兎に角、御渡しになつて、兩君の面目を立てる事にして、其代り、談判は開いても、それは單に、談判に止めて置いて、すべての決定は、外務卿へ移す、といふ事にしたら、宜からうと考へるが、御考へは如何でせうか」

副島は、之を聽いて、

「それは宜からう。併し、如何に改正を行はぬとしても、先方が、此方の談判に、應じた場合は、何うするか」

「そりやア、大久保公にしても、伊藤君にしても、閣下が、一步譲つて、委任状を御渡しになつて、兩君の面目を立てた、といふ點に對しては、幾分の御考慮も、あると思ひます。談判は開いても、改正の條項に就て、難しい事を言へば、先方は、應じない事になるのぢやから、それで、話は打切になる。その先は、翌年になつて、談判を開く、といふ事にしたら、大使一行の、面目も傷けず、外務卿の職權も冒さず、一舉兩全の策であらう、と思ふが如何で

之を聽いて居た、參議連中も、寺島の仲裁説には、賛成した。そこで寺島から、更に大久保伊藤に、段々相談をしたから、兩人も、遂に屈して、さうした條件で、委任状を、受ける事になつた。

今から考へても、實に面白い事だ。候約改正の談判を開くのに、先方が、直に應ずると困るから、成るべく難しい問題を出して、新條約締結の運びに、ならぬやうに、手加減を用ひるなぞといふのは、如何にも馬鹿らしい事のやうではあるが、斯んな事でもしなければ、紛紜の結局は、とても付かぬのだから、據所ない。寺島は、其後、外國から歸つて、外務卿になつたが、在任中に、あまり評判が良くなかつたのは、萬事が此筆法で、やつて退ける風があつ



たから、そこで外交上に、強い意見を、有つて居る連中は、何時も寺島を批難したのである。副島が、極めて頑固な人で、所謂、漢學仕込の外務卿であつたから、斯んな面倒な事になつたが、普通の外務卿ならば、何でもなく委任状を、渡してしまつたに違ひない。

副島が、それ程に、頑固な人物であつた、半面には、又面白い逸話が、澤山にある。鳥森の待合で、有名な濱の家の女將が、未だ年齢も若く、新橋で、盛に賣れて居た時分の事だが、副島が、お濱を思込んで、是非手に入れたい、とは思ふのだけれど、副島は、元來が、遊蕩をした事の、無い人だから、少しも其呼吸が分らない。獨り思つて居るばかりで、手も足も出ないのだ。到頭、それを氣病にして、ブランク病ひを出したのだから、面白い。外務卿の戀病ひなどは、開關以來、此人の外に無からう。

所が、集つて来る連中が、皆人摺れのした、遊び盛りの連中ばかりであるから、副島の様子可怪しい、といふので、根掘り葉掘り、探つて見ると、斯ういふ次第だ、といふて、大笑ひになつたが、兎に角、それでは、我々が周旋して、目的を遂げさせやう、となつた。無論、其中には、伊藤、山縣、陸奥、井上なども、混つて居て、お濱を呼んで、談判を開いたのだ。これには、流石のお濱も驚いて、初めの中は、どうしても受けなかつたが、段々、事情を聞いて見ると、莫迦らしくもあるが、また氣の毒にもなつて、

「それでは、兎に角、御本人に、御目に掛つてからにしますから、私の宅へ、御遣はし下さい」と答へた。

そこで、副島を、お濱の家へ、送り込む事にした。お濱が、副島を、引受ける時分に、一同に向つて言ふたのは、「私も、高杉晋作さんといふ、好い人があつたのですから、今更に、副島さんの仰せに、従ふ事は出来ませぬが、併し、御病氣だけは、キツと治して上げますから、二週間だけ、預けて下さい」といふのだから、可笑しい。二週間預ける、といへば、丸で病院にでも、預けるやうに聞える。何ういふ事に、お濱

が、をさまりをつけるか、其成行を、一同が待つて居た。其後、お濱から便があつたから、一同が、訪ねて見ると、今まで汚かつた、副島が、生れ更つたやうに、綺麗になつて居るので、之には皆、一驚を吃して、何ういふ譯かと、事情を聴くと、お濱が笑ひながら、

「毎日、お湯に入れて、私が、お背中を流し、それから髪結も、毎日のやうに呼んで、此通り綺麗にして下げたので、是ならば何處へ行つても、一人前に、御通用なざる殿様でございます。もう、私のやうな者を、追廻さずとも済むのですから、時代な戀病なんぞは、なざる氣遣ひはございませぬ。オホ、、、」

副島も、額を押へて、苦笑を漏して居る。一同は、ワツと嘖し立て、引取つてしまつた。其先の結局は、何ういふ風になつたかは知らぬが、兎に角、副島といふ人は、斯ういふ變つた人であつた。

▲濱廻家も、今は無くなつて、お濱は中風を病んで、すでに故人になつてしまつた。

七

英吉利から、態々、留學生の總代が、やつて来て、忠告したにも拘らず、木戸は、斷然、之を撥付けて、條約改正の談判は遂行する、といふ事を、答へてしまつたのだ。留學生の意見は、必ずしも談判を開いては悪い、といふのではなく、詰り、其談判を開くには、相當の準備が無ければならぬ。唯西洋見物に來た、通り一遍の旅客同様の者が、先方に勧められたから、といふて、直に此大切な、談判を開く、といふのは、甚だ輕率な事である。殊に、一行の中に於て、充分に語學に通じて居る人がある、といふのではなく、従つて、世界の大勢も、よく解つて居る、といふのでもない。さうした人達が、俄に思ひ立つた、談判の結果として、日本の利益となるべき、條約の結ばれる筈はない。今、此場合に於て、半年や一年を、争ふ必要もあるまいから、態々談判を開くならば、今度の巡遊を幸ひとして、各國政府に、唯其下話だけをして置く、といふ位に、止めて置くのが宜からうと、いふのが、留學生の意見であつた。



唯一時の勢に驅られて、大使の一行に、無理を言ふて来た、といふのは、大分違ふのであるから、實は喜んで、此忠告を迎へなければ、ならないのであつたが、既に國許へ、委任状まで取にやつた、といふやうな、場合が場合であつたから、止むを得ず、木戸も、斷然、撥付けたのであらう。

然るに、大久保と伊藤の、歸つて来るのが、存外に遅れて、豫定の日限が過ぎても、まだ歸つて来ない。其間、空しく華盛頓に、滞在して居て、思ひ思ひ見物したり、又心掛けのよい人は、語學の研究をしたりして、日を送つて居る中に、少しは亞米利加の事情にも、通じて来た。寧ろ、何も彼も知らずに居れば、格別の事だが、多少ともに、事情が解つて来ると、留學生の忠告に、無理のないといふ事が、解つて来るし、漸く條約改正といふやうな事は、非常に難しいものである、といふ事も、よく解つて来た。そこで、岩倉と木戸が、相談した上で「先方から好意を示して呉れる、亞米利加でさへ自分等が思ふやうな、條約は結べさうもないのだから、是から先、英吉利、佛蘭西、獨逸などに、行つては、尙一層難しい事にもなるであらう。慈心手を出して失敗つては、それこそ、一大事であるに依つて、此場合は、談判なぞを開かず、唯下相談と、いふ事にして、本統の談判は、他日に譲つた方が可い」といふ事に決めた。斯うなつて見ると、日本へ立歸つた、大久保と伊藤に、使者を出して、委任状は、持つて来るに及ばぬ、といふ事を、通ずる必要があるから、田邊太一が、其使者となつて、日本へ引返す事になつた。

斯ういふ使者は、随分、半間なものではあるが、大使に命ぜられて見れば、止む事を得ないから、田邊は、委任状受取方取消といふ、珍無類な使命を帯びて、桑港へ、やつて来て、今、波止場まで来ると、折柄、着いた船があつて、多くの旅客が、ゾロ／＼上つて来る。其中に、何となく日本人らしいのが、混つて居るから、田邊は、波止場に立つて、チツと、其方を見てみると、軀で、近付いて来た人は、日本人のやうに見えたのも、無理はない。一行中の才物と、評判の高い、小松濟治であつた。大久保に附いて、日本へ行つたのだが、漸く内閣の纏まりが、付いたのを見て、大久保が、あまりに日が遅れたから、一足先に引返して、委任状は、やうやく受取つた、といふ事を、大使

に話して置け、と命じたので、小松は、今引返して来た所なのだ。

「ヤア、小松ぢやないか」

「オ、是は田邊、何處へ行くのか」

「實は、日本へ歸る積りぢやが、貴様は、どうして歸つて来たのか」

「イヤ、もう、大い騒ぎでな」

「ホ、一、大い騒ぎとは、何ういふのか」

「外務卿の副島君が反對したので、大久保公と、大い議論になつて、切腹すると迄、話が押詰つて、非常に面倒にはなつたが、漸く調停がついて、委任状は貰へる事になつたが、それが爲に、日が遅れたから、兎に角、一船先に行つて、其始末を、大使へ申上げて置け、といふ命を蒙つて、俺は、歸つて来たのだ」

「さうか、そりやア、大變だ」

「何が、大變か」

「實は、外國の事情も、解つて来て、此際に、改正談判を開くといふのは、面白くない、といふ事になつて、委任状取消の使者に、俺は、行く爲に、此處まで来たのぢや」

「そりやア、もう無駄ぢや。今頃は船も、途中まで来て居るだらう、と思ふから、行く事は止めにしる」

「さうか。それぢや、引返す事にしよう」

そこで、田邊は、小松と連立つて、華盛頓へ引返して来た。

小松が、委任状に就て、内閣で紛紜した顛末を、詳しく報告して、既に大久保公は、伊藤と共に、次の便船で来る、といふ事を、聞いた時は、岩倉も、一時當惑したが、併し、一旦中止すると、極めた以上、今は致方がない。

「木戸さん、貴下、洵に御迷惑ぢやらうが、大統領へ、此旨を通じて貰ひたいが、何うぢやらうか」



『それは、宜しうございます。是から直に話して來ませう』  
『ウム、是は早い方が宜からうから、早速、行つて貰ひたい』  
『承知いたしました』

是から、木戸が、大統領へ、面會を申込むと、條約の一條ならば、國務卿のフィツシュに、面會して呉れ、といふ事であつた。此人には、今迄に夜會、其他の席で、度々面會して、もう懇意になつて居たから、フィツシュの邸へ、訪ねて行つて、改正談判は、中止する旨を告げると、フィツシュは妙な顔をして、

『それは、洵に困ります。私の方は、此通り、改正いたします條約の箇條も、略調べまして、何時でも、あなた方の御話を聽いて、相談するやうに支度出來て居ります』

と言ひながら、一括した書類を、示された時は、流石の木戸も、冷汗が出て、何とも申譯の無い次第とは思つたが、此場合、止む事を得ないから、頻りに行違ひの事情を詫びて、折角の談判は、開かぬ事に極めてしまつた。

あれ程に、偉い人が、顔を描へて居て、開かれる筈になつた、條約改正談判は、斯ういふ馬鹿らしい事情から、中止されたのである。

八

伊藤と大久保は、喜び勇んで、例の委任狀を携へて、歸つて來ると、意外にも、談判は中止になつてしまつた。といふのだから、流石に、沈着な大久保も、此時は、非常に激して、

『そりやあ、木戸はん、甚だ迷惑する。小松からも、大要は御話してあるぢやらうが、此委任狀を取るに就ては、副島どんと、大い争ひをして、俺な腹を切る覺悟で、掛つた爲に、漸く纏まつて、受けて來た委任狀ぢや。それを、持つて歸つたら、談判は中止になるなぞは、あまりに馬鹿らしい事では、ごわへんか』

『イヤ、さう言はれると、何とも面目次第も無いが、實は、貴下等が、日本へ歸られた後に、英吉利から、留學生の總代がやつて、來て、段々、難しい議論を仕掛けられて、一時は當惑したが、それも斷つて、飽までも談判は、續ける事にしたのぢやが、そのうちに、此國の事情も解つて來るし、旁、留學生の忠告した所よりは、一層、此談判の困難である、といふ事を、悟つて見ると、妄に無理押しをして、拙な條約を結んだ日には、それこそ、日本の不利益になる、と考へて、大使も中止する、といふ事に決心せられたのであるから、何うか、其邊の事情は、宜しく御諒察を願ひたいのぢや』

『さういふ事情ならば、止むを得ないが、併し、態々、日本まで歸つて、堂々と争ひまでして來た者は、如何にも馬鹿らしい、こつちやからね』

『それは、道理千萬ぢやが、何うも止む事を得ない』

大久保も、愚痴は言つて見たが、今更に、仕様が無い。又、自分等が、委任狀を受けるに就ても、改正條約に、調印をする事が、出來ないやうな條件も、付けられて來て居るのであるから、縱令、談判を開いた所で、左までに香ばしい事も無いのだから、寧ろ是は、中止になつた方が宜からう、といふやうな考へも、無い譯ではなく、況して、木戸に、斯う言はれて見れば、それまでの事であるから、遂に談判は泣寝入りになつてしまつた。

所が、又茲に一つ、問題の起きたのは、本國に於て、廢藩置縣の制度を施して、段々、内治の改革を計る、といふ事になつて、それ／＼改革すべき事に、手を着けて見ると、金が先に立つ世の中で、是は斯ういふ風にするに宜い、といふ見込を立て、手を着けて見ると、何時も、金が無いので中止する、といふやうな譯で、迎も、廢藩置縣の實を擧げて、政令が一途に出る、といふやうな、仕掛けをするだけの事でも、容易な業でない、といふ事が解つた。それに就て、第一には、金の都合をしなければならぬといふやうな、事が、内閣に於て、相談が始つて居た所へ、大久保と伊藤が、歸つて來たので、實は、條約改正の問題よりは、其方が先になつて、研究された結果、是



非、此際に亞米利加から、國債を募集して貰ひたい、といふ事を、頼み込まれたので、大久保、伊藤も、それを受込んで、歸つて來たのである。

尤も、それに就ては、外務大輔の吉田清成が、一切の計畫を立て、總ての書類を調べた上で、次の便船で來るから、それまでは、大使の一行も、是非、待つて居て貰ひたい、といふのであつた。詳しい説明は、無論、吉田が、其衝に當るし、又、グランド大統領に、其越意を話して、同意を求め、といふやうな事も、吉田が爲る役になつて、居るのだが、併し、大使の一行が、止つて居て、外から之を助ける、といふ事が無ければ、容易に整ふ事ではなからう、といふので、伊藤と大久保は、其旨を、大使へ物語つたので、然らば、吉田の來るまで待たう、といふ事になつて、亞米利加の出發が、又々延期される事になつた。

幾らか原書を読む者は、益々、師を求めて、書を學ぶとか、或は語學に通じて居ない者は、通辯を介して、米國の政體や政治の事を取調べるとか、それ／＼に、研究はして居たのであるが、其中にも、流石に、木戸は、偉い所があつて、段々、米國の政體の模様を調べて、久米邦武外數名の者に、米國の憲法を調べさせたり、或は國會の模様などを、研究させて居たのだ。政治や法律の事を、研究するに就ては、無論、顧問といふやうな者が、無ければならぬのであるから、其頃、米國に於て、有名なテールといふ、博士を頼んで、顧問に雇つて置いた。此人は、誠に親切な人で、類に一同の爲に、勞を惜まず、顧問の役は、充分に盡して呉れたのであるが、或時、木戸に向つて、

「貴下が、屢々言はれる、日本内治の改良といふ事や、政治の執方を變へる、といふ希望も、固より悪い事ではないが、左様な事は、輕率に爲すべき事ではなからう、と思ふ。唯、世界各國の制度文物を調べて、是が宜いからと、思つても、自國の人心や習慣に、あまり遠ざからないやうにして、改革に着手せぬと、それを却て弊害を醸す事になるのであるから、其點は、深く御注意なさい。又、是から日本が、制度政體の事に就て、段々、改革をして行かう、といふならば、モンテスキューといふ、學者の書いた、萬法精理といふ、書物があるから、之を研究して、同書の主

義に基づいて、改革に着手したら、宜しいでせう」

唯一時、雇はれた顧問でも、流石に親切なもので、斯ういふ忠告を、與へて呉れたのは、木戸としても、洵に嬉しい感があつた。此一行が、日本へ歸つて來てから、明治十五年までの間、盛に朝野の政治家で、萬法精理を読んで、三權鼎立の議論を唱へたのは、全く斯やうな事が、原因になつて居たのである。

一行中の首位を、占めて居る、木戸が、第一に、斯ういふ風にして、制度の取調べをしたり、學問の研究をするのだから、其他の少壯連中が、勉強したのは一通りでなかつた。されば、此一行が、條約改正や、國債募集に就て、縱令、失敗をして味増は付けたにせよ、歸朝の後に、日本國の進歩に對して非常な貢獻をした、といふのは、無理も無い事である。



### 外債募集と森有禮

一

外債を募集して、必要な國費に當てる、といふやうな事は、丸で流行物のやうになつて、一にも外債、二にも外債といふて、類に騒いで居るが、乍併、借金といふものは、昔から返さなければならぬものと、極つて居るのだから、充分に返済の方法が、立たない以上、容易に外債なぞは、募集す可きものではない。

外國から一時、金は這入つて来て、それが爲に、融通が付くから、銘々の懐が、膨んだやうには思へるが、懸て、それが年何朱といふ、利息を付けて、元方へ拂込まなければならぬのだから、唯一時の人氣を取るとか、當も無い、遺算段の臭蓋主義で、やられた日には、それを背負ひ込んだ、國民が、後日になつて迷惑するのであるから、外債募集なぞといふ事は、よく考へてやつて、貰はないと、困る。

何うせ、貧乏世帯の事であるから、借金をしなければ定まりの付かぬ事は、よく解つて居るが、借金の仕方を、大に考へてやつて、貰はぬと、後日になつてから、ギンバタするやうな事になつて、果は、埃及や印度の、二の舞を履むやうな事にも、なるのであるから、外債好の政治家などは、深く心して貰ひたいものだ。

とは、いふても、著者は、外債募集を、絶対に非認するものではない。必要に應じてはドン／＼、借りてもよいと思つて居るが、返す時の事だけは、よく考へて居て欲しい、といふのである。

明治政府が、出来た時から、金が無いので、愈々、政府の組織が出来て、仕事を始めたから、金が無くなつた、といふのではなく、初めから無かつたのだから、少しでも動けば、直ぐに借金を、仕なければならぬ、といふやうな、有様になつて居たのである。折柄、岩倉大使の一行が、亞米利加に止つて居る、といふので、それなれば、吉田をやつて、大使の一行にも手傳はせて、亞米利加から、金を借りやう、といふ事を、考へ付けて、愈々、吉田清成が、華盛頓へ、頼へ、乗込んで来たのである。

吉田は、長州出身の人であるが、後に樞密顧問官になつて死んだけれど、一時は、評判になつた人物である。其時分には、外務大輔であつたが、外債募集を、主張して居た爲に、此使者を命ぜられて、やつて来たのだ。華盛頓へ着くと、直ぐ岩倉公に面會して、政府の計畫を打開けた。

「借、斯ういふ事情でありますから、是非共、大使の御助言を願ふて、外債の運びが付くやうに、願ひたいものです」

岩倉は、軽く首肯して、

「宜しい。それは、何處までも盡力する事にしよう。何うせ、金が無ければ、何事も出来ない。今、亞米利加人が、日本國へ對して、非常に好意を、有つて居て呉れるのは、何よりの幸ひであるから、此際に募集する、とすれば、或は意外の好結果を、見る事になるかも知れぬ。併し、それに就ては、木戸はんにも、話して見たら宜からう」

「然らば、さういふ事に致しませう」

吉田は、木戸に會ふて、段々、事情を話すと、木戸も、大賛成であつた。まだ日本を、踏み出してから、亞米利加の一部を、見ただけではあるが、各都市の状態を見ては、逆も、日本内地の事なぞは、問題にならぬ位に、整ふて居らないので、今度、歸朝したならば、大に内治の改良を計らう、といふ考へがある。其矢先に、外債募集の事が起つたのだから、自分等が、歸朝してから後に、意見を行ふに就ても、無論、金の要る事であるから、吉田の相談を、木戸が、否む譯はなかつた。



「さういふ次第であるならば、兎に角、森にも話して、あれに、専ら骨を折らせる事にしたら、宜からう」

「併し、森には、閣下から、御話を願ひたいです」

「宜しい。確かに承知した。森の名前でする事が多いのだから、無論、森には、俺が話さう」

そこで、慇々、森を呼んで、相談する事になった。

外債を募集するに就ては、總ての文書に、公使が、副署しなければならぬのであるから、何うしても、森には相談しなければならぬのであつた。森は、木戸に呼ばれて、やつて来て見ると、吉田が、其席に居つて、外債募集の事が、本國政府に於て決した、といふ事を告げた。

「斯ういふ次第であるから、君の盡力を要するので、實は、呼んだ次第ぢやが、何ういふ手續にして發表したものか、それ等の意見があるならば、一應、聽いて見たいが、何うぢや」

「外債を募集して、何うしよう、いふのです」

「それは無論、内治の改良に就て、國費を要する事が多い。依つて、此地から金を借入れやうと、いふのであらう」

「ハ、一、其金は返すのでせうな」

「無論、返さなければならぬ、金ぢや」

「利息も、付くのでせうな」

「無論ぢや」

「それならば、止した方が、宜いでせう」

最初から、森が、木戸と吉田の説明を、聽いて居る態度が、如何にも冷然として、少しも之を重く見て、居ないやうな様子であつた。殊に、返さなければならぬのでせうとか、利息を拂ふのでせうとか、變な事を言ふて、それならば、止したら宜からう、といふやうな答へをするのは、甚だ以て怪しからぬ事だ、と思ふたから、木戸は、

「イヤ、其事に就ては、既に政府の方は、閣議を開いて、決してしまつたのであるから、今更に如何とも、致方が無いのぢや。吉田は、政府の命を蒙つて來たのぢやから、之に對して、公使が、彼是と、故障を言ふ可き、筋合のものではない」

と、頭ごなしにやつた。大概な者は、木戸位の人に、是れほどに言はれれば、直に凹垂てしまふのだが、森は、流石に、傲岩不屈の氣象とて、なかくそんな事に、恐れるやうな人でなく、ぐツと、椅子を進めて、木戸に向つた。

一一

乍併、森は、存外に態度も、落付いて居て、言葉も靜であつた。

「縱令、政府が、如何に決定いたしましたしても、自分は公使として、別に意見があるのでございますから、其意見を述べると答へた。森の様子が、喧嘩腰になつて來たから、木戸も、益々癪に觸つた。

「公使に意見があつても、政府が、それを採用しなければ、それまでの事ぢやないか」

「政府が採用しないのは、政府が、誤つて居るのであつて、自分が、本國の爲に、害となるべき事を注意して、それを、本國政府の役人が、用ひる事が出來ぬ、とすれば、國家の大事には換へられないから、自分は、飽迄も之を拒むの外はないのです」

「君が、さう言ふ理窟を、言ふて拒んだとて、本國政府の意見が、極つて居るならば、致方がなからう」

「政府の意見が、極つて居つても、自分は、何處までも反對します」

「然らば、此外債には不同意であると、斯う言ふのぢやね」

「左様」



「何故、不同意ぢや」

「外債といふものは、非常に恐るべきものであります。御互の間の貸借とは違つて、一たび外國から借金を、爲る事になれば、何うせ、何かを擔保に、取られるに違ひない。其外債に對して、返済すべき方法が、立つて居るならば、格別の事であるが、一時、財政が苦しいから、外債でも募集して、其埋合せをして、返済の事は、何れ緩つくり考へよう、といふやうな、姑息の彌縫策を以て、一國の財政を料理する、といふのは、抑々間違つて居る。先づ外債募集する、といふに當つては、少くも之に副署すべき、公使をして、満足させるだけの辯明を爲すべき、政府には、義務があるだらう、と思ふのです。然るに、唯我輩に、貴様は公使であるから、外債募集に就て、文書に副署しろ、といふても、吾輩は、容易に副署は出来ない。といふものは、前にも言ふた通り、外債といふものは、必ず後で返済しなければならぬ、義務を背負つて居るのだから、容易に外債募集なぞに、同意は出来ないのです」

「君が、さういふ説明はしないまでも、借りた金を、返さなければならぬ位の事は、判つて居る。本國政府が、之を決するには、それだけの覺悟があつて、決したのだらうと思ふから、君は、之に同意さへしたら、宜からうぢやないか」

「さういふ仰せがあつても、我輩は、斷じて同意する事は出来ませぬ。殊に、外債に依つて、國を亡ぼした先例も、世界には、澤山あるのですから、それ等の事を、考へて見ると、外債程恐るべきものはない。充分に方法が、立つて居るならば、格別の事であるが、唯、外國から金を借るに就て、お前は、之に副署しろ、といふやうな、簡單な交渉を受けても、我輩は、之に同意する事は出来ませぬ」

一旦言出したら、なか／＼利かぬ氣の森が、頑として、木戸の命令を、拒絶してしまつた。斯うなつて見ると、一番に困るのは、本國政府の命を受けて來た、吉田である。森の言ふ事を御道理として、引込む事は出来ぬ。何うしても、木戸と同じやうに、森を攻め付けて、承知させなければならぬのである。

明治六年に、福澤諭吉、西周、津田眞道、河禮之、森有禮、西村茂樹等の學者が集つて、今で謂ふ、俱樂部のやうなものを、造つた事がある。之を稱して、明六社と、いふのであるが、其中で、一番に奇抜な、議論を唱へて、屢々、世間を驚かしたのが、森であつた。武家天下が、六百年も續いて、其長い間に養はれて來た、武家氣質なるものは、容易に脱しないので、廢藩置縣になつてから、士の常職を解いて、四民皆兵の制度が、敷かれてから後も、矢張り、士族なる者は、何處までも、昔の武士のやうな、心持を有つて居た。明治二年に、脱刀勝手なるべし、といふ布告が出たにも拘らず、頑固な士族は、未だ大小を、放さなかつたものであるが、其際に、廢刀論を、唱へ出したのが、森であつた。是が爲に、森は、士族から憎まれた事は、一通りてなかつたが、遂に森の意見が行はれて、廢刀令が出たのである。英吉利や、亞米利加で、養はれて來た、森は、無論、耶穌教信者で、西洋崇拜者であつたから、無論、一夫一婦の議論を唱へて、日本に古來から、畜妾の惡風があつた。それに反對して、頻りに攻撃を加へて、茲に男女同權論が、唱へ出されたのである。日本は、昔から女に對して、之を卑むの氣風があつて、或は女子と小人は、養ひ難し、とか、我は女は三界に家無し、とか、いふやうな事を、言ひ傳へて、ひどく女を、壓へ付ける習慣があつた。女は、人の妻として、唯一室の中にあつて、家政の手傳ひさへ、仕て居れば宜い。臺所へ出て、食事の支度さへ、満足に出來れば、それで、女の役は濟んだものである、といふやうな事を言ふて、一寸、表へ出るのにも、夫の許可を得なければ、自由が利かない、といふ程にまで、女の權利は、押へられて居たのである。さうした時代に、男女同權論を、唱へ出したのだから、一般の人が、眼を剝いて、驚いたのも無理はない。男女は、果して同權なるべきものか、何うか、といふやうな理窟は、解らないが、兎に角、もう少し權利を、持たせても差支の無いものである、といふ位の考へは、書物でも讀んだ者には、あつたのだが、同權論を、唱へ出して、一夫一婦の説を、公然、天下に提唱する、といふやうな事は、森でなければ、なか／＼出來ぬ事であつた。近頃では、人が教へて、お前達は、男と同じ權利を、有つて居るのであるぞ、と言はないでも、所謂、新しい女なるものが、飛出して來て、盛に男以上の權利を振廻して、



或方面へは殊に發展して居るのであるから、此以上に、權利などを與へた日には、何んな騒ぎを、仕出來すか知れない。もう同權論を、唱へる必要も無いが、未だ明治の初めには、斯うした議論が、極めて奇抜なる説として、見られて居た。森は、當に自分が、其議論を唱へるばかりでなく、實行した一人であつた。山口縣令をして居た時、妻君を迎へる、といふ場合になつて、福澤に立會ひを頼んで、契約書を取交して、結婚の式を終つた。無論、夫妻同權の契約書であつたが、而も、結婚した所が、寺であつた、といふのだから、當時の人は、如何にも、其遣方が可笑しい、といふて、非常に森を嘲つたものである。西洋では、結婚式を擧げる場合には、教會へ行つてする、といふ事はあるが、日本の寺は、死んだ時に行ぐ外、決して行くべき所ではないのだ。それを結婚の場合に、寺を使つたなどは、恐らく森の外に、今以て無からう。

二一

斯うした風氣の森が、飽までも拒んで、木戸の命に従はないのであるから、脇で聽いて居た、吉田が、もう堪らなくなつた。

「オイ、森ッ、君は、何うしても、木戸さんの仰せに、従ふ事は出來ぬ、といふのか」

「無論」

「無論ぢやないぜ。君が、愈々、木戸さんの仰せに従はず、本國政府の命を拒む、といふ事になると、其使命を蒙つて來た。我輩は、全體、どうなつてしまふのだ」

「君の事までは、考へては居らぬ。我輩は、我輩の立場から、議論するのであるから……」

吉田も、聊か顔色を變へた。

「何だと、君は、君の立場だけ考へれば、他人の立場は、何うても宜い、といふのか」

「無論」

「コリヤア怪しからん。さうなると、貴様は、我輩を殺す、といふのか」

「イヤ、別に君を殺す、とは言はぬが、併し、君が死ぬのは、御隨意ぢや。君が、死ぬからと言ふて、我輩の持論までも、棄てる譯には、いかぬよ」

「何を吐すか」

と言ひながら、吉田が、突然、飛び掛かつて、森の頭を、一つコツンとやつた。ハイカラの教育は、うけて居ても、

鐵骨稜々たる森は、斯んな事で、怯む男でなかつた。

「何をツ、貴様、生意氣なツ」

と、今度は、森が、吉田の胸倉を取つて、力まかせに押倒した。吉田が起き上がらう、とするのを、押へ付けて、二ツ、三ツ、續けさまに、殴り付けた。木戸は驚いて、仲裁に這入らう、とするが、兩人は、上になり、下になり、組打をして居て、容易に離れさうもない。さう斯うする中に、物音を聞付けて、段々、人が集つて來て、双方へ引分けた。

流石に、木戸は、森の態度が、如何にも不遜であつて、自分の前も憚らず、吉田と組打をするなどは、甚だ以て怪しからぬ事である、と思つたから、森に向つて、

「君は、全體、何ういふ考へを以て、さう頑固な事を言ふて、我輩の命に従はぬ、といふのか。苟も我輩は、全權副使として、斯く派遣せられて居る以上、君は、公使として、我輩の命令に従はぬ、といふ事は、出來ぬ筈ぢや。然るに、此野蠻の行爲をして、飽くまでも、我輩の命を拒む、といふのは、如何なる次第であるか。先づ其理由から聽かう」

木戸の語調は、大分激しかつたが、森は、一向平氣であつた。



「我輩が、好んで始めた、喧嘩ではないのです。閣下も、御覽になつて居る通り、吉田の奴が、我輩に、撃つて掛かつたから、我輩が反撃を加へただけの事であつて、是位の事は、格別、閣下へ對して、御無禮とも心得ない。又、如何に閣下が、我々の上役であつても、日本國の前途に、害を残すやうな、命令に對しては、服従する事は出来ませぬ」

「何と、日本國の前途に、害を遺す、といふのか」

「左様」

「そ、そ、そりや、何ういふ譯ぢや」

「何ういふ譯か、と言ふと、閣下は、妄に外債を起して、一時の財政を彌縫する事は、却て國家の前途に、思ひを遺す、といふ事實を、世界の歴史の上に求めたならば、敢て我輩が、喋々するのを待つまでもない。強て、我輩に、意見を述べよ、と仰せられるならば、述べても差支ないが、それ位の事は、閣下としても、御承知の筈である。殊に、吉田が、政府の命を受けて、其大任を受けて来た、といふにも拘らず、我輩を説伏して、反對する事の出来ぬやうに、爲るだけの意見を吐き得ないのは、外債募集が、日本國の前途に、不利益になるといふ、何よりの證據ともいへませう。何れにしても、我輩は、此命令に對しては、服従する事は出来ませぬ」

是までに言はれては、もう仕様が無いから、木戸はいよく怒つて、

「宜しい。さういふ譯ならば、飽までも反對するが宜しい。君の副署を求めずして、隨意に募集するから、君は傍觀して居たら、宜からう」

「我輩も、それが好都合ですから、何うか、さういふ事に願ひませう。乍、併、我輩の意見は發表しますから、それだけは、念の爲に、御斷りして置きます」

森は、剛情を張り通して、其日は、公使館へ引上げた。

森と吉田の組打は、忽ち隨行員の間に、割をかけて傳へられたから、大久保の耳にもはひつた。そのうちに、木戸からも話があつたので、大久保は、森を呼んで、段々、説付けたけれども、森は、外債募集には何としても反對である、と言ふて、大久保に對しては、随分、細かい議論までして、外債募集の危険を説いて、大久保を、説付けやうとした位であつた。強ちに森の反對は、感情の衝突のみではなく、一個の見識を以て、反對して居たのである。

元來、吉田と森は、兄弟のやうに、仲が好かつたのだが、此一事から、双方反目してしまつた。到頭、お互に笑顔を見せずに、世を終つた。尤も、此外債募集が、出来なかつた爲に、吉田は、政府へ對しても、頗る面目を失つたのであるから、吉田が、怒つたのは無理もない。

四

外債募集は、木戸の發意でなく、吉田が、東國からやつて来て、木戸に、政府が、斯ういふ風に極めた、といふ事を話して、大使の一行にも、盡力を頼む、と傳へたので、唯一通りの力を添へる積りであつたのが、意外にも、森の強硬な反對があつて、吉田の立場が、難かしくなつて来たのを見て、木戸が、口を出した。それが原因になつて、到頭、木戸自身で、考へた如く、力を入れた爲に、森と、衝突してしまつたのだ、詰りを言へば、吉田が争ふべきを、木戸が、引受けた形に、なつてしまつたのだが、併し、吉田にして見ると、自分の使命を、妨げられたやうに感じたのは、無論の事であるが、森が、頑固な事を言ふて、更に自分の意見を、入れて呉れないのが如何にも續に解つたから、到頭、殿り合ひの喧嘩を、始めるやうにもなつたのだ。

何れにしても、森が、公使として、是までに強い反對をした、といふのは、流石に、偉い所がある。況して郷國の先輩たる、大久保が、仲裁までしたにも拘らず、それすら撥付けてしまつたのは、平生の氣象も思はれて、小氣味の



好い事であつた。

翌日になると、森は、自らペンを執つて、外債募集に、反對の意見を、各新聞社に、投書した。グラランド大統領には、岩倉大使の一行から、外債募集に就て、助力の依頼があつた。それが爲に、グラランドは、各方面の人を集めて、募債の勧めをした。殊に、斯うした事に就て、勢力を、有つて居る、富豪等に、懇談を遂げて置いた。所へ、反對の意見が現れたので、一度は、大統領の徳意に依つて、募債に應じやう、とした者も、二の足を踏んで、考へ出す、といふやうな譯で、如何に大使の一行が、骨を折つた所で、此状態では、迎も募債は、覺束なくなつて來た。

福地と伊藤が、慌たゞしく木戸の部屋は、飛込むやうにして這入つた。

「何處へ、行き居つた」

「實は、福地と、飲みに行つた所が、意外なものを見たので、大急ぎで、引返して來たのです」

と言ひながら、伊藤は、福地の方を顧みて、

「オイ、福地、其新聞を差上げろ」

福地は、木戸の前へ、四五枚の新聞を出した。木戸は、固より英語の解らない人である。其新聞は、手にも取らず伊藤に向つて、

「こりやア、何ういふ事が、書いてあるのか」

「實に怪しからん事です。森といふ奴は、何故、あア僻んだ了簡を、有つて居るのでせうか。是までに爲すとも、と思ふ位に、頑強な反對をして居るのです」

「フ、ム、そりやア、何ういふ事か」

「例の外債募集の一條に就て、反對の意見を、發表して居るのです」

「ウム、それが何うした、といふのか」

「詰り、此際に於て、日本政府が、外債を募集すると、いふのは、不當であつて、又、此募集した外債を、如何にして返済する、かといふ事の方法も、定まつて居らぬのに、先づ以て、募集に着手する、といふのは、順序を誤つた事である。のみならず、日本國の現在の状況からいへば、是位の外債を募集せずとも、國の方で、何とも都合が付くのである、といふやうな意味の事が、書いてあるのです」

木戸は、目を丸くして、

「さういふ怪しからぬ事が、書いてあるのか」

「さうです。それに、斯ういふ理由であるから、自分は、反對の意見を、持つて居る故に、副署を謝絶した、といふ事まで認めてあるのですが、苟も公使として、本國政府が定めた、方針に對して反對するのみならず、斯ういふ議論を書いて、新聞へ投ずる、といふのは、實に怪しからん事と考へますが、何うなさる積りですか」

福地も、言葉を添へて、

「何うも、閣下、是は森が、殊更に、外債募集の妨げをする、としきやア思へませぬが、斯ういふ事になると、迎も外債募集は、充分に出來ますまい、と思ひますが、何うなさる積りですか」

暫く考へて居た、木戸は、

「宜しい。何とも勝手な事を、させて置け、我々は我々としての力の及ぶ限りを、やつて見る積りぢやから……」

伊藤は、少しく慌て氣味で、

「閣下は、さう仰しやつても、肝腎の森が、反對の意見を發表するやうでは、此募集に應ずる者は、多くあるまいと思ひますが、如何でせう」

「縦令、森が反對しても、我々の名を以て、募集して之に應じない、といふ筈はない」

斯う言はれて見れば、伊藤も、福地も、止める口實が無いから、困つた事になつた、と思ふ外なかつた。



所へ、グラント大統領から、使者が来て木戸に、直に來て呉れ、といふのであるから、早速、支度を整へて、行つて見ると、グラントは、

「森さんが、斯ういふ意見を、發表いたしました」

と言ひながら、例の新聞を、前に出した。

「貴下は、是を知つて居りますか」

「エー、よく知つて居ります」

「斯ういふ事になりますと、募集に應ずる者は、疑ひを起して、自然、手控へをするやうになりますから、募集の結果が充分であるまい、と思ひます。苟も外債を募集して、其應募者が少い、といふやうな事になれば、其國の信用に關するから、寧ろ此度は、中止する事にして、又、他日の好機會を見て、募集する事にしたら、何うてありますか。何うしても、公使から、斯ういふ意見が、出て見ると、強て募集に應じろ、といふ事を、國民に勧めかねるのてありますから、是非、今後は中止したら、宜しいでせう」

森に妨げられたのが、如何にも癪に觸るから、何處までも押通して、やつて見る氣にはなつたが、肝腎のグラント大統領に、斯う言はれて見れば、それでも、押切つてやる、といふ事は出来ない。縱令、やつて見た所で、逆も、募集に應ずる者がある譯もないから、グラントの忠告を謝して、歸つて來ると、岩倉の前に出た。

「斯ういふ次第でありますから、森に對しては、相當の處分をして貰ひたい」

と言ふて、頻に追つたけれども、岩倉は、

「何れ、大久保とも、相談の上、決する事にしやう」

といふ譯で、森に就ては、何うするといふ答へを、與へなかつた。政府が命じた、公使を、大使の一行が、何うするといふ事は出来ない。木戸の方でも、詰り、森に對して、彈劾の意見を、一通り述べただけで、何も此場合に、免職

にして呉れ、といふやうな、意味ではなかつたのだらう。何れにしても、此一行が、亞米利加に滞在中は、條約改正談判の中止といひ、外債募集の失敗といひ、散々の不始末を重ねて、這々の體で、英吉利へ向ふ事になつた。



# 路銀の詐取

一

大使の一行は、種々の失敗を置土産にして、亞米利加を離れ、英吉利へ、向ふ事になつた。倫敦へ着いてから、路銀を残らず失つて、體裁の好い、乞食同様の有様になつた、といふ珍談があるから、其次第を述べやう。

それよりズツと前に、倫敦の或銀行が、段々、業務の失敗から、殆ど破産をなさうに、なつて居た。折柄、日本帝國の全權大使、岩倉の一行が、歐米漫遊の途に就いた、といふ事を聞込んで、銀行の支配人が、何うしても、此一行の路銀を預つて、一時の急を、凌ぐ外は無、といふ考へから、左様するには、日本人を取込まなければならぬ、となつて、段々、調べてみると、其頃、倫敦へ来て居た、日本人の中に、南貞輔といふものがあつた。是は、長州出身であるから、一行中の利者たる、木戸と、同郷ではあるし、旁々、之に働かせたならば、何とか説付ける事も出来やう、と見込んで、支配人が、様々の方法を以て、貞輔を迎へるやうにして、到頭、不相應の給金を以て、抱込んでしまつた。貞輔は、何ういふ譯で、斯んな優待されるのか、それが、殆ど解らなかつたけれど、兎に角、自分の思つたよりは、良い待遇で抱へて呉れたから、直ぐ行員に、なつてしまつた。それから、幾日か経つと、支配人が、貞輔を呼んだ。

「南さん、もう仕事終りましたから、食事に行きませう」

「へア、御供ませう」

「時間になりましたから何時もの俱樂部で、待つて居ります。若し、一緒に行きますなら、其方が都合宜しいが、貴下は、用事の都合、何うありますか」

詰り、不用の人間を、雇ひ入れたのだから、南の用事といふて、格別に難かしい事はないのだ。支配人さへ、承知して呉れれば、時間前に歸つても、差支はないのであるから、

「もう、別に用事はありませぬから、貴下が、行かれるのならば、私も、一緒に参ります」

「それでは、さうませう」

銀行業者の集まる、俱樂部が、出来て居た。其樓上へ、南を、連れて来て、是から盛に御馳走をした。倫敦へ来て相當に月日も経つて居るから、洋食の一皿や二皿には、敢て驚かないが、兎に角、支配人が、非常に歓迎して呉れるのであるから、南としては、悪い氣もしないが、併し、幾分の疑は起つた。何ういふ譯で、自分を、斯んなに歓迎して呉れるのか、何か、之には仔細があるだらう、と、流石に、氣は付いたけれど、強て根問もせず、今日迄来たのであるが、今夜の歓迎の模様を見ると、愈々、何か仔細があるに違ひない、と思つた。

「時に、南さん、貴下に、少し頼みありますが、聽いて呉れませぬか」

「何ですか」

「外の事でもありませんが、此度、貴下の國から、岩倉さんが、全權大使として、歐米各國へ、漫遊に來ます事、知つて居ませう、一行の人数は澤山ありますから、其路銀の取扱ひを、私の銀行へ、依託して貰ひたいのですが、貴下、幸ひに長州の人あります。木戸さんと懇意ありませうから、貴下の紹介で、私の銀行へ、金を預けるやう、御盡力願ひます」

「偕こそ、此一條があるので、自分を迎へて呉れたのだな、といふ事が解つた。」



「御依頼ならば、一應は、働いても見ませうが、併し、金といふた所で、左までの大金でもありませんまいから、それ程、貴方が、力を入れて預かる、といふ程の額には、上りますまいぜ」

「否、金額は、大きいのであります。今、東洋第一の新進國として、世界に知られて居る、日本の大使一行の路銀を私の銀行で取扱つた、といふ事が、非常な名譽になるのであります。又、此銀行の名が世界へ知れ渡る事にも、なるのでありますから、其意味に於て、是非、私の銀行へ、路銀を取扱はせるやうに、盡力たのみます。それに、貴方も、知つて居る通り、此銀行の取引先は、世界各國の大きな都會には、どこにもあります。各銀行と、爲替組んで居りますから、金の入用の場合には、少しも差支なく、引出せます。又、長い道中に、澤山の人が揃ふて、路銀を、持つて歩きます事には危険ありますから、是非、此金は預けるやうに、大使の方へ、申込んで貰ひたいのです」

「宜しい、盡力する事にしませう」

「何うぞ、何分願ひます」

「承知しました」

是から支配人は、南を相手に、球突きを始めると、態と敗けて、幾らか儲けさせたり、時間が遅くなつてから、オペラへ行つて、女優の美しいのを聘んで、珈琲店に、夜を更かす、といふやうな譯でそれから、二三日の間、南の持方といふものは、一と通りでなかつた。

銀行の内部が、非常に苦しくなつて居るから、其融通上、岩倉一行の路銀を預つて、一時の急を凌ぐのである、といふやうな、ひどい機略があつて、説きつけられた事は、南には、解らなかつたのだ。銀行業務の事には、全然、通じて居ない、南には、逆も、そんな詳しい事の解る筈はなく、行員となつて、半月や一月位、帳面を書く脇に、控へ

て居たつて、なか／＼内部の秘密なぞが、解るものではないのであるから、全く銀行の名譽の爲に、又、岩倉の一行の便利の爲に、斯ういふ相談が、あつたのである、といふ風に、解釋してしまつて、南は、本氣に乗込んで、是から段々、自分が、知つて居る人の、傳手を求めて、盡力する事になつて、是が爲に、一部分の金は、其銀行へ預ける事になつた。けれども、未だ充分の折合が付かないで、全額を預ける、といふ迄には、なつて居ないのであるから、銀行の方からも、旅費を出して、南を、亞米利加へ、差向ける事になつた。

そこで、南は、桑港へ急行して、待受けて居る所へ、岩倉大使の一行が来たから、早速、木戸に面會して、段段説付けたので、さういふ譯ならば、此方へ、持つて来た。金を其儘、銀行へ託する事にしよう、といふので、日本から一度、爲替を組んで、亞米利加の或銀行へ預けたのを、南の周旋した、銀行へ預け替にしたから、南も、大に、面目を施して、岩倉の一行に先立つて英吉利へ、歸へる事になつた。

一一

破産をしさうな銀行が、強ひて其秘密を隠して、愈々難かしいといふ、瀬戸際に、事情を知らぬ者を欺いて、金を預つてしまつてから、何うにも、斯うにも、防ぎが付かないで、銀行は破産して、預けた者は吃驚する、といふやうな事が、我國の近來にも、頻に流行つて来たやうだけれど、此位悪い事は無い。

殊に、中産以上の者を、對手にして居る、銀行業者が、往々にして、斯うした不徳の行爲を爲るのは、大に嚴戒を加へてやらなければならぬ、と思ふ。一文二文の端金から、生爪を剃すやうにして溜込んだ、僅かの臍繰金を掻集めて、さうして、一旦に潰してしまふ、といふやうな事は、泥棒よりも酷い。長い間の取引があつて潰れたのは、同じ口惜しいにしても、幾分の諦めも付くであらうが、少しも關係の無かつた、銀行へ巧く騙されて、金を預けた。それから三日目に潰れたなぞ、といふのは、逆も預けた者に、諦めの付くものではない。又、潰れるやうな銀行に限つて



必ず其秘密を、隠して置いて、澤山の金を預つてから、支拂停止に爲るといふやうな事は、よくある例だ。東京の或銀行が、破産した時分に、預金者の中で、發狂した者が出来るやら、夫婦別れをするやら、親子喧嘩を始めるやら、悲惨な事柄は、一つや二つで無かつた。

さうした事を見聞した、重役が、若し人間であるならば、心の悩みは、一生免れる事は出来まい、と思ふが、それまでにしても、一時を彌縫したい、といふのは、如何にも淺ましい了簡である。

世界第一の都市たる、倫敦の眞中に在る、銀行が、さうした不徳儀を働くとはい、固より思ふものもなく、又、銀行の名も、相當に知られて居つたから、充分の安心があつて預けたのであらうが、南は、全く支配人に騙されたのであつて、木戸を説くにしても、幾分の嘘を言つたには、違ひない。兎に角、一行の金は残らず、其銀行へ預けてしまつた。

南は、得々として、殆ど銀行の客員の如き格式で、莫大な給金を貰つて、威勢好く、其日を送りながら、大使一行の到着を、待つて居た。

然るに、岩倉の一行は、散々の敗北で、亞米利加を去つて、倫敦へ、乗込んで来た。此處でも、非常な歓迎を受けて、英國政府の注意から、取つて置いて呉れた、旅館へ、一同は這入つた。夕食を終つて、一と息吐いて居る所へ、南が、木戸を訪ねて来た、といふから、早速、案内をさせた。亞米利加で、會つた時分には、非常に勢ひの好かつた、南は、今日に限つて、何うしたものか、何となく悄然として、見る目にも、氣の毒な位に、消沈して居た。

「ヤー、南か」

「ハイ」

「どうした」

「エー、今日も、御出迎へに出ようと、心得て居りましたが、何とも申譯のない事が出来まして、ツイ外出するの

も、氣が進みませぬで、愚圖愚圖して居ります中に、閣下の御一行が、御到着になつた、といふ通知を得まして、又、御伺ひするにしても、何となく足が動きませぬので、遅くなつて相済みません」

「ハ、ア、足の病氣でも、患つたのか」

「イエ、何う致しまして、さういふ譯では、ございませぬ」

「足の動かぬ、といふのは、何ういふのか」

「イエ、實は面目次第も、ございませぬ事で、何ともハヤ、恐れ入つた次第で、ございます」

「お前は、面白い男ぢやな、事情を語らないで、詫びばかりして居たのでは、少しも、俺には解らぬぢやないか。何

ういふ事をして申譯がないから、改めて謝るとか、斯ういふ事にするとか、といふ事情を、言ふて呉れなければ、話の筋が解らぬではないか」

「ハイ、實は、例の路銀の御預けを願ひました、銀行の事でござりまするが」

「ウム、それが何うした」

「一昨日、支拂停止になりました、休業してしまひましたので、ございます」

「支拂停止といふのは、何ういふ事か」

木戸には、まだ支拂停止の事情が、よく解らなかつたのだ。斯う正面から聴かれたので、南は、愈々狼狽した。

「ハイ、支拂停止と申しますのは、お預りした金子を、お返しする事が、出来ないやうになつたので、ございます」

「エツ、預つた金を返さぬ。さういふ事が、銀行では出来るものか」

「イエ、勿論、出来ない事ですが、銀行が、つまり業務上の失敗から、金の都合が付かなくなれば、預つた金を、支

拂ふ事が出来ない。併し、或日限まで、待つて下されば、内部の整理をして、一時に返せないまでも、漸次、返す

事が出来るやうに、なるのでありますから、何うか御勘解願ひたいのでござります」



斯う言はれて、幾分は解つたが、木戸には、まだハッキリと、支拂停止なるものゝ事情が、解らなかつたのだ。南は、唯悄然として、頭を垂れて居る。所へ、ノツソリと、這入つて來たのが、例の伊藤と福地であつた。

二二

南が、悄然として居る様子といひ、又、木戸が、眉を八の字にして、嚴しい顔をして居る様子といひ、何れにしても、普通ならぬ事だ、とは、見たばかりでも解つて居るが、案内無しに、飛込んで來た、兩人は聊か困つたけれど、其處は、流石に、伊藤と福地の事であるから、如才なく、

「何事か、起りましたのですか」

と問はれて、木戸は、伊藤に向ひ、

「今、南が、來ての話には、一行の路銀を預けてある、銀行が、支拂停止とかをした、といふのぢやが、全體、萬里遠征の孤客から、無理遣に金を預つて、今更渡すの渡さぬのといふのは、何ういふ譯か。甚だ怪しからぬ事ぢや、と思ふて、今、南に質問して居る所ぢや」

「エツ、何ですと、支拂停止です、と」

「ウム、其支拂停止といふ事が、俺には、よく解らぬのぢやが」

「そりやア、駄目です。もう迎も、取れる見込みはありませんぬ」

「ハ、ア、預けた金が取れぬ、といふのか」

「さうです。詰り、其銀行は、最初からいけなかつたのです。土地の者の金ならば、格別の事、萬里の波濤を、越えて來る、外國の旅客から、金を預るのに、様々の手段を以て、預つた後に、支拂停止など、といふのは、豫め今日の日のあるを知りながら、我々の金を、流用せんが爲に、預つたものに違ひないのですから、もう支拂停止の看板

を、揚げた以上は、縱令、銀行に、救済の途が、多少付くにしても、我々の金は、何時受取れるか分りません、意外な事になりましたな」

「フ、ム、是は容易ならぬ事ぢや」

と言ひながら、木戸は、南の方に向直つて、

「オイ、南」

「ハイ」

「何うする積りぢや。お前が、態々、此銀行へ預けて貰ひたい、といふ事を、俺に申込んだ時分には、先づ倫敦に於ては、あまり大きな銀行ではないが、手堅い點に於ては、他の銀行を凌いで居る位で、實に其商賣振から言ふても堂々たるもので、自分が、現に其行員の一人として、毎日のやうに勤めて居るから、内部の事情も、判つて居るし、旁々、此銀行に、預けて置く位、確實な事はありませんぬ、と、斯やうに申したから、我輩も、お前が、行員になつて居る位であるから、お前の言ふ事を聞いて、預けてやつたならば、お前の面目も立つだらう、と思ふて、そこで、斯ういふ場合に、なつたのぢやから、お前としても、何とか之に對するの處置を付けなければ、唯相済みませぬの一言では濟むまい、と思ふが、何うぢや」

南の顔色は、眞蒼になつて、唇の色までも、變つて來た。

「さう、仰せになられましたは、何とも申譯はございませんぬ。全く私の無念から、斯ういふ事になつたので、ござい

ますから、如何やうの御處置を受けましても、申譯はございませんぬ」

「イヤ、お前を、何うしようの、斯うしようの、といふ譯では無い。詰り、是だけの同勢で、押歩いて居るのに、今日から一文なしでは、何うする事も出來ぬのぢやが、今預けた金の全部が取れぬまでも、何とか一時の急を凌ぐ、方法を講じて呉れなければ困る、といふ事を、俺は、言ふて居るのぢや」



「左様、何うもさういふ事になりますと、自分の力に及びませぬもので、ごさいますから、偏に御詫び致す外は、無

いのでございます」  
如何に、問ひ詰めた所で、南の答へは、是だけの事で、何うにも仕様がな。流石に、福地は、堪らなかつたもの

か。

『南』

『ウーム』  
「ウーム、ぢやないぞ。貴様は、飛んでもない事をしよつて、何うも貴様のやうな奴を、あの銀行が、高給を出して抱へる、といふ事が可怪しい、とは思つて居つたのぢやが、今日になつて、考へて見ると、貴様を巧く抱込んで、我々一行の路銀を預つてしまつて、只取を極めよう、としたのだらう。貴様は、詰り其お先棒に、使はれた事に、なるのぢや」

伊藤も、共に口を添へて、  
「今、福地が、言ふた通りに違ひない。併、事茲に至つては、如何に南を攻めた所で、鼻血も出ないのだから、何とか善後策を、講じなければならぬが、何としたものぢやらう」  
と、是から色々、相談をして見たが、是といふて良い方法も、考へ付かないので、何れ一同にも相談してから、善後策を立てよう、といふ事になつた。

新聞では、盛に書立てるし、噂は大きくなるばかりで、果は、此一行が、路銀を預けて置いたが、それまで銀行の爲に、吞まれてしまつたといふやうな話が、それからそれへと傳はつて、一行の中でも、段々、諸方から、其話を聞いて来て、騒ぎは大きくなるばかりであつた。そこで、重立つた者だけが集つて、相談した末に、今更何うにも仕様がなないのであるから、寧ろ、事情を打明けて、英國政府に、一時の救助を仰ぐ、といふ外は無からう、といふ事になつ

て、伊藤が、其談判委員と、いふ格で、四五人の者を伴ふて、是から英吉利政府へ、相談に及んだが、幸ひにして、英吉利政府でも、事情が斯ういふ譯であるから、如何にも氣の毒だ、といふ考へて、一同の要求を容れて、呉れる事になつて、國許へ歸るまでの路銀は、立替へて呉れる、といふ事になつたから、一同は、ホツと息を吐いた。

其時に、木戸が、作つた狂歌がある。  
條約は結びそこない金とられ世間へたいし何と岩倉  
苦しい中にも、何處となく餘裕のあつたのは、流石に木戸だけの事はある。又、一行中の島地黙雷が作つた。狂歌

に、  
預けしを失ふもなほ爲替なりバンク不易と誰か言ふらむ  
預けた金が無くなつて、乞食同様の境遇にはなつたが、英吉利政府の救濟を受けて、纔に息を吐いた。さうした間にも、斯んな歌を詠んで、騒いで居たのだから、幾分か暢氣な所はあつた。兎に角、銀行の支拂停止を、聞いた時は流石の木戸を首め、一同も途方に暮れた、といふ事である。



中 井 弘

一

英吉利の視察を終つて、佛蘭西へ這入つて来た。  
 其頃、巴里の公使館に居たのが、例の中井弘である。前名を、横山休之進といふて、維新前後には、京阪の地に於て、随分暴れ廻つたもので、中井の名を聞いては、大概な者は、慄へ上つた位である。小使錢が無くなる、と、夜更けて、消剣に出掛けては、幾らかの金を、持つて来て、平氣で、之を使つて居た、といふやうな、随分亂暴な事を、やつた人だ。薩摩の出身で、大久保利通に次いで先輩ではあるが、あれだけの學問と、膽力と、見識を、有つて居て、それで、遂に大臣になれずに、京都府の知事死んだ、といふのだから、實に惜しい事をした。  
 凡そ、今日までの役人中で、此人程、奇行に富んだ人があるまい、と思ふ。貴族院議員をして居た時に、直ぐ隣の議席に、着いて居たのは、松平某といふ華族であるが、其人が、極めて洒落者で、何時も全身を、テカテカ光らせて居て、何とも言へぬ、氣取方が、中井の癪に觸つて、始終惡戯をしては、苦しめて居たものだ。中井は、色々な癖があつた人だが、鼻糞を、掌で丸めて、丸薬になつたやつを、指の先で弾くのが、癖の中でも、一番に、汚い癖であつた。議席に連つて居て、愈々、丸薬が出来上ると、周圍を見廻しては、隣の松平の方に向つて、丸薬を弾き付ける。左なきだに、洒落者の華族だから、斯んな事をされては、とても堪らないから、

「オイ、中井君」  
 「ヤ、何ですか」

「何ですかぢやない。鼻糞を丸めるのは、君の自由ぢやが、我輩の羽織や顔へ、弾き付けては困るから、止めて呉れたまへ」

「ハ、一、其方へ、飛んだかね」

「其方へ、飛んだかぢやない。僕の方ばかりへ、飛んで来るから、困るよ」

「さうか。併し、今日のは、なか／＼固くて、丸薬にするのは骨が折れた。ハ、ハ、一」

斯ういふ調子で、何とも人が厭がる事だ、といふと、面白がつてやる、といふやうな癖があつたから、自然、人にも嫌はれて、敬遠主義を、取られるやうになつた。けれども、本人は、そんな事に頓着なく、自分の思つた儘に、何でも、やつて退ける、といった氣風で、中井に睨まれたら、何んな者でも、多少の迷惑を免かれず、執拗い惡戯をするので、愈々、人に嫌はれるやうに、なつてしまつた。それでも、中井は、平氣で惡戯を、續けて居たのだから、面白。

或時、木戸が、麴町の通りを、馬車で、やつて来ると、後の方から、オイ、と、呼ぶ者があるから、馭者に言付けて、馬の歩みを緩めさせた。

「一寸、待つて呉れ。オイ、桂ぢやないか」

と言はれて、木戸は、馬車の窓から、首を出して、見れば、追掛けて来たのは、中井であつた。昔は、桂小五郎といふたが、今は、木戸孝允と改めたのだから、木戸と言へば宜いのに、態々、桂の姓を呼ぶのが、中井の皮肉な所て、誰でも、是を厭がつて、逃げて歩いたものだ。木戸は、未だそれ程ではないが、伊藤や山縣なぞに會つても、昔の名を言ふて、決して今の名を、言はなかつた。誰にしても、出世して立派な身分になつてから、後に、足輕時代の名な



ぞを言はれるのは、ぞつとしたものでないから、自然、中井を避けるやうになる。呼止められたから、馬車を止めて待つて居る、と、聴いて、中井は、馬車に乗込んだ。

『ヤアー、好い所て會つた。一寸、其處まで乗せて貰はう』

『ウム、そりやア宜しい。乗つて行きなさい』

暫く話し込んで居る中に、自分が、馭者に代つて、手綱を執りながら、面白い話をするから、木戸も、其話に釣込まれてしまふ。馬車は、中井の家の前まで来た。中井は、ヒラリと飛下りて、格子を開けて、家へ這入つたが、

『ヤアー、大きに御苦勞、失敬する』

と言ひながら、障子を締めて、這入つてしまつた。之には、流石の木戸も呆れて、随分、癢に觸つた、仕方だ、とは思ふけれども、對手が、中井では仕様がなから、澁々、自分の邸へ歸つて行つたが、木戸程の者を、自分の家へ、態々、馬車を拵て、送り込ませる、といふやうな、悪戯を、爲る者は、多く無かつた。

井上馨の、晩年の夫人は、昔、中井の妻であつた。其間に生れたのが、原敬の初めの妻であつた。夫婦の間の、子まで儲けたけれども、中井は、放縱懶惰で、少しも家事を顧みない。洋行中にも、外國へ行つた切り、手紙も寄越さなければ、金は一文も送らない、といふ遺方であつたので、夫人も、熱々、厭になつてしまつた、といふやうな譯で、詰りは、大隈重信が、煤酌の勞は取つたが、最初の關係は、何ういふ所から付いたか、公然、そんな話をする譯にもいかぬが、兎に角、中井の細君は、さうした事情で、井上の妻に、何時か、なつてしまつたのだ、大概な者なら、目を剥いて怒るのだが、中井は、そんな事は、平氣な男だから、洋行から、歸つて來ると、井上の所へ、酒を飲みに行つては、困らせた果が、纏まつた小使錢を、持つて來て、面白く遊んで居た、といふやうな話もある。

大使の一行が、巴里に着いてからは、毎夜、引續いての宴會に、忙殺される程の有様であつたが、晝は、各官廳の内部を見物したり、又は、大きな製造所を見たりするので、殆ど寸暇も、無い位であつた。其案内は、多く中井が引受けて、ゾロ／＼一同を連れて、見物して歩く。恰度、田舎の赤毛布が、東京や大阪の見物に、出て來たのを、宿屋の番頭が案内する、といつた格で、土地の人が見たら、可笑しい事ばかりであつたらう。

然るに、中井は、巴里へ來てから、長く月日が、經つて居らぬにも拘らず、何んな所でも、精しく知つて居て、町を歩きながらも、少し大きな建物や、大きな商店に就て、詳しく説明して聽かせるので、一行の者は、感心してしまつた。流石に、剛情な中井だけあつて、此處へ來てから、僅かの月日の間に、詳しく土地の勝手を知る、といふのは、記憶力も強からうが、併し、本人の氣象が、斯くさせるのだらう、と、中井に對する、感服話で、持切るばかりであつた。岩倉も、木戸や大久保に向つて、屢々、中井の奇才、用ふべきを稱した、といふ位であつたが、或日、見物を終つて、旅館へ、歸つて來たが、其晩は、別に何處からも、招かれて居なかつたので、一と晩、緩くり休まう、といふので、一同は早くから、寢床へ、這入つてしまつた。

時候の加減か、岩倉が、頻に頭痛を覺えて、何うしても、眠る事が出來ない。ソツと、寢床を下りて、廊下を散歩して居ると、中井が、寢て居る、部屋の間から、熱燈が映して居るので、思はず、岩倉は、窓の前まで來て、その部屋を、窺いて見ると、引いてある、窓掛の間から、部屋の中が、よく見える。時候が暖かいばかりでなく、窓を仕切つてあるので、中井は、禪一つて素裸になつて、後鉢巻をして居る。唯見たばかりでも、不思議な風をしながら大胡座を組いて、前の所には、大きな地圖を擴げ、巴里の町案内を書いてある書物を、山のやうに積上げて、地圖を見ては、其案内書を披き、案内書を見ては、地圖を見て、頻に鉛筆で、標を付けて、手帳へ、書取つて居る。『ハ、一、倍は、中井の奴毎日、案内する所を、前の晩に、斯うして調べて置いて、それから物議顔に、色々な講釋をして居るのぢやな、よし、それならば明日は、一つ苦しめてやらう』



と、其晩は、部屋へ歸つて、寝てしまった。  
翌日は、何時もの通り、一行が揃ふて、見物に出掛ける。例の通り、中井は、先に立つて、類に町並の説明や、大きな建物に就て、説明をしながら行く、

「オイ、中井」

「何ですか」

「お前、なか／＼町の事は、詳しいのう」

「そりやア、何でも、我輩の知らぬ事はない。何處の町には、家数が何軒あつて、一番から末の番まで、目を閉つても、説明が出来る位で、往來に寝轉んで居る、犬の持主まで、心得てゐる」

「まだ、巴里へ來てから、日數が経たぬのに、よくさう覚えられたものぢやのう」

「こんなこと位、一度聽けば、直ぐ分るのぢやから、何でもない」

「何しろ、お前の記憶力が、良いのには、感服したよ。併し、今日は、其方の方へ行くのを止めて、此方の方へ行く、と思ふから、案内してくれ」

と、南を指して、行かうとする、中井に、西の方を指して、此方へ行かう、といふのだから、中井も、一寸狼狽した。

「イヤ、そりやアいかぬ。今日は、此方から見物するのが、順になつて居るのぢやから、其方が見たければ、明日、案内する事にするから、今日は、此方へ御出でなさい」

「お前の方の都合は、或はさうなつて居るかも知れぬが、俺は、此方が見たいのぢやから、案内者は、此方の方へ行きたいといふたら、其通り案内したら、宜いぢやないか」

「併し、それでは、見物の順序が違ふのだから、此方から、見て行かなければ、都合が悪い、案内する者も、手順が

違ふが、見て行くのにも、都合が悪いものぢやから、兎に角、案内者の言ふ通りになつて、居たら、宜いでせう」  
「イヤ、今日は、何うしても、此方の方を見たいのぢや。其方は、見たくないのぢやから、此方へ、連れて行つて貰ひたい」

此押問答を、木戸や大久保は勿論、悪戯者の伊藤や福地が、聞いて居たのだから、偕は、何か仔細があるな、と思つて、先づ伊藤が、

「オイ、中井、貴様は、案内者である以上、岩倉公が、此方へ、行かう、と言ふたら、其通り行けば、宜いぢやないか」

「黙れ、貴様なぞが、何を知つて居る。案内者の我輩が、此方の方から、見て行くのが順だ、と言つたら、其通りになつて居れば、宜いぢやないか」

「そんな解らぬ奴があるか。併し、貴様には、此方の方が判らぬのなら、それでも宜いが、判つて居るのなら、素直に案内したら、宜からう」

「俺には、別らぬ所はない」

「それぢや、案内したら何うぢや」

「宜しい。それでは、此方から行かう」

と、不承々に、中井は、岩倉が、行きたいといふ方に、やつて來た。

一一一

前の晩に、調べて置いた、秘密の一條を、岩倉に、透見をされた事は、中井も知らなかつた。無理遣に、此方へ案内をしる、と言はれて、今更に拒む事もならず、先に立つて、ズン／＼急いで歩くのだが、大きな建物を見ても、黙



つて通り過してしまふから、岩倉は、中井を呼止めた。

「今日は、少しも説明して呉れぬが、案内をする者が、説明して呉れぬては、初て見物をする者には、少しも状況が解らぬのぢやから、少しは説明して貰ひたいものぢやが、何うぢやね」

中井は、手を振つて、

「此方面には、説明するやうな所は、更に無い。詰らぬ町ばかりぢやからそれで我輩が、彼方から案内しよう、と言ふたのを閣下が背かぬから、斯ういふ詰らぬ所を、歩くやうになるのぢや」

「そりやア、さうかも知れぬが、少しは説明して呉れても、宜からう。向ふの右角に、五階造の家がある。あれは全體、何ういふ事を、商賣にして居るのか」

「ありや、下宿屋だ」

「ハ、一、立派な下宿ぢや」

「ウム、そりやア、バリエでも、一番の下宿屋だ」

「家の名は、何といふか」

「一番に良い下宿屋だが、家の名は判らぬ」

「其先に並んで居る、三階造の家、あれも立派なものぢやが、どういふ家かな」

「ありや、詰らぬ家ぢや」

「詰らぬ家といふ、説明はなからう。何ういふ家で、何を家業にして居るか、といふ事が判らぬ筈はない。お前は、巴里の町の事は、實に明るいのぢやから、其位の事が判らぬ譯はなからう」

「如何に、我輩でも、詰らぬ家の事は、調べて置かぬからな。それぢやから、南の方から、見て行けば宜い、といふたのに、閣下が背かぬから、斯ういふやうな、變な所へ、態々、這入つて來たのぢや」

此押問答を聞いて居る、連中が、漸く氣が付いたのは、偕は、中井が、岩倉に、何か尻尾を押へられて、此苦しみを、させられて居るのだな、と、氣が付いたから、さうなると、三方四方から、集つて來て、あれは何だ、是は何だと、一々詰問するやうに聽かれるので、流石の中井も、上氣する程になつて、へドモドするばかりであつたが、臆て下腹を押へて、往來へ胡座をかいた。

「ウム、あゝ痛い、ア、こりやア苦しい、逆も堪らぬ」

岩倉は、靜かに側へ寄つて、

「オイ、中井、何うしたのぢや」

「あゝ痛た、腹が痛くて、何うもしようが無い。昨夜のピフテキが、硬過ぎたから止さう、と思つたが、無理に食ふてしまふたから、其が胃に障つた、と見えて、痛いの、痛くないのつて、逆も、やり切れぬ」

「そりやア、困つたものぢや。普通の病とは違つて、さういふのは、重くなると困るからう」

「ウム、重くなるかも知れぬよ。一足も歩く事が出来ぬ。洵に相濟まぬが、先に行つて貰ひたい」

「臆談を言つちやいかぬ。お前に、離れてしまへば、東西の方角さへ、判らぬ我々が、勝手を知らずに、何處へ行く事が出来るか。無理でもあらうが、一緒に行つて貰ひたい」

「逆も、何うして、此痛さを堪へて、案内が出来るものではない」

「そりやア、何しろ困つたのう。持合せの薬があるから、之を取敢ず服んだら、何うぢや」

「いや、薬は大嫌ひぢや。又、我輩は、薬を服むと、尙病氣が重くなる」

「そんな、解らぬ奴があるか、薬を服んで、病氣が重くなるといふのは、子供の言ふ文句で、薬さへ服めば、直に治る併し、嫌ひな薬を服めば、尙更重くなる。何しろ、ア痛た、逆も、やり切れぬ」

岩倉は、ニヤ／＼笑ひながら、中井の肩に、手を掛けて、



「オイ、其病氣の治る、養生の法を、教へて遣はさうか」

中井は、變な顔をして、岩會を見ながら、

「ハ、一養生の方法がありますか。何ういふ事をするのですか」

「夜中に、褌裸で、鉢巻をして、毎晩、地圖や町案内の本を、見て居ると、治るよ」

と、いはれて、中井は、頭を押へた。

「ヤツ、閣下、見たのですか」

「ウム、昨夜、隙見をしたのぢや、ハ、ハ、」

「コリヤア、惘れ返つた。随分、閣下も、人が悪いぞ。それぢや、もう種が判つて居たのぢやな」

「それぢやから、俺は、今日の方向を變へて、お前に、案内をさせたのぢや。それにしても、お前が、案内者を、稼

業をして居る譯ではなし、知らぬ事は知らぬ、と言へば、それで済むのぢやないか。そんなに、苦しい思ひをして

知つた風をせずともよいではないか」

「イヤ、我輩は、何んな事でも、人から聽かれて、知らぬと言ふのは、嫌ひぢやから……」

「ウム、其負けぬ氣が、お前の値打なのぢやが、もう是で、お前も、知つた風をする必要はなからう」

之を聞いて居た、一同は、クス／＼笑ふ者もあれば、中井の背中を叩いて、ゲラ／＼笑ふ奴もある。癪に觸るが、

怒る譯にもならず、

「我輩は、先へ歸る。君等は、勝手にしたまへ」

と、いひ捨て、一行に構はず、歸つてゆくから、

「オイ／＼、お前が、我々を、置いて行つては、どうにも仕様がな」

「イヤ、もう案内者などは、御免蒙むる」

と、一同を置去りにして、歸つて行つてしまつた。一行は、別に案内者を頼んで、其日の見物を済ました、といふやうな、可笑しな話があつた。



## 感情の衝突

## 一

洋行中の珍談を集めたならば、それだけでも、一冊の書物が、出来る位に、到る處、話の材料をつくつて歩いて来たが、今は一切を略して、洋行中の話は、此位にして置いて、伊藤と木戸が、此洋行中に、火を燃ゆるやうな喧嘩をして、仲が悪くなる、續いては、大久保と木戸が、互に感情の行違ひから、仲違ひをする、といふ事情だけを、述べて置きたい。

大久保が、アメリカから引返して、國際委任状の事で、内閣が、紛糾して居た時分に、頭を持擧げて来たのが、朝鮮の問題であつた。まだ確と、内閣が決議した、といふ譯ではないが、何うしても、事の行掛から言へば、誰か朝鮮へ、談判の使節を、向けなければならぬ、といふやうな傾きに、なつて居たのだ。それに就ては、留守番をする、岩倉派の参議が、非常に心配して、其中の一人たる、大隈が、大久保に向つて、

「此際、朝鮮問題が起きて、面倒な事が起ると、困るから、是非、木戸公に、一歩先に歸つて下さるやうに、御話を願ひたい」

といふやうな事を漏したから、大久保は、それに答へて、

「それは、宜しい。我輩から、木戸へ話をしやう」

といふて、其儘、アメリカの方へ歸つて、それを大久保が、木戸へ、直接に話せば宜かつたのを、伊藤に耳打をして置いたので、伊藤が、そのうちに、機を見て、木戸へ、歸朝するやうに話をする積りに、なつて居たのだ。倫敦へ着いてから、伊藤が、或晩、木戸に向つて、

「大久保公が、委任状を持つて、御歸りになつた時、私に對して、斯ういふ御話が、あつたのですが。實は、留守の内閣に於て、朝鮮の問題に就て、面倒が起るやうな状況があるから、是非、閣下に、一歩先に、歸つて戴きたいといふ事を、留守の参議中から、大久保公へ頼みがあつた、といふので、私から、閣下へ、一應、申上げて置くやうに、といふ事でありましたから、今改めて申上げますが、何とか、御都合を遊ばして、閣下は、一歩先に御歸りになつたら、如何でございませうか」

と、事も無げに、伊藤が話したのを、木戸は、何う誤解したものか、さつと、顔の色を變へた。

「何を言ふか、我輩が、大久保と兩人で巡視する、といふのに、何の差支があるか、我輩が、此一行中に居るのが、何れ程、邪魔になるのか」

伊藤は驚いて、

「イエ、決して閣下が、邪魔になるといふ意味で、申上げたのではないのです。大久保公が、歸朝された時分に、大隈参議と、其他のものから話があつたので、斯ういふ意味の事を、閣下に、申上げて置くやうに、といふ仰せがありましたから、只今のやうに、申上げたのでございます」

「黙んなさい、大久保がさういふ事を、引受けて来たのなら、大久保から、我輩に話したら宜からう。心に疚しい事が、あればこそ、お前の口を藉りて、大久保が、俺に告げさせるのぢやらう。俺が居ては、邪魔になる、といふのなら、大久保から、直接に言へば、俺は、直にも歸つてやる。お前なぞが、大久保の手先になつて、俺を邪魔にする、といふのは、何ういふ譯ぢや」



「決して、さういふ譯ではないのです。閣下を、邪魔にするのなんのと、さういふ意味から、申上げたのではありませぬ。若し、御氣に觸りましたら、此事は取消しても、宜しいのでございますから……」

「別に、取消せとは言はぬ。誰が取消せ、と云ふた。我輩が、歸らなければならぬ必要があるならば、何故、大久保が、日本に止つて、我輩に代つて、それだけの處理を付けないのか。其事に就ては、我輩でなければならぬ、といふ事を、大久保が極める、といふのは、全體、何ういふ譯なのか」

「イヤ、それは決して、大久保公が、閣下でなければならぬ、といふ事を極めた、といふのでなく、詰り、大隈參議其他から、閣下に、一歩先に歸つて貰ひたい、と言ふたから、それを大久保公が、取次いだままでの事でせう」

「イヤ、それが、わしには、意味が解らぬ。大久保が、大隈に會ふたから、と言ふて、詰と、直ぐに肯くやうな、男ではない。それが容易く、大隈の勧めに依つて、俺に歸る事を促す、といふのは、詰り、俺を邪魔にして、斯ういふ事になつたので、其手先になつて働くのが、貴様なぢやから、怪しからぬ奴だ」

と、大喝されたので、伊藤も、ぐつと、癪に觸つたが、併し、胸を押へて、其日は黙つて、自分の部屋へ、歸つてしまつた。乍、伊藤は、甚だ不平に堪へない、といふものは、大久保の言ふ事を、取次いだゞけて、頭ごなしに、ガミ／＼と、叱り付けるばかりでなく、貴様呼ばはりされた、といふのは、何となく不快を、感じたのである。

伊藤と、木戸の關係から言へば、貴様呼ばはりされた、といふて、伊藤が、怒る筈はないのだが、それも、時と場所依るので、詰り、伊藤は、木戸を大恩人とし、先輩として事へて居るが、此場合に於て、斯ういふ無理な、叱言を言はれて、其上に、貴様呼ばはりされたのでは、伊藤も、流石に我慢が出来なかつたから、非常に不平を懷いて、自分の部屋へ下つた。此時分から、もう木戸と、伊藤の間には、面白くない感情があつた。殊に、伊藤の考へて居る、國政上の事は、却て大久保に依つて、運びを付ける必要が多くあつたのだから、自然と、大久保の方へ、伊藤が、近寄るやうになつた。さうした事を、平生、見て居た、木戸は、幾分か、不快に感じて居た時であつたから、木

一一

戸は、自分だけを、日本へ歸す、といふやうな、意味に解釋したから、斯ういふ事を行違ひが、出来たのであらうと思ふが、兎に角、之に依つて、木戸と大久保の間に、取返しの付かぬ、感情の衝突が、起きたには違ひないのだ。

明治年間の政治家で、伊藤博文程に、幸運な人は多くなかつた。見る影もない、土百姓の家に生れて、それで、一生を終つても、何處へ、苦情を持つて行きやうも無いが、不圖した縁故に纏つて、武士の仲間入をして、それから、ト／＼拍子の出世で、長い月日の間には、随分、危険の場合にも遭遇したが、それにしても、擦傷を、一つ負はないで、明治天皇の恩寵も深く、公爵で大勳位といふ、肩書を得て、一般の人間として、是以上の出世はない、といふまでに、昇り詰め、而も、其死際があつたから、殆ど申分の無い、一生と言ふても可からう。

桂などは、同じやうに大した肩書を買つて、無上の出世をしたには違ひないが、死際が、あの様であるから、是なぞは、好運な人とは言へない。伊藤に至つては、それとは違つて、壽命の上から言ふても、七十一歳であつたから、人生を、假に五十年と限つて、二十一年は、儲け物に、なつて居るのだ。壘の上で、病氣で死んだ所が、左まで不服は、無い筈である。而も、其最後が、ヘルピンに於て、朝鮮人の手に罹つて死んだ、といふのであるから、七十年の光榮ある歴史が、最後の一幕に於て、益々、其光を添へた、といふやうな譯である。若し、あの時に、伊藤が殺されずに、愚圖々々して居たならば、何うせ、待合の二階で、藝者に介抱されて、涎を垂しながら、死ぬやうな事になつて、折角の履歴にも、瑕が付くのであらうが、運の好い人は格別なもので、あつた立派な、終焉を遂げたのである。

尤も、其缺點を擧げて言へば、色々あるだらうが、兎に角、あれだけに、長い間、權勢を握つて居たにも拘らず、金錢の上に就て、厭な話の残らなかつたのは、實に感服すべき事である。其代り、女の事に就ては、一冊の書物が、出来る位に、様々な汚い話を、遺して居るが、其位な瑕は、日本流の政治家としては、止む事を得ない。表面には、



藝妓廢止論を唱へながら、内密で、小間使を孕ませて、手切金を取られて居るやうな、變な奴に比べれば、大威張りて、看板を掛けて、女狂ひをする、といふ處に、伊藤の面白い點があつた、とも言へるのだ。

周防國熊毛郡の東荷村と、いふ所から出た、百姓の林信吉といふのが、博文の實父である。遠い先祖の洗ひ立てをすれば、武門から出たのだ、とは言ふが、併し、兎に角、父は百姓であつたに、違ひないのだ。其父が、心掛の良人て、自分は、此儘に老朽るとも、切めて伴の俊輔だけは、大小差す、身の上に、仕てやりたい、といふ考へから、萩の城下へ、出て行つた。木戸が、まだ桂小五郎と、いふて居た時代で、不圖した事から惡意になつて、木戸の邸へ、屢、出入して居る中に、木戸の周旋で、伊藤直右衛門といふ、足輕の家で、相續人が無くて、困つて居る。多少の貯蓄もあつて、内福に暮して居た足輕ではあるが、其代りに、非常に吝嗇な奴である爲に、養子に行き手も、無かつたのだ。それを、木戸が周旋して、信吉を、養子にやる事にした。勿論、夫婦養子で、而も、俊輔といふ連子がある、といふのは、無論、向ふも承知の上で、愈々、養子になつたのであるが、それから、百姓の肩書だけは除れて、足輕といふ事になつた。假令、足輕でも、武士の方へ、縁が近い、といふので、喜んで信吉は、養子に行つたのである。

俊輔に對しては、文武の二道も、一と通りは修業させる事にして、其成人を、樂みにして居たが、俊輔は、洵に幸運な子供であつた。十六歳の時に、相州の宮田といふ所へ、幕府の命に依つて、毛利藩から、沿海警備の役を、引受けて居た。警備兵の交代期が来たので、是非行きたい、といふ、志願を以て、遂に藩廳の重役を動かして、宮田へ行く事になつた。其時に、隊長をして居た人が、來原良藏といふ人であつた。

來原が、木戸の爲には、妹婿に當る人である。さうした關係から、來原の部下に、なつて行つた、伊藤は、宮田に在陣、二年の間、良藏の爲に、武士一と通りの修養を受けた。そのうちに、任期が来て、國へ歸へる時に、良藏から、吉田松陰へ、紹介された。人間の運不運は、斯ういふ場合に、現れて来るもので、最初に事へた人が、來原といふ、立派な人物で、二度目が、松陰である、といふやうな事は、容易に得られぬ、好運であつた。而も、一人前の武士

士になつてから、主人同様にして事へたのが、木戸である。伊藤が、後の出世は、全く斯うした、都合の好い、経路から来た出世であつて、是等が、眞に運の好い人と、いふのであらう。

この關係から言へば、木戸と伊藤は、切つても切れぬ間柄で、通常一様の先輩後進とは、趣が違つて居るのだから、縦令、木戸の方から、素氣ない扱ひをしても、伊藤の方では、叩頭百拜して、其尻に、附いて行かなければならぬのが、人間の情義であつたにも拘らず、僅かな事の行違ひから、互に感情を悪くして、伊藤が、それを幸に、大久保の方へ喰ひ付いて、木戸に、後足で砂を掛けた、といふのは、甚だ不人情の至りである、といふて、頗に批難する者はあるが、併し、それは、一般の人の間に於て、言ふべき事で、苟も一見識有つた、政治家として、政府に立つ者は、己の政治に對する、意見を實行する上に於ては、若い時分に、世話になつた、といふが如き、親分乾兒の間柄を、何處までも持續して、厭でも、應でも、其人に附いて行かねばならぬ、といふ事はないのだから、斯ういふ事柄に就て、伊藤を批難するのは、正當な事とのみは言へまい。何れにしても、木戸が、僅な感情の行違ひから、伊藤を手放したのは、あまり感心の出來た事ではない。

三二

何んな偉い人でも、感情に激する事はある。何事も無い時は、冷靜に、考へて居て、喜怒を、色に表さぬ、といふ事も出來やうが、愈、實際の問題に出會つて、是非を争ふ場合になると、平生は、冷靜に、考へて居る人でも、却々、さうはならぬものだ。殊に、自分の境遇が、満足と與へて居ない、と、尙更に僻んだ、考へを以て、物事を見るやうに、なつて来るから、そこで、疝癩も起せば、無理も言ふやうになる。是は、偉い人でも、普通の人でも、それに變りはないので、詰り、偉い偉くない、といふても、大して違ふものではなく、要するに、紙一枚の違ひであつて、何處から何處までが偉くて、何處から何處までが偉くない、といふ區別は、殆んど別らない。如何に偉い、といふても、



矢張り人間である以上は、人間の癖は、必ず有るものだ。維新前に於て、實に立派な働きをして、様々の苦心をした、結果、明治政府を、造り上げて、自分も、其創立者の一人になつて居るのだが、愈、天下の事が定まつて政府の基礎が固まる、と、木戸は、蔭の人となつて、大久保が、表面に立つやうに、なつて来たのであるから、木戸としては、幾分の不平は、免れないのであつた。併し、それは、大久保が、無理に木戸を押し付けて、さうした譯でもなく、又、木戸が、自ら好んで、蔭の人になつた、といふやうな、傾きはあつたのだが、何うしても、蔭の勢力が盛になる、と同時に、大久保の權威が、非常に強いものになつて来て、何となく、大久保の爲る事が、癪に觸つて来る。それから先は、癖みが手傳つて、始終、大久保に對する、感情は好くなかつた。所が、洋行中に、自分の爲には、一番乾兒とも言ふべき、伊藤が、大久保の方へ、寄り掛かつて行く。其様子が、木戸の目には、よく見える。木戸が、是までの位置に昇るのに、伊藤の方が、却て木戸の爲に、是までの地位に、昇つたのであるが、其處が、人間の淺ましさと、自分の乾兒の中でも、一番に大切な、伊藤が、大久保の方へ、便つて行くやうな、様子が見えれば、益々、大久保に對する、反感は、高くなつて来るばかりで、延いては、伊藤に對しても、不快の感を以て、見るやうになるのは止む事を得ない。

然るに、大久保の指圖で、伊藤が、木戸に、一步先に歸れ、といふ事を促したので、それが、疝癢に觸つて、到頭、今までの不平を、爆發させてしまつたのだ。叱り付けられる、伊藤に見れば、好い氣持はしないし、それに、是から先政府の仕事は、木戸よりも、寧ろ大久保に依つて、料理される事が多い、といふ事を早くも見て取つたから、大久保の方へ寄らう、とする考へを、有つて居る、折柄、此感情の衝突であるから、どうしても、伊藤は、木戸を棄て、大久保の方へ、走る、といふやうな次第に、なつて来たのだ。それから、もう一つは、倫敦に居る時の事であるが、政府への報告書を伊藤が認めて居た。其處へ、木戸が、不意に這入つて来て、未だ、草案で、請書をしてない、報告書を、取つて見ると、其中に、一行の歸朝するのは、來る五月頃になるだらう、といふ意味の事が、書いてあつ

たから、木戸は、鬱かしい顔をして、

『オイ、伊藤、こりやア、何ういふ譯ぢや』

『何で、ございますか』

『五月頃に、一行が歸る、といふのは、何ういふ次第ぢや』

『それは、私の見込みを、書きましたのでございます』

『それは、いかぬぢやないか。何故、斯ういふ事を書くのか、お前が、五月頃に歸る、といふ事を書く、といふなら、そりやア勝手だが、一行の歸朝が、五月頃になる、といふのは、俺も、矢張り五月に歸る、といふ事になるが、お前は、一行の歸朝の期限を定める、といふ事を、全體、誰から申付けられて、さういふ事をするのか』

伊藤も、流石に、長い間、木戸の世話になつて居て、自分の恩人であり、先輩でもあるが、此叱言を聞いた時は、無理な事を、言ふと思つて、一時は、癪にも觸つたけれど、氣を取直して、

『仰せては、ございますが、五月頃に、丁度、歸朝をするやうな事に、なるだらう、と心得ましたものですから、斯う書加へましたが、悪ければ此一節だけは、抹殺しても差支ございませぬ』

『抹殺すると、せぬとは、お前の勝手ぢやが、歸朝の期日を、お前が、勝手に極めるのは怪しからぬ、といふて、叱言言つて居るのぢや。何故、そんな差出がましい事を爲るのか』

『さういふ意味で、書いたのではないのでございますから、御勘辨を願ひたい』

『さういふ意味でなければ、何ういふ意味で、書いたのか。此一行は、岩倉大使に、附いて来たのだから、大使が、歸朝の期日を定める、といふならば格別だが、お前なぞが、そんな事を、我々に、相談もなく認める、といふのは怪しからぬ。縱令、大久保が極めて、俺は、承知せぬ積りぢや』

木戸が、大久保といふ言葉に、力を入れて、ガンとやらかしたから、伊藤も『ハ、ア、倍は、大久保公の指圖に依



つて、認めたとはいふ邪推から、木戸は、斯ういふのであるな」と、気が付いてみると、もう争ふ氣も、なくなつてしまつた。それにしても、苦勞に苦勞を重ねて、浮世の事は、何でも心得て居る木戸程の人が、何うして、斯んなに僻むやうに、なつたのか、と、それを、思ふて來る、と、伊藤も、好い氣持はしなかつた。

『何うか、此一事は、私の過失ですから、御赦しを願ひます』

『赦す、赦さぬ、といふ事は別として、兎に角、斯ういふ事を書かれては困る。將來は、謹んで貰ひたい』

と、言ひ棄て、木戸は、室外へ出てしまつた。後に獨り、伊藤は、茫然、報告書を眺めて、考へて居た。

斯うした事情で、木戸と伊藤は、段々、感情が齟齬して來る、と、伊藤は、何となく、木戸を疎んじて、大久保へ近づくやうに、なつて來る。伊藤が、大久保へ近づく程、木戸は、不快の念を以て、兩人に對するから、日一日と、

双方の感情は、悪くなる許りであつた。

佛蘭西の視察が終つて、露西亞へ、這入つた時、丁度、日本から、使者が到着して、例の征韓論が、閣議に上つて頗る面倒な事になりさうであるから、成る可く、早く歸つて貰ひたい、といふ事であつた。是は、無論、岩倉派の參議からの使者であつたが、岩倉も、此報告を見た時には、非常に心配して、木戸や大久保を呼んで、相談する事になる、と、兎に角、打棄て置く事は出來ぬから、急いで歸らう、といふ事が、極まりかゝつた時に、木戸は、

『成程、此事は、心配には違ひないが、左まで急ぐには及ぶまい。といふものは、出發をする時、あれ程に、約束を

して置いたのだから、留守の參議も、決して之を決定する、氣遣は無い、と思ふ。議論は何のやうにして、大體の

方針は丙定しても、表面に於て、閣議をして決定さへ、しなければ、差支ないのであるから、それは、留守の參議

が、必ずしないに違ひない。依つて、我々は、見る所のは見、學ぶ所のものは學んで、歸る事にしたら、宜か

らう』  
と言ふて、急いで歸朝する事には、反對した。それは、左までの争ひにもならず、大久保も、同じやうな意見であつ

たが、是が爲に、此一行が、歸朝を急ぐやうになつて、途中の視察を省いたのは、事實である。



### 大久保木戸の軋轢

洋行中に、木戸と大久保が、段々、反目して来たのは、事實であつたのみならず、伊藤が、木戸に離れて、大久保の方へ附いたので、愈々、木戸は、大久保に對して、面白くない感情を、懐くやうになつた。

征韓論が、面倒になつて来た、といふ、通知を得て、誰か一人先に歸つて、其防ぎに掛からなければならぬ、といふ相談に、なつた時にも、木戸は、頗る反對して、左まで急ぐには及ばない、といふ説を固守したのだ、茲に於て、大久保は、途中から別れて、一行に先立つて、日本へ歸る事になつた。木戸は、殊更に、大久保と、歸る事を避けて、一行と共に、支那へ来てから、日本へ歸つて来た。

乍併、木戸の不平は、大久保と、睨み合つて居る位では、濟まなかつた。又、伊藤に、劍突を食はす位では、腹が癒えなかつたものか、日本へ歸つてから、岩倉大使の歸るに先立つて、三條公に送つた、書面がある。其中に、斯ういふことが書いてあつた。

孝允は、先年來申上置、猶此度も、追々、言上仕候通り、免職の處、偏に奉嘆願候、短才微力、不堪其任、上、朝廷も、冗員を被爲省候は、今日の御一急務に付、平生の宿志、被聞召候へば、公私、得其宜候儀に御座候間、幾重にも御許可奉願萬祈候。

と、いふのであつた。唯見れば、自分の力が、此大任を負ふに堪へないから、職を辭したい、といふだけであるが、併し、此場合に、木戸が、辭表を出す、といふ事は、甚だ其意を得ないのであつて、心中悶々の情に堪へず、不平を懐いて、斯やうな書面を、三條公に送つた、といふ事は、明かに推測出来る。

其前に、臺灣問題が起つて、それに就て、副島種臣が、支那政府へ、談判に行つた。此事は、大分面倒であつたが、遂に副島の剛直にして、少しも譲歩しない、談判の仕方が、極めて宜かつた爲に、支那政府も、遂に屈服して、日本の要求を、容れる事になつた。それが終つて、副島が、日本へ、歸つて来たのが、明治六年の四月二十六日であつた。それから、大久保が、洋行先から、歸つて来たのが、七月の二十三日であつた。稍々遅れて、岩倉大使が、歸つて来たのであるが、岩倉が、歸つて来た時は、西郷を、朝鮮へ遣はす、といふ事が、既に内定してしまつて、而も、木戸は、三條の手許へ、辭表を出して居る、といふやうな次第であるから、西郷等の遺韓使節問題に對する前に、先づ大久保と、木戸の調停を、計らなければならぬのであつた。それには、三條に送つた、書面の取消しを、なざしめるのが、第一であるから、岩倉の苦心は、一と通りでなかつた。そこで、歸朝早々、病氣屋を出して、岩倉は引籠つてしまつた。其引籠りの間に、何事も調べて、内部の調停が出来たら、そこで、表面に現れて、西郷派遣の儀に反對しよう、といふ段取に、なつて居たのである。

試みに、征韓、非征韓の兩派を、區別して見ると、斯ういふ事になる。三條は、先づ別として、西郷、板垣、江藤副島、後藤の五參議は、謂ゆる征韓派であつて、之に對して、新に歸朝した、岩倉、木戸、大久保、それに、大隈、大木を加へて五參議、更に下つて、伊藤博文、黒田清隆、井上馨、寺島宗則、陸奥宗光、澁澤榮一等の連中が、専ら征韓派に、反對したのである。西郷の方には、桐野利秋、篠原國幹、村田新八、島本仲道なぞいふ連中が、附いて居て、盛に活動したものである。



黒田は、西郷の爲には、一番の乾分であつて、西郷が、是程に、熱中して居る。朝鮮行に反對する、といふのは、可怪しな譯だが、是は、黒田としては、反對しなければならぬ、相當の事情があつた。西郷が、朝鮮へ行くのは、自から好んで、殺されに行くのである、といふ事を、知つて居るのだから、何うしても、黒田は、反對しなければならぬので、即ち西郷の弟、從道までが反對したのは、矢張り、其意味からの反對が、あつたのだ。尙、當時の參議を年齢の上から、見る事にしやう。西郷が四十七歳、副島が四十五歳、大久保が四十四歳、木戸が四十三歳、岩倉と大木が四十二歳、江藤が三十九歳、三條、板垣が三十六歳、大隈と後藤が、三十五歳といふ順位であつた。免に角、當時の内閣に列して、あの大問題に當つて、採み合つた、人達の年齢が、何れも五十歳以下の人であつたといふ事は、深く記憶しなければならぬ事であらう。六十にも、七十にも、なつた者に、政權を握られて、満足して居る、今の青年などは、此時分の歴史を繰返して、見るが宜い。

一一

大使の一行に先立ち、歸つて来た、大久保は、まさか、遣韓大使の一條が、是までに進んで居る、とは、思はなかつたのだ。唯、西郷が、朝鮮へ、大使として行く、といふ内相談が、あつた位に、極く軽く思つて居たのだが、實際に就て視れば、そんな事ではなく既に閣議では内定して、三條公より、陛下へ申上げである、といふまでに、運びが付いて居る、といふのであるから、之には、大久保も、頗る驚いて、段々、探つて見ると、今、此場合に、自分が、愁ひ啼を容れた所で、何うにもならぬ、といふ見込が付いたから、寧ろ、此儘に、岩倉大使が歸るまでは、手を着けぬのが宜からう、といふ考へて、箱根に避けて、殊更に、西郷にも、會はないやうにして居たのだ。大久保に續いて、木戸は、歸つて来たが、是も、病と稱して、三條公に、一片の書面を出して、辭職の意を、漏した切り引籠つて、何人にも會はないで居た。處が、大使の一行は、愈々歸朝した。形し、岩倉も、病氣届を出して、

來客を謝絶して了つた。岩倉が、病氣届を出したのは、詰り、全權大使として、此巡遊を終つて、歸つて来たのだから、病氣届を出して置かない、と、直に御前へ罷出て、巡遊中の所感を、申上げなければならぬし、留守を預つて居た、參議等にも、面會しなければならぬのであるから、其場合に、朝鮮問題が、若し話頭になるやうな事がある、と、岩倉としては、何と答へるのしようも無い、といふやうな、破目に陥るから、それで、病氣届を出して、來客を拒絶し、獨り靜かに、前途の事に就て、考へて居たのである。

此問題に就て、大木と大隈の對度は、甚だ曖昧なものであつた。苟も參議として、閣議に列する、一人である限りは、西郷が、朝鮮へ、大使として行く事を、宜いか、悪いか、といふ位の事は、言はなければならぬのであるにも拘らず、此兩人は、何等の意見も述べないで、其問題が、是までに、推進して行くのを、傍觀して居た、といふのは、甚だ無責任の至りである。

晩年の大隈は、頻に征韓論、當時の事を言ふて、相當に働いたと、いふやうな事を、言ふて居るが、それは、岩倉が、歸朝してから後に、暗中の飛躍を、試みただけの事であつて、其以前に於ては、大隈が、征韓論に就て、何れだけの働きをした、といふ事は、少しも判つて居ないのみならず、此問題に、大隈が、善いとも悪いとも、發言して居らぬ事は、現に、板垣退助が、著者にもよ、く打明けて、保證する位であつたから、征韓論に就て、大隈の態度は、甚だ曖昧なものであつた、といふ事は、いひ得るのである。

岩倉か、歸朝したのを幸に、大木と相携へて、岩倉を訪ねて、征韓反對の意見を述べて、大に岩倉を、煽動した所などは、何うしても、御殿女中の遣方である、として、見る事は出来ぬ、事の善悪は、姑く措き、自分は、表面に立つて、議論を吐かず、問題が、是迄に進むのを、看過して置きながら、岩倉が、歸つたのを幸に、秘密に煽動するなどは、御殿女中の遣方である。



然るに、岩倉は、比兩人から、始終の事は聴いたが、如何とも手の着けやうがない、といふのは、大久保と木戸の關係を、知つて居るからである。洋行中に、此兩人が、互に反目して居る事は、岩倉も、よく知つて居るのであるから、先づ以て、此兩人の調停をして、然る後でなければ、朝鮮問題に、手を着ける事は、出来なかつたのだ。此一事は、岩倉が、最も苦心した所である。若し愁に、調停の策を講じて、それが行はれぬ、となれば、一層、事が面倒になるのであるから、頼に之に就て、苦心したので。

所で、伊藤が、昔のやうに、木戸との親みがあれば、伊藤を使へば、調停役として、頗る適任ではあるが、伊藤も、木戸と争ふて、互に面白くない、感情になつて居ることが、判つて居るから、木戸と大久保の間に立つて、調停をする人物を、先づ以て、捜し出す必要がある。さうなると、容易に、其人を得ない。岩倉は、獨り心を苦めて居た。

岩倉は、苦心の末、都合の好い事を、やうやく發見した。黒田清隆が、西郷を、朝鮮へ遣はす事には、反對して居る、といふ事が判つた。黒田は、西郷の乾分であつて、事の善惡に拘らず、西郷の尻に付いて行くべき、關係を有つて居た人だが、此問題に就ては、熱心な反對者の一人である、といふ事は、如何にも、妙な次第であるが、併し、黒田は、理窟の上から、反對して居るのではなく、西郷が、朝鮮へ行けば、必ず殺される。さうなつては大變だといふやうな、簡単な事情から、西郷を遣はす事には、反對して居るのであつた。西郷は、縱令、自分の乾分が、いかに反對しても、強て之を叱り付けて、強て自分の意に従はせる、といふやうな事は、決して爲ぬ人であるから、黒田の反對は、其自由に、任せて居つたのである。従つて、西郷の弟、從道も、黒田と一つになつて、反對して居たのだ。そこで、岩倉が、黒田を利用して、調停を爲せよう、といふ考へになつて、或日、使者をやつて、黒田を招いた。

「ヤア、何か御用で、ごわすか」  
「オー、黒田さん、御相談申したい事があつて、御招きしたのぢや」  
「ハ、ア、そや、何ぎや事で、ごわすか」

「外の事でもないが、木戸と大久保の一條ぢや」  
「ウ、ウム」

と言ひながら、黒田は、膝を進めた。岩倉は、聲を潜めて、  
「實は、此兩人が、互に反目して居ては、政府の爲にも、甚だ不利益であるばかりでなく、維新の大仕事を、一しよにやつて來つた、兩人が、今に至つて、互に不快の情を以て、睨み合つて居るといふのは、如何にも面白くない、と思ふ。我等から見ても、さういふ事では、此先の事も案じられるから、貴下に、此仲裁を御頼みしたい、と思ふのぢやが、何うぢやらうかな」

三二

岩倉から、相談を掛けられないでも、黒田は、心配して居たのであるから、況して、斯ういふ相談が、起つて見る、と、自ら進んで、調停の任に當る外はない。殊に、黒田は、單純な性質の人であつて、思込んだ事は、どこ迄も、押通す風がある。

「宜しい、己どんな、出來得る限り、やつて見る事にしよう。併し、大久保公と、木戸公が、互に不快の念を有つて、相對するやうになり居つたのは、段々、聞く所によれば、伊藤が原因である、といふ事であるから、先づ伊藤と木戸の關係を、舊のやうにしてから後でなければ、大久保どの關係も、舊のやうになるまい、と思ふが、何んなるのでござせうか」

岩倉は、膝を打つて、  
「成程、是は好い所へ、御氣が付いた。木戸はんと、大久保はんは、互に國政上の議論に就て、違ふ點もあつて、争ひもしたのぢやが、併し、其深い原因は、伊藤はんにあつたのぢやから、それを、先づ片付けて貰へば、此上も無



「い事ぢや」

「己どんな、是から伊藤を訪ねて、兎に角、木戸公に謝る事を、勧めて見やう」

「ウム、さうなれば、結構な事ぢやが、伊藤が、快く木戸はんに、謝つて呉れるか、何うか」

「イヤ、そりや心配なか、伊藤が、今日の地位を、得るやうになり居つたのは、木戸公の御蔭であるから、木戸公に對して、詫を言ふ事な、己どんな、西郷先生の前に、叩頭するのと同じ事ぢやからな、ハツハハー」

「併し、黒田はん、さう言はしやるが、貴下は、西郷はんに、反對して居るではないか」

黒田は、目を丸くして、手を振つた。

「そや、話が違ふ。己どんな、西郷先生に、反對して居るのは、ごわへん。先生な、自ら大使となつて行かしゃる、といふのぢやから、そいに、反對して居るので、ごわす。若し、外の人な行く事になれば、己どんな、何も言はぬ積りて、ごわすが、先生な、朝鮮へ行きなけるといふ事に就ては、何處までも、反對する外はごわへん。そや、先生の御爲を、思へばごわすよ」

前後の考へもなく、黒田は、率直に、自分の思つた通りを、言つてしまふのだ。岩倉は、心の中に、正直な男だ、と思つた。

「成程、さう言はれて見ると、貴下の反對は、さうかも知れぬ。マア兎に角、伊藤はんの事は、貴下に御任せするから、何うぞ御骨折を願ひたい」

「宜か、承知いたしました」

黒田は、岩倉の邸を出ると、直に伊藤を訪ねた。

伊藤と、黒田を比べれば、全く性格に於ては、違ひ過ぎて居るし、又、政府とか、政治とか、いふやうな事に就ての考へも、全然、違つては居るけれど、伊藤は、剛巧な人であり、黒田は、率直な人である。何方かと言へば、伊藤

の方から、黒田に對しては、幾分の遠慮を以て、遇して行くから、黒田も、伊藤に對しては、悪い感じは、有つて居なかつた。殊に、伊藤は、何人に對しても、柔かに當つて行く、といふ、交際振の上手な所は、黒田に對してばかりではなく、薩人の間にも、氣受は宜かつた。

黒田は、伊藤と、最も好く交際つて居た。随分、お互の間では、無遠慮な事を言ふて、何事に就ても、深入した相談を爲す迄になつて居たのだ。黒田が、訪ねて来た、といふので、伊藤は、客間へ引いて、面會する事になつた。其

時分の黒田は、なか／＼酒を飲んだので、大概な場合は、酒臭い息を、吹いて居た。伊藤も、黒田の來訪と聞いて、酒盃の交度を見せて、待受けた。席に着いて、挨拶が済むと、徳利が運ばれる。黒田は、無遠慮に、膝を崩して、快

飲して居る。

「オイ、伊藤」

「何ぢや」

「貴様、剛巧な奴にも似合はず、何ぎや譯で、木戸はんと、喧嘩して居るのか」

前後の話は無く、卒然として、斯う言ひ出されたから、伊藤も、聊か狼狽した。

「別に、木戸公と、喧嘩なぞはして居らぬ」

「併し、木戸はんと、貴様が、甚だ好くない、といふ事は、誰も知つて居るぞ。全體、貴様が、何ういふ事情があれ

ばとて、木戸はんに反く、といふ事は、宜くなか思ふから、悪か事があるならば、謝つてしまふたら、宜か」

伊藤は、聲を上げて、笑ひ出した。

「ハ、ハ、ハ、何を言ひ居るか、我輩は、木戸公に、謝罪をするやうな事は、仕て居らぬ」

「イヤ、貴様が、悪か事をした、といふのではなか、善悪に拘らず、木戸はんに反く、といふ事な、宜くなか思ふから、木戸はんが、貴様に對して、悪か感情を、有つて居るなら、貴様は、木戸はんに對して、謝れば宜か、多く言



ふに及ばぬ。唯、木戸はんの前に、頭を下げたら、宜か、第一、日本の政治な、木戸はんと、大久保はんな、巧くやつて呉れぬ、と駄目なのぢやからな。兩人が、仲好くせぬ事にや、日本の事な、纏らぬのでござ。そいは、貴様が、其間に居つて、舵を執らぬ事には、纏らぬのぢや。兎に角、俺ども、同行する事にしやうから、木戸はんに、詫言言ふて、大久保はんとの関係、昔の通りにせんけりや、貴様が、國家へ對する、義務が濟むまい、と思ふが、何うぢや」

別に面倒な、理窟も言はず、率直に、斯ういふ風に、言はれて見ると、伊藤も、強て拒む事は、出来ない。又、退いて考へて見れば、木戸に對して、自分は反いた、といふ譯ではなく、木戸の方で、妙に辭んで、自分を見る爲に、自分は、面白くなく感じたから、自然と、遠ざかつて来る。一方には、大久保に、接近して行く爲に、益々、木戸が辭んで、自分を、悪く見る、といふやうな事情から、今日のやうな關係に、なつたのであるゆゑ、今、黒田が言ふやうに、善惡に拘らず、木戸公に、反いては悪い。其木戸公に、頭を下れば、事は濟むと、言はれて見れば、成程、それに違ひない。殊には、例の朝鮮問題が、行惱んで居るのも、全く木戸と、大久保の間が、互に反目して居る。それで、行惱んで居るのだ、といふ事情も、判つて居るから、到頭、黒田の爲めに、伊藤は説付けられて、伊藤は、自ら進んで、木戸公に謝罪して、不快の念を、忘れて貰はう、といふ氣になつた。是は、黒田のやうに、正直な人が、少しの飾りもなく、短刀直入に、伊藤へ打付かつたから、詰り、斯うした結果を、見る事が出来たのであらう。是等を、正直の徳とでも、言ふて宜からうか。

四

薩摩出身の政治家で、大久保と、西郷を除けば、直に黒田清隆と、誰でも指を折る位に、黒田は、薩摩中の先輩であつた。奈良原繁、岩下方平と、いふやうな人もあつたが、併し、一般から認められて居たのは、黒田が上であるか

ら、自然、黒田は、中央の舞臺へ出て、薩摩出身の政治家として、何人からも、尊敬を受けて居たのである。併し、黒田といふ人は、實に率直な、少しも飾氣の無い、美しい性質を、有つた人であつたが、唯、此人の缺點とも言ふべきは、酒を飲むと、狂亂して、暴れ廻る。さうなつてしまふと、自分の位地も、身分も忘れてしまつて、是が爲に、屢々、友人にも、心配を掛ける事があつた。

一番、初に有つた、妻君は、罪も無いのに、斬つてしまつたのである。例の通り、酒に酔つて、殆ど狂人のやうになつた時、其妻が、自分の機嫌に逆ふた、といふので、一刀兩斷にして、しまつたのだ。如何に黒田でも、さういふ事をしては、無事に治まる譯はない。妻の親戚の者が、騒ぎ出して、一時は、なか／＼入釜しい問題に、なつたのであるが、酒を飲まぬ時は、洵に好い人だ、といふやうな事が、又、助をなして、友人が、大勢集まつて、何うか、斯うか、金の力で、押へ付けてしまつたが、當時の團々珍聞といふ雑誌が、其事を書いた爲に、讒謗律に問はれて、署名人が禁獄一年に、罰金百圓を申付けられて、雑誌は、差押へをされる、といふやうな事があつた。著者は、未だ子供の時分であつたが、未だに其ボンチ繪は、覚えて居る。大きい眞黒な蛸が、向鉢巻をして、長い刀を抜いて居る前に、徳利が倒れて、酒が流れて居る。その酒の中から、黒髪を振亂して、血だらけになつた婦人が、幽霊になつて、出て居る、といふ繪であつたが、なか／＼當時は、此ボンチ繪が評判になつて、それからそれへと、傳はつたものだ。

黒田の酒亂に就ては、誰でも持餘して居た。殊に、腕力は自慢であつたから、暴れ出すと、普通の力で、押へ付ける事は出来ない。友達は、遠慮勝に押へるのだから、尙更、暴れ廻られた時には、何うにも、手の着けやうが無い。それを好い事にして、黒田は、益々、酒を飲んで暴れる、といふやうな譯で、何時の宴會にも、黒田が、酔ひ始める、と、人がボツ／＼歸りかけるほどであつた。

或時、薩長の人が、入混つての宴會があつた。其席上で、例の如く、黒田が、狂亂の體となつて、誰にでも、喧嘩を吹掛ける。果は、正面に坐つて居た、木戸の前に來て、頬に肘を張つて、喧嘩腰に、議論を仕掛けて來るので、木



戸は、煩さいと思つて、程よく扱らつて居たが、そのうちに、何か言葉の行違ひから、黒田は、丸て阿修羅王の暴れた如くなつて、木戸に打つてかゝつた。油斷をして居た、木戸は、二つ三つ、續け様に、螺のやうな拳固で張付けられたから、流石に、木戸も、堪忍袋を切つて、

「何をするか、貴様は」と、起上つた。一同が、仲裁に這入らうと思ふて、立上る途端に、木戸は、黒田の頸筋を押へて、遙か向ふへ、投げ付けた。黒田が、何んなに力自慢でも、木戸は、齋藤彌九郎の門人て、而かも、日本では幾人と、指を折られる程、劍術の達人で、それに、身體も大きく、腕力も強かつたから、黒田は、狗兒の如くに、投げ付けられた。黒田が起上らうとする所を、木戸は、座敷に敷いてあつた、フランクセットを以て、スツカリ包み込んで、上から繩を掛けて、七重八重に、縛り上げてしまつて、其儘、馬車に積んで、黒田の宅へ送付けた、といふやうな、珍談がある。

此時には、流石の黒田も閉口して、翌日は、木戸の所へ、挨拶に来るやら、同席した者に謝るやらして、漸く結局が附いた。それ以來は、大概な場合に、木戸が来たぞ、と言へば、黒田は、暴れるのを止めて、コソ／＼と歸るやうになつた。斯うなつて見ると、酒亂も、存外に正氣のあるもので、黒田が、木戸を恐れた、といふのは、實に面白い話だ。

酒を飲むと、斯ういふ風に亂れるが、平生は、何事にも親切で、正直な人であつたから、存外に、人望はあつたのだ。されば、西郷と大久保が、亡き後は、黒田が、薩藩の代表的の人であつた。松方正義も、後には元老になつて、幅を利かすやうになつたが、併し、維新前の舞臺には、深い關係は、有つて居なかつた。明治の初に、日田縣の知事になつて、それから、大藏省へ引上げられた、といふやうな關係で、松方助左衛門の名は、幕末の歴史には、關係を有つて居ない。之れに反して、黒田は、兎に角、幕末の歴史には、深い關係を有つて、中央の舞臺へ乗出し、相當に活動したのであるから、従つて、明治政府になつてからも、松方よりは、黒田の方が、先輩として、薩摩出身の人の

間には、尊敬されて居たのである。

五

もう一つ、黒田の逸話を、紹介して置きたい。

それは、例の斬殺した、妻君の次に、妻君になつた、夫人の事に就ての事だが、今から二十年前に、黒田家に、忌はしい訴訟が起きた事は、誰も知つて居る筈である。黒田の未亡人が、出入の呉服屋と通じて、遂に是が爲に、黒田家から離籍する、といふ訴訟が、起きたのだ。今の黒田伯の母が、其夫人であるから、あまり露骨に言ふのは、黒田家の面目の爲に、宜くないかも知れぬが、併し、訴訟までになつたのであるから、大概の點までは、言ふても差支なからう、と思ふ。

深川の木場に、信濃傳といふ、富豪があつた。舊幕時代から、材木屋の中に於て、評判の家柄で、殊に、木場の問屋と云へば、何れも相當に、資産を有つて居たが、其中に於ても、信濃傳の資産は、評判なものであつた。然るに、財産のあるに任せて、信濃傳が、豪華な生活をした事も、屢々、人の口に傳へられた。御殿のやうな、家を建て、華族と同様な生活をして、自らは、當代の紀文を以て、任じた位であつた。震災前迄、淺草公園の花屋敷へ行くと、誰の眼にもついたので、一段高い丘の上に、天平時代の建物に、よく似た塔のやうな、高樓であつた。あれが即ち、信濃傳の別荘内にあつた、建物の一部を移したもので、之を以て見ても、一般の商人が、未だ質素な、生活を以て、誇りとして居た時代に、材木屋が、斯ういふ家を建て、住んで居たのか、と思へば、信濃傳の生活が、いかに豪華であつたか、といふ事が偲ばれた。

其一人娘に、お瀧といふ、美人があつて、それは、實に美しい娘さんであつた。木場小町といつて、一枚繪にも、出された位の美貌であつた。それを、何時しか、黒田が、垣間見て、何でも妻に返へたい、といふて、頻に信濃傳へ



追つた。年齢も、非常に違ふし、黒田は、あの通り醜い男であるから、娘の方でも、無論、乗氣はしない。両親に見ても、喰ふに困る、といふ、身上ではないのだから、何も、役人の家へ、厭がる娘を嫁入らせて、贅澤をしよう、といふやうな、考へも無かつたのだ。そこで、話の運びは悪かつたが、黒田の熱心は、一と通りでなく、到頭、大勢の手を経て、信濃傳夫婦を、説き付けてしまつた。お龍も、世間知らずの懐育ちで、贅澤の仕放題に、甘やかされて育つたのだから、此上に、偉い役人の奥方になつて、華族の生活が出来る、といふ、其虚榮に、心が移つて、不釣合の結婚を、承知する事になつた。

それからの黒田は、丸て有頂天になつて、殆ど木場へ、通ひ詰めて、役所の仕事などは、手に着かない。未だ正式の結婚を、爲るまでにならないので、毎日のやうに、木場へ通つて居た。それにしても、例の酒を飲むと、狂亂の態になつて、暴れ出す。之には、信濃傳の方でも、聊か閉口して居たが、或晩、何か氣に入らぬ事があつて、黒田が、暴れ出した。散々、暴れた末に、家人の止めるのも肯かずに、跣足で、表へ飛出してしまつた。

何處を、何う廻つて来たのか、濱町河岸へ、出て来た時分には、酒の酔も、大分醒めたし、聊か正氣付いて、周圍を見廻しても、更に何處といふ、見當が付かない。自分の邸は、三田にあるのだが、何處から行つて、宜いかわらない。平生は、馬車や俥で、送られる身の、町の勝手は、少しも解らず、暗さは暗し、夜は更けて居るし、流石の黒田も、頗る閉口して、當所も無く、ブラブラ歩く向ふから、破れた提灯の穴を手拭で結へて、梶棒へ提まりながら、ソリソリとやつて来る、車屋があつた。無論、夜延仕事に出たのであらうが、今夜も、あぶれて歸へるらしく、何となく悄然として居た。

『コラツ』

『ヘイ』

『芝の方まで参るのぢやから、俥に乗せい』

『ヘイ、有難うございます。サア、御乗り下さいまし』  
梶棒を衝いたから、黒田は、無雑作に、車へ乗つた。驢で、車夫は、梶棒を上げて、ガラ／＼挽き出したが、背中を屈めて、梶棒の先へ、ピツタリ纏り付いて、ヨタ／＼挽出したので、黒田は、丸て仰向いて、天を見るやうになつてしまつた。斯うした、俥の挽方をするのに、早いのは無いものだ。黒田は、性急な男で、平生、俥に乗つて、車夫が遅い、と、持つて居る杖で、車夫の背中を、ツツ突く、といふほどに、氣短かの黒田が、斯ういふ車に乗つたのだから、たまらない。

『コラツ、何をして居る。早く駆けぬか』

と言ひながら、力任せに、蹴込を、二三度蹴る、と、梶棒を持つ手に、堪へなかつたものか、バタリと放したから、黒田は、機を食つて、飛出した。

六

黒田は、恐ろしい眼を光らして、

『何をするかツ』

と、車夫の頭を一つ、力任せに打つと、その途端に、被つて居た笠が、向ふへ飛んだ。

『アツ、痛た、――旦那は、何をなさいます』

と言はれて、黒田が、ヂツと見れば、前額の方は、眞赤に禿けてしまつて、後頭の方に、申譯だけの毛が残つて、燈心蜻蛉のやうな、鬚を結ふて居る。見るからに、六十以上の老人である。之には、黒田も、聊か呆れた。

『ヤツ、貴様、爺だな』

『ハア、左様でございます』



「何故、爺なら爺と断らぬ。俺は、乗りはせぬのぢや」  
 「ハイ、御道理でございますが、御客様の来た時に、爺でございますと申上げますれば、誰一人として、乗つて下さる者は、ございませぬ」  
 成程、言はれて見れば、それに違ひない。黒田は、不覺に不憫と、いふ考へになつて、  
 「幾歳になるか」  
 「六十五になります」  
 「其年齢になつて、俵を挽かねばならぬ、といふのは、何ういふ譯か、子供は無いのか」  
 「子供にも、死なれてしまひまして、今は、親類も無く、縦令幾らでも、お錢を持つて歸らなければ、御飯も食へられないのでございます」  
 「フ、ム」

唸りながら、聽いて居た、黒田は、元來が、正直な人であるから、聽て袖を探つて、グシヤリと、掴み出したのが、紙幣である。其中から一枚、大きいのを出して、  
 「之を、貴様に遣はすから、俵などを挽かずに、暖い物でも食つて、家へ歸つて寝ろ」  
 「ハイ、有難う存じます。御蔭様で助かります」

其儘に、黒田は、ズン／＼急ぎ歩いて、新大橋の方へ、行つてしまつた。  
 後に残つた、車夫は、提灯の火影に、貰つた紙幣を見て驚いた。

「オヤ、こりやア、大變な、お紙幣だ。今のお方は、何うも變な様子だぞ」  
 と、怪しく思ふのも、無理はない。薩摩緋の衣物を、着流して、細い兵子帯を、後へ猫戯しにした。而も、跣足で居たのであるから、變な奴だと、思つたのは、當然だ。殊に、其時分の十兩は、大金であるから、直に附近の交番へ訴

へて出た。此年齢になるまで、車を挽いて居る、不幸の身でありながら、十兩といふ大金を、貰つた嬉しさに、前後を忘れて、家へ歸る、といふやうな事もせず、其人の様子が、可怪しいからといふて、交番へ、訴へて出るのは、如何にも正直な、老人であつた。斯うした、心掛のよい老人に、俵を挽かせて置く、といふのは、天道様も聞えませぬ、と言ひたくなる。

其時分に、有名な清水定吉といふ、拳銃強盗があつた。小説にも、芝居にも、屢々現れ、活動寫眞の材料にまで、なつて居るから、大概な人は、知つて居るだらうが、平生は、按摩を職業にして、ピー／＼と、笛を吹きながら、町を流して歩いて、呼込まれた家の様子を、見て置いては、夜になると押入つて、強盗を働くのだ。少し手強い者には、拳銃を發して、威嚇する。逮捕に向ふ巡査は、是が爲に負傷したり、或は死んだ者さへ、ある位で、其出沒が、如何にも自在で、何うしても、押へる事が出来ない。是が有名な、拳銃強盗の清水定吉であつたが、其強盗を押へる爲に、日本橋の警察署が、非常線を、張つて居たのだ。そこで、車夫の訴へを聞いたから、巡査も、少しく不審に思つて、

「何ういふ風體の者であつたか」  
 「左様でございます。緋の着物を着て、御居て、ございまして、跣足で、ございました」  
 「羽織は、何ういふのを、着て居たか」  
 「羽織なぞは、着て居りませぬ」  
 「それは、可怪しいな。紙幣は、此外にも有つて居たやうか」  
 「はい、袖から一掴み、掴み出したのを見て、私は驚きましたが、頂戴致す時は、斯んな大紙幣とは思はず、ウツカリ貰つてしまつたので、ございます」  
 「よし。それで大概、當りは付いた」  
 巡査の心では、清水定吉と、極めてしまつたのだ。



直に警察署へ急報したから、それツといふので、一時に、其者の跡を、追ふ事になつた。折柄、新大橋の所へ、ブラブラやつて来た、黒田の姿を見たので。四方に潜伏して居た、巡査が、一時に打つてかゝつた。之には、黒田も、聊か面喰つて、

「何をやるか」

「黙れ、神妙に致せ」

黒田は、生れてから斯んな事を言はれたのは、恐らく初めだらう。何が何だか、薩張り解らない。丸で煙に巻かれたやうな、心地がする。彼是して居る中に、警部も、やつて来て、有無を言はず、警察へ、引張つて行つた。

段々、調べに掛かつて見ると、黒田清隆と、いふ事が判つたので、之には、警察署の連中も、大に驚いた。署長が出て来て、詫をするやら、巡査が、遽に進退伺ひを出すやら、それは大騒ぎであつたが、黒田は、其事情を聞いて、

「イヤ、こりやア驚いたな。俺な、拳銃強盗で、ごわしたとか」

署長は恐縮して、

「イヤ、何とも申譯が、ごさいませぬ。何うぞ、御勘辨を願ひます」

「夜中一人で、跣足に交つて歩いたから、ごぎや嫌疑を受けるのぢや。併し、汝等が、それまでに苦心して、悪い奴を押へよう、といふのは、實に感服の至りぢや」

流石に、黒田も偉い。強盗と間違へられても、怒るやうな事はしないで、却て署員の奮勵を、促す爲に褒めてやつたのは、流石に黒田である。

七

明治戊辰の當時、上野の戦争が済んで、愈々、奥羽の戦ひとなつた。それも、若松城の落去と共に、天下は、舊の

太平に歸したが、獺り蝦夷の函館に、榎本金次郎、松平太郎、大島圭介、土方歳三などいふ、連中が立籠つて、徳川の爲に、最後の氣を、吐いて居た。時に、征討總督として、其方面へ向けられたのが、黒田清隆である。けれども、遂に榎本等の降伏に依つて、此戦ひも結局が付いて、黒田は、東京へ、引揚げて来た。

五稜廓の陥落は、もう目の前に、見えて居たけれど、併し、榎本等が、よく防ぎ戦ふて居たから、此分に進んだならば、尙双方に、澤山の犠牲を拂はなければならぬ、といふ事が判つたので、黒田の方から、榎本に對して、降伏を促す、使者を送つた。それが、意外に、功を奏して、遂に榎本等は、降伏をしたのであるが、無論、重立ちたる者は、皆自双して、朝廷に其罪を謝さう、といふのであつた。それを、黒田が、強て押し止めて、

「決して、さういふ事を、爲るには及ばぬ。お前等が、今日までの戦ひを試みたのは、眞に朝廷へ對して、敵對したのではなくして、唯、今日までの官軍と、幕軍の行掛り上から、茲に至つた事であると、いふ點は、朝廷に於ても、能く知して御居てになるのであるから、我々も、お前達の爲に、其罪を謝するだけの、手續は取つてやるから、死ぬには及ばぬ」

と言ふて、引揚げて来たのだ。

然るに、東京へ、歸つて来て、五稜廓の戦況を報告して、榎本等以下の、俘虜の處分案に、移つた時、黒田は、斯ういふ約束をして来たのであるから、彼等の生命だけは、助けて呉れる、といふ事を、總督府へ願つて出たのであるが、總督府に於ては、既に五稜廓陥落の前報がある、と同時に、榎本等の重立ちたる者は、悉く死罪に、内定して居たのであるから、黒田の請求を斥けて、榎本等を、死罪に行はう、とした。之を聞いて、黒田は「縱令、總督府に於て、左様に内定したにもせよ、自分は、あの方面へ、征討總督として、向つた以上、彼等の生命を、助けるも、殺すも、自分の自由に、なるのであつて、彼等が自双する、といふのを押し止めて、連れて来たのに、今更に死罪にする、といふ事になつては、自分の面目が立たぬ。是非、生命だけを、助けて呉れる」と言ふて追つたが、なか／＼總



督府の方が、之を用ひなかつたので、黒田は躍起となつた。「よし、さういふ譯ならば、自分の眼の黒い中は、決して彼等を死罪にする、といふても、さうはさせない。先づ以て、自分は、切腹して相果るから、其後に於て、死罪にして呉れる」といふのであつた。此取扱ひには、總督府も、殆ど困つて、黒田との間の押合が、段々、面倒になつて來た。

大西郷が、之を聞いて「さういふ譯ならば、俺に任せて置け、何とか處置を付けてやらう」といふ事になつて、大西郷が、此裁斷を爲る事になつた。

然るに、西郷は、大きな人物であつたから、櫻本等の爲に、朝廷へ、助命の願ひを出して、遂に其生命を繼ぐ事にした。朝廷に於ては、櫻本等が、飽までも朝敵の心を以て、双向ふたのではない、といふ事は、よく判つて居たから、強て之を殺す、といふやうな、不仁な事は、なざる筈はなく、櫻本等は、一二年間、座敷牢へ入れられて居たが、間もなく赦されて、朝廷の家來となつて、それから後は、世人の知るが如く、我國の爲に、貢獻する事が、深かつたのである。乍、併、是等の入達が、生命の繼がつたのは、黒田が引受けたからである。此一事を以て見ても、黒田は、存外に、俠氣のあつた人だ、といふ事が判る。

黒田は、其後、北海道の開拓使長官になつて、殆ど十年の間、蝦夷地の開拓に努めたが、附いて居る者が、善くなかつたので、充分に開拓の實は、擧がらなかつたのみならず、其終局が、甚だ拙い事に、なつてしまつた。例の官有物拂下事件といふのが、即ちそれであつた。縱令、使つた金だけに、功績が擧がらなかつたにもせよ、十年の間、開拓使職に、立籠つて居たのであるから、あの事件さへ無かつたならば、左までに悪く言はれる事も無かつたが、其事のあつた爲に、一時は、輿論の攻撃を受けて、是が爲に、薩派の政治家が、暫く頭を擧げる事の、出來ないやうになつたのは、其内情に於ては、氣の毒な點もあつたけれど、偏に黒田の罪として見られても、止むを得ぬ事であつた。斯うした、失策はあつたが、黒田は、極めて單純な性質で、何方かといへば、あまり私を營まなかつた、正直な人

八

物であつた。晩年には、酒精中毒で、碌々、牙えた仕事も出來ずに、何時死んだか判らぬうちに、死んでしまつたが、一時の黒田は、西郷、大久保の後を承けて、薩派、第一流の人物として、世間からも、重く見られて居た。

大隈、伊藤のやうな、伶俐な人が、存外に、黒田の言ふ事は、よく肯いた、といふのも、矢張り、黒田が、正直であつた爲だらう、と思ふ。殊に、伊藤が、木戸の一條に就て、懇々と談じられた時は、別に黒田が、巧い理窟を言ふたのではなかつたが、唯、率直に、思ふ儘の事を、言ふて退けたので、それに感激して、其調停に應じて、木戸の前に、陳謝する事までも、誓つたのである。何でも、世間の事は、誠心を以て、當るに限る。黒田は、詰り、其誠心を以て、伊藤を動かしたのだ。

洋行して歸つてから、木戸は、疝癢も強くなつて、何事に付けても、ヂリ／＼して、直に怒る、といふやうな、氣風になつて來たので、付いて居る者は、何時も、困つて居たのだ。妻の松子は、よく氣象を呑込んで、成るべく機嫌に逆はぬやうにして、上手に持成すのであるが、それでも、何うかすると、怒られて困る事があつた。

「ハツ、申し上げます」

「何ぢや」

「黒田様が、御出てになりました」

「ハ、ア、黒田が參つた」

暫く考へて居たのは、不意に、黒田が、訪ねて來るのは、何ういふ譯か、殆ど見當が付かなかつたからだ。「よし、之へお通ししてくれ」

聽て、案内されて通つた、黒田は、何時もの通り、元氣も好く、



「ヤア、久しうごわした」  
洋行から歸つた時に、出迎へに行つて、顔は見えて挨拶はしたやうなものゝ、それから後は、會はなかつたのだから、黒田は、珍らしさうに斯う言ひながら、席に着いた。木戸も、黒田が、何時も無邪氣なのを、喜んで居たから、存外に、隔て無く、黒田とは、話をするのであつた。  
『時に、木戸はん』

『ウム』  
『今日、己どんな、參つたのは外の事でもないが、伊藤の奴が、貴下に對して、甚く濟まぬ、と言ふて居るが、もう大概にして、會ふてやつたらば、何うぢやな』

『別に、吾輩が、會はぬといふのぢやない。彼が、來ぬやうになつたので、我輩の方には、何の宿意も無いのぢやから、來たいと思ふたら、來るが宜いのぢや』

『それが、いかぬのぢや。貴下が、伊藤に對しては先輩であるから、來いと言はんきや、いかぬのぢや。來たけりや來ても宜いが、來ぬけりや、それまでぢや、といふ事が、伊藤も、貴下の所へ、來ぬやうになつた原因ぢやと、己ども考へて、段々、伊藤にも、己どんから、話してみると、決して貴下に對して、伊藤が、反くといふやうな考へは無か、言ふて居る。唯、木戸先生な、何か感違ひしなはつて、怒つて居られるから、自然、足も遠退くやうになるのぢや、と、斯きや言ふて居る』

木戸は、苦い顔をして、聽いて居たが、  
『イヤ、それは、御心配を掛けて、相濟まぬ。伊藤と、吾輩の間ぢやから、他の人の心配を受けるまでもなく、何うにも、談合は付くのぢや。別に喧嘩をした、といふ事も無く、少し位の感情の行違ひは、誰にもある事ぢやから、伊藤が、吾輩の所へ來れば、敢て差支が無いのぢや』

『貴下が、さう言ふて下さるゝと、洵に都合も宜いのぢや。それに、例の西郷先生な、朝鮮へ行きなはる、といふ一條に就ても、貴下と、大久保どんとの間が、圓滿に行かぬ、と、其方にも響きがあつて、己どんな、困るのぢやから、是非、伊藤に悪か事があつたなら、貴下に恕して貰ひたい。大久保どんとの間も、今までの通りに睦しく、共に手を取つて行く、といふ事にして下は、い』

『そりやア、大久保に、變りが無ければ、吾輩の方にも、變りは無いのぢやから、別に差支が無い』

『ヤア、さうなれば、當に己どんな、喜ぶばかりでない。岩倉はんも、何の位喜ぶか判らぬ。岩倉はんが、今、病氣になつて居るのは、恐らくそれが病氣ぢやらう、と、己どんも、思ふて居るのぢやよ、ハツハツハ』

夫人の松子も、實は、伊藤の事に就て、心配はして居たのであるから、今、黒田が、仲裁役になつて、木戸の心も打解けて、話して居るやうであるから、これを聞いて居て、何となく快く思つた。

是から、黒田の名で、伊藤を、呼びにやると、總ての約束であるから、伊藤も、早速、やつて來た。今までの話の大略を、黒田から聽いて、伊藤は、非常に喜んだ。

『我輩の不行届きから、貴下の心持を悪くしたのは、お詫びの仕様も無い次第ですが、我輩に於て、他意の無い、といふ事は、深く御察しを願ひたい。若し、今日までの所爲に就て、悪い事があれば、それは、如何様にも、謝罪を致しますから、御恕を願ひたい』

言葉は簡だが、伊藤が、それまでに打解けて、陳謝する以上、木戸が、悪く受ける譯もなく、彼是する中に、酒肴の用意が出來て、之から三人が、解いて飲みながら、昔話で、夜を更かして、伊藤と黒田は、木戸の邸を出た。

『オイ、伊藤、マア、宜かつたのう』  
『ウム』

『貴様が、早く本戸はんはんに、會ふてしまへば、何でも無かつたのぢや』



「詰り、さうなのぢやが、あれで、なか／＼木戸公も、氣殿しいからな」  
 「そりや、さうぢやらうが、昔からの關係を言ふたら、木戸はんは、貴様を、便りに思つて居らるゝのだ。其貴様が何となく他人行儀にして居るから、そこで、木戸はんも、疳癩を起した、といふやうなわけに、なつたのぢやらうから、マア、斯ういふ事になれば、是からの心配は無い」  
 「イヤ、色々、心配を掛けて、濟まぬ」  
 日本で幾人と、指を折らるゝ程の、政治家が、斯んな詰らぬ事で、謝るとか、謝らせるとかいふて、紛擾して居るのも、實に馬鹿らしいやうな事であるが、併し、幾ら偉い、といふても、其處は、人間であるから、これは、決して木戸と、伊藤の事ばかりでなく、今日の政治家にも、斯うした事は、幾らもあらだらう、と思ふ。  
 黒田から、話を聞いたので、岩倉も、大層な喜びであつた。それから、大久保と木戸の謂停は、別に喧嘩した、といふ譯でもないから、自然と、岩倉の邸へ、落合つた時分に、手を取つて笑つてしまつたから、そこで、非征韓の連中が、初め、結束する事が出来たのである。

### 樺太境界問題

樺太が、日本人の爲に發見されて、二三年経つてから、露西亞人が、之を發見して、互に争ひを始めた、といふのが、樺太問題の起因であるが、兎に角、日本人の方が、露西亞人よりは、二三年、早く搜し出した、といふのは、事實である。これは、露西亞人の方でも、確に認めて、居るのだが、さう言つてしまへば、争ひにならぬから、俺の方が早かつた」といふやうな、無理窟を言ふて、横に車を挽いて居たのだ。  
 其事が、公然の争ひになつたのは、嘉永六年に、ブーチヤンといふ人が、露西亞から、やつて来て、談判になつた。尤も、其時は、長崎まで来て「樺太は、自國の領有であるにも拘らず、日本人が、屢々来て、漁業をしたり、或は樺杭などを打つて困るから、何とか處置を付けて呉れろ」といふ談判であつた。幕府の方でも、川路左衛門尉が、長崎まで出張して、一應は、談合つて見たが、要領を得ずに、曖昧な話で、談判は中止になつた。  
 其後、ムラビヨーフといふ人が、江戸まで、やつて来て、此時は、難しい談判になつたが、是も亦、幕府の方で、充分の回答を與へずに、追返した。乍併、斯ういふ工合に、露西亞の方から、屢々、使節を派遣して、嚴しい談判に、なつた以上は、少しも早く、樺太の處分を、決する必要がある、といふ事になつて、外國の役人の間にも、幾度か、評議は繰返されて、遂に機會を見て、露西亞へ、談判に及ぶ、といふ丈は、内定して居たのである。



安政條約に依つて、兵庫と大阪を、開港しなければならぬ事に、なつて居る。其期限が、切迫して来て、各國公使から、頻に幕府へ對して、開港の準備に、掛つて呉れ、と、促して来た。所が、幕府にしてみると、容易に、開港の準備には、掛かれなかつたのである。といふ譯は、肝腎の朝廷が、此二ヶ所の開港に就ては、極端な反對で、荷も京都の咽喉とも言ふべき、兵庫と大阪を開港して、異人の出入を許す、といふ事は、怪しからぬ事である。左様な事は、許す譯にならぬ、といふて、幕府へ、嚴重な御沙汰が、下つて来たので、之には幕府も、手の着けようが無かつた。朝廷の御内意を伺はず、勝手に條約を結んで、之を實施する、といふ場合になつて、朝廷から、條約の取消を迫られないし、縱令、知つて居るにした所で、それは、日本政府の、内輪の事情であるから、頓着のあらう筈もなく、頻に開港準備を、促して来る。

そこで、徳川幕府も、非常に窮して、一時の開港延期を、各國公使へ、申込んだ。けれども、さういふ事を、異人の方で、直に承知する筈はなく、どうしても延期はならぬ、と言ふて、嚴しく迫つて来た。朝廷からは、何故、條約を取消さぬか、と言ふて、幕府を、責めて来る。其間に、板挟みとなつて、幕府は、四苦八苦の苦しみを仕て居るのだ。今から考へて見ても、此押合は、實に面白い事であつた。

其時に、老中を勤めて居た、安藤對馬守と、いふ人があつた。老中としては、實に立派な人物で、識見もあれば、政略も知つて居た。幕府の方針が、既に開港貿易と、決した以上は、何處までも、其趣意に依つて、進んで行く外はない、と極めて、或は高輪の御殿山に、各國の公使館を、造營しようとしたり、或は亞米利加の公使を、自分の役宅に招待して、非常な御馳走をして、歸したとか、其當時の役人としては、容易に爲し得ぬ事を、此人は、平氣でやつて退けた。其が爲に、攘夷派の連中に、酷く憎まれて、到頭、文久二年の正月十五日に、坂下見附に於て、水戸浪士から斬付けられて、負傷したほどの騒ぎがあつた。

對馬守が負傷した、といふ事を聽いて、一番先に、見舞に來たのは、英吉利の公使オールコックであつた。此公使は、日本最良の人で、あつた上に、其書記生として、附いて居た人も、亦頗る日本最良の方で、ラウダ、シーボルト、サトウの三人が、即ちそれであるが、何れも、日本國の爲に、親切に世話をして呉れた。オールコックが、對馬守の病床に就て、慰めて呉れたので、對馬守は、

「貴下の御親切は、忝なく思ひますが、併し、何の爲に、私が此負傷をしたか、といふ事を、御承知ですか」

「イヤ、そりやア、少しも解らない」

「さうでせう。お解りにならぬのは、當然であります。併し、私が、斯やうに斬られたのは、詰り、開港條約の一件に就て、反對の浪人から、斬られたのであります。開港貿易は、宜しくないといふ、意見を有つて居る、武士が澤山ある。其人達から憎まれて、斯ういふ目に、遭ふたのであります。唯、私が、貴下等に對して、條約の趣意に基づいて、親しく交際ふ、といふ事だけでさへ、斯ういふ酷い目に遭ふのですから、若し、此際に、兵庫や大阪を開港場に作る、としたならば、何んな騒ぎが起るでせうか。貴下にも、其想像は付くてありません。徳川幕府が、此二ヶ年の開港を、延期して貰ひたい、といふのは、無理の無い事ではありませんか。貴下方に於ても、今一應、御考へを願ひたい」

と、やつて退けた。

之には、流石のオールコックが驚いた。負傷の見舞に來た、公使に向つて、直に其席で、外交談判を開く、といふ、此機敏な道方と、其熱心に至つては、オールコックも、不覺に感服したのである。

一一

總て、談判事は、對手の氣を押へて、少しも考へる暇の無いやうに、切込んで行く。其處に、談判の妙はあるのだ。



對馬守が、負傷を見舞に、来て呉れた、公使に、其事件を利用して、開港延期の談判を開いた、といふ遣方が、如何にも懸念なものであつて、今の日本に居ても、是だけに懸念な働きが出来れば、立派な外交官になれる、と思ふ。オールコックも、對馬守の談判振りには、頗る感服したらしい。

「宜しい、貴下が、それまでの熱心を見ては、私の方でも、考へなければならぬ。其事に就ては、改めて相談いたしませう」

と、言葉を殘して、歸つて行つた。

今までは、剛情を張つて、開港延期に、反對して居た、オールコックに、是だけの事を言はせたので、對馬守は、密に喜んで、胸を撫下した。

それから、正式の談判に及ぶと、オールコックは、既に對馬守の意氣に、感じて居つたし、日本の事情が、さうした譯ならば、二年や三年を、延ばした所で、格別、大した害がある譯でもないのだから、延期しても可い、といふ氣になつて居た。そこで、談判は、簡單に進んで、オールコックは、

「英吉利政府は、恐らく延斯を承知する事になりませう。私からも、本國政府へ、其事情は、言つてやりますが、乍併、英吉利だけが承知しても、他の國が承知しなければ、矢張り甲斐はないのであるから、先づ亞米利加へ相談したら、宜しいでせう。公使へは、私から、書面を送ります。貴下の方からは、直ぐに御談判なさい。亞米利加政府が承知したならば、外の國は、否を言ふ譯も、ありませんまい」

對馬守は、喜びの色を表して、オールコックの手を握つた。

「貴下の御好意は、實に感謝の外はありません。さういふ事に、なりますれば、延斯になりました間に、開港の準備を整へて、此次には、必ず貴下にも、満足して貰ふやうになりませう」

「併し、安藤さん、此事は、可成り重大な問題でありますから、貴國の使節を、各國へ送つて、政府と相談させる、

必要があるかも知れませぬ。今から覺悟して、何時でも、使節を出せるやうに、仕て置きなさい」

「ハ、ア、さう致しますと、貴下方だけが、承知して下されたのでは、不可いといふのですか」

「私達は宜しい。併し、本國政府が、若しさういふ希望を、有りました時分に、貴國の使節が、行かぬ事になれば、話が破れてしまひます」

是は、頗る迷惑な事だ、とは思つたが、對馬守も、事、茲に至つては、もう仕様が無いから、オールコックが、勧めた通り、何時でも、使節を出す、といふ覺悟になつた。

「宜しい、承知しました。何時でも、使節は出す事に致しますから、此上共に、宜しく御願ひ致します」

それで、話は決つて、是から各公使へ、相談に及ぶ、と何れも延期は、承知して呉れたが、併し、それは、公使だけの事であつて、本國政府は、まだ何とも言ふて來ないのだから、延期になつたものとは、言へないのである。

彼是する中に、さう度々、約束が違つては困るから、果して此次には、確かに開港する、といふ事が誓はれるならば、幕府の使節を送つて貰ひたい、といふ事を、言つて寄越した。是は、オールコックが見込んだ通りであつたので、直に對馬守へ、其旨を通じたから、茲に於て、幕府では、評議を重ねた末、使節を、派遣する事になつた。

愈、使節を送る事が定まると、樺太境界の問題が起つた。兎に角、亞米利加から始めて、英吉利、白耳曼、佛蘭西、和蘭等の諸國を経て、露西亞へ這入るのであるから、此談判に出掛ける、序がある以上、樺太事件も、決めて來た方が宜からう、といふ事になつて、大體の相談だけを、遂げて來るやうに、といふ事を、使節になつた者に、申付けた。

乍併、其時分には、斯ういふ談判に就て、委任權の範圍と、いふやうな難かしい事は、少しも考へて居なかつたのだから、矢張り、お祭の屋臺を出す、町内の相談を同じやうに、

「お前、彼方へ行つたら、どうせ序であるから、話して貰ひたい」

「へい、宜しうございます」



と、いつたやうな調子で、申付ける者も、受ける者も、極めて簡単に、話が済むのだから、確く委任の権限を極めて、委任状を持つて、出掛けて行く、といふやうな事は、爲なかつたのである。若し、此時に、多少の外交知識があつて、斯ういふ談判をする時には、斯ういふ手續にすれば宜い、といふやうな事が、多少でも解つて居たならば、或は此使節が、充分の委任権を有つて行つて、話を極めてしまつたのだから、再び樺太問題が、明治になつて、起るやうな事は無かつたらうが、何しろ、其時分のことだから、さういふ點に、不完全な點があつたのは、止む事を得ない。

此使節を、申付けられものは、竹内下野守、松平石見守、京極能登守の三人であつた。其下に、附いて行つた人の中には、杉孫七郎、福澤諭吉、福地源一郎、松木弘庵等の連中も、居たのだから面白い。副使の石見守は、明治三十七年の四月まで、生きて居て、八十幾歳の高齡で、露西亞との軍が、始まるのを見て死んだが、當時、樺太問題の功勞者の一人として、朝廷からは、此人の死に就ては、特に勅使を遣はされた。

二二

此一行が、愈々、露西亞へ乗込み、莫斯科に着いて、外務大臣のイグナチーフと、談判を開く事になつた。開港延期の問題は、難なく極つて、それから、樺太境界の問題に移つたが、イグナチーフは、露國に於ても、有名な外交家であつて、世界に知られた、イグナチーフである。此人を、向ふへ廻して、談判を開くのであるから、なかなか難かしい。其頃の通辯を便りにして、彼我の意を、通じさせようとするのであるから、談判の困難は、一と通りでなかつた。その折衝には、松平石見守が當つた。

『それでは、何うしても、貴國の政府に於ては、樺太は、貴國の物である、と言ふのですか』

『左様、私の國の者が、最初に發見したのであるから、私の國のものであります』

『イヤ、さういふ事になつて、来る、と、私の國の者が、矢張り發見したのですから、而も、貴方の國の者が、發見したのより、二三年も早いのでありますから、唯發見した、といふ事だけで、其島の所有主になる、といふのならば、日本國の所有である、といふ事は明かでありすから、速に樺太に、打込んだ杭を、取拂つて下さい』

『それは、なりません。貴方は、日本人の發見したのが早い、と言ふて居るが、私の方の記録に依れば、貴下の國の者よりも、私の國の者が、搜し出した方が早いのですから、樺太は、露西亞のものであります』

『貴下は、縱令、どれ程に仰しやつても、世界各國の人が、既に日本の領有である、といふ事を、認めて居りますが、それでも、貴下は、露西亞の領有である、と言ふのですか』

『世界各國の人が、何時、樺太を、日本の領有と、認めましたか』

『其證據には、之を御覽下さい』

と言ひながら、石見守は、行李の中から、一枚の世界地圖を、取出した。それを、卓の上に擴げて、

『サア、之を御覽下さい。樺太の色は、日本と同じやうに、赤く染めてあります。貴下の國の色と、全く違ふて居りますが、是でも世界の人が、認めて居らぬ、と言ふのですか』

イグナチーフは、ニヤ／＼笑ひながら、

『其地圖は、誰が拵へた、地圖でありますか』

『亞米利加の華盛頓で、買つて來た、地圖であります』

『ハ、ア、繪双紙屋で、賣つて居りました、地圖ですか』

何でもない事を、軽く言ふのだが、タツタ一言、繪双紙屋と、いふ言葉に、意味を含んで、ぐツ、と抑へて言ふ所に、所謂、外交談判の、言葉の使ひ別がある、と思はれるやうに、巧に嘲つてしまつたのだ。石見守は、聊か色を變へて、



「この地圖は、信用が出来ぬ、といはれるのですか」  
「左様、繪双紙屋で、賣つて居ります、地圖は、子供の玩具あります。さういふものは、國際上の談判に、證據とはなりません」

之には、流石の石見守も、ぐツと、いき詰つたやうで、暫くは考へて居たが、臆て、行李を開いて、又取出した、一枚の地圖を、卓の上に擴げた。

「倫敦で、買て來ました、地圖であります。御覽なさい」

「オー、成程、是は、倫敦の繪双紙屋で、賣つて居ります、地圖あります」

「華盛頓だけなら、格別の事、倫敦で、賣つて居る、地圖も、此通りに、樺太を、日本の領有としてありますが、それでも、貴下は、認める事は出来ぬ、といふのですか」

「華盛頓の繪双紙屋も、倫敦の繪双紙屋も、繪双紙屋に二つは、ありません」

石見守は、威丈高になつて、

「宜しい。それならば、茲にもある。是は、巴里のです。是は、伯林のです。是は、莫斯科で買つたのです。御覽なさい。何れも皆、日本の領有となつて居るが、それでも、繪双紙屋の地圖は、役に立たぬ、といふのですか」

「左様、繪双紙屋、世界中、何處でも同じ事あります。一つも信用出来ませぬ」

「貴下は、さういふ事を、仰しやるが、唯、口の先で、信用が出来ぬ、と言ふても、私の方では、不完全乍ら、斯うした證據を、提供して居るので、貴下の方でも、是が違つて居る、といふ、證據を出して、争ふて貰ひたいのです」

「宜しい。承知しました。地圖を以て争ふなら、私の方に、上等の地圖あります。之を御覽なさい」  
と言ひながら、臆て取出したのは、二疊敷もあらうか、と思はれる、大きな地圖で、向ふの壁へ、ダラリと下げて、

イグナチーフは、ぐツと、其地圖を見詰めながら、

「御覽なさい。本當の地圖は、この通りであります。繪双紙屋では、賣つて居りませぬ。樺太は、露西亞と同じく、黄色くあります」

成程、近寄つて見れば、樺太は、露西亞と同じ色に、染めてあるのだ。石見守が苦心して、各國の都から、買集めて來た、地圖も、此一枚の地圖の前には、何等の權威が無く、逆も見つともなくて、出して置けぬほどに、相違のものであつた。乍ら併、此大きな地圖の色に、樺太が、露西亞の領有となつて、居るのは、無論、一夜拵へに、染め直したものであるに違ひない、とは思ふが、之を辯駁して、打消すだけの議論が無いのだから、石見守は、恨めしさうにして、其地圖を眺めて居た。

此談判に就ては、石見守一人の責任ではなく、竹内下野守も、京極能登守も、同じやうに、責任は、有つて來たが、談判の衝に當つたのは、石見守であつて、又、是だけの地圖を、買集めて來て、いざといふ時、證據物件にしよう、といふ考へを、有つて居たのも、石見守一人であつた。當時は、僅に勘定奉行であつた、石見守も、後には老中に登つて、武州川越の城主と、なるべき人であるから、流石に、抜目はなかつた。併し、斯うした談判に就ては、對手の方、役者が上なのだから、萬一の場合を考へて、チャンと、大きな地圖を染變へて、持つて居た所が、イグナチーフの、抜目の無い所である。石見守と、イグナチーフと、同じやうな事を、考へて居たのが、實に面白いではないか。

四

折角に、石見守が、苦心した甲斐なく、證據の裏を掻かれて、此方が示す、地圖に比べて、それ以上に、立派な地圖を、對手に示された上は、更に其上を越して、確かな證據が無ければ、もう争ひには、負と極めた。  
イグナチーフの接待で、一同が馳走になるので、室を移した。



接待を、受けて居る間も、イグナチーフは、如才なく、今迄に、火を擦るやうな、争ひをした人である、といふ様子はなく、頻に御世辭を振舞いて、馳走の世話をする所は、流石に、抜目の無いもので、宴會が終つて、更に別室へ移つてから、暫くは又、話に時を移した。

「俗で、貴下に、御願ひがありますが、御承知下さるまいか」

「ハ、ア、何事ありますか」

「外の事でも、ありませんが、實は、貴下の國の天文臺を、まだ見た事が、ないのであります。若し、御差支が無いならば、參考に見せて戴きたい、と思ひますが、如何ですか」

「天文臺、まだ見ませぬか」

「未だ拜見しないのです。今度、日本へ歸つてから、日本の天文臺を、大いに改めたい、と思ひますから、其參考にもなりません、と思ひますに依つて、是非、見せて戴きたい」

「宜しい。何時でも、案内させます。何時、行きませるか」

「是から、行つて見たい、と思ひます」

「オ、是から……もう日が暮れて居ります」

「日が暮れて居ても、差支ありません」

「何ういふ所を見ますか」

「それに就ては、貴下に、御同道を願ひたいのです。其上で、見たいものがあります」

「エツ、何、地球儀の色、見ますか」

と、流石のイグナチーフは、顔色の變るまでに、驚いた。是は確かに、急所を、突込まれたに違ひない。

石見守は、何處までも、偉い人であつた。地圖は、集めて置いたが、若し、天文臺の地球儀が、何うなつて居るだらうか、と、金の力で、昨日、竊に天文臺の地球儀を、見て置いたのだ。地球儀には、各國の色別が、樺太は、日本と、同じ色に染めてあつたから、安心して、談判を始めたのである。そんな事迄、既に行届いて居ることは、イグナチーフも、知らなかつた。證據に見せる地圖だけは、染變へて置いたが、地球儀の色までは、變へて置かなかつた。

「貴下の御同道を願ふて、一緒に、地球儀の色別を見ませう」

と、促し立てるが、イグナチーフは、何の答もなく、暫くは腕を組んで、考へて居た。石見守は、イグナチーフを、睨むやうにして、

「地圖の色は、變つて居ても、地球儀の色までは、變つて居るまい、と思ひますが、如何ですか」

「オ、貴下、洵に偉い人ある。恐入りました」

「何と、恐入つたといふのは、樺太が、日本の領有である、といふ事を認めた、といふのでありますか」

「否、地球儀の色は、さうなつて居りませんが、樺太は、矢張り露西亞の領有であります」

「そ、そ、そりや、何ういふ理窟から、さういふ事を、言はれるのですか」

「地球儀の色も、地圖の色も、さうなつて居りませんが、それは、間違ふて居るのであります。斯ういふ間違ひは、時折ある事でありませぬ。唯、さういふものゝ色別だけに依つて、何處の國に、屬して居る、といふ事を、極める譯にはなりません。是からは、實地の踏査をして、互に證據を争ふの外はありますまい」

明かに負けて居ても、之を負けとしないで、飽までも頑強に、自説を固執する、といふ、其處に、露西亞人の外



交の手腕が、現れて居る。苟も他國に對して、外交上の談判をする者は、是だけに、剛情且つ鐵面皮に、自分の負けを、負けとせずして、争ふだけの勇氣が無ければならぬ。露西亞人が、今日まで、外交上の争ひに、必ず勝利を得る、といふのは、此點が、勝れて居るからである。それに反して、日本が、何時も、外交上に失敗するのは、妙に氣取つて、聖人振つたり、正直がつたりする。其處に、失敗の原因がある。最近の支那問題なぞにしても、あの通りであつて、此方では、時の政府を支持するやうにして、骨を折つてやつても、大使の赴任を、拒まれるやうな耻を與へられ、騒動が起きれば、一番に迫害を受けるのは、日本であつて、愈々、各國と同じやうに、何事かの約束を結ぶ事になる、と、日本國は、何時も除外されてしまふが、偶々、仲間に入れられれば、申譯だけの利權を握つて、引退るが、常例の如くなつて居る。それでも、外務省のお役人は、是だけ働いた、といふやうな事を言つて、威張つて居るのだから、堪つたものぢやない。斯んな事で、ゴタ／＼して居る中に、前後二度の、大きな戦に依つて得た、滿洲の利權も、何時か水の泡のやうに、消えてしまふに違ひない。幾萬の國民が、此の二大戦役で、滿洲の原野に、屍を曝し、祖國の爲に、血を流した、苦心も、何時か、甲斐の無い事になつてしまふ、と思へば、實に痛嘆の至りである。

そこで、相談が、本へ歸つて、段々、談判つた末、北緯五十度から、南の方を、日本の領有として、北の方を、露西亞の領有としては、如うであらうかといふ案が、イグナチーフの方から、出されて來た。是は、露西亞の外交としては、甚だ弱いやうであるが、最早、證據の上に於て、争ふべき餘地はないから、切めて、半分だけでも取止めようといふ、所謂、轉んでも只は起きない、といふ流儀から、樺太の二分策を、提案したので。斯うなつて見る、と、石見守も、即答が出来ぬから、何れ熟議の上、返答する、といふ事になつて、其日は、イグナチーフに別れて、旅館へ引取ることになつた。

五

兎に角、樺太問題を、是までに漕付けた、石見守の勞は、實に偉いものであつた。明治三十七八年の、露西亞との戦ひは、あれ程の騒ぎであつたが、矢張り樺太は、二つに割いて、其一半を、得たに過ぎなかつた。石見守は、一枚の地圖を擴げて、卓を叩いて談判したので、戦勝の結果として得た、樺太の一半を、握る迄に漕付けたのだから、實に立派な談判と、言ふて然るべきであらう。

所が、竹内、京極の兩人に、之を相談すると、下野守の意見は、『樺太の全體が、日本の領有になる、といふのならば、今、此場合に於て、直に極めて行つても、宜からうと思ふが、半分だけだ、といふのでは、此際に、取極めるのは宜しくあるまい。一應は、歸國の上、幕府に此報告して、更に使節を送つて、取極める事にしたら、宜からう』

と、いふのであつた。そこで、石見守は、『折角の御意見はあるが、拙者は、御同意いたしかねる、樺太は日本のものである、又、露西亞のものである、と言ふて、争ひになつたのを、露西亞の方から、北の半分だけで我慢するから、南の半分を、日本の領分にして呉れ、と、折れて出たのは、よく／＼の事であらう、と思ふ。今、此場合に、極めて置かぬと、後日になつて、再び談判を開いた時、露西亞政府が、何と出るか、甚だ心元ない、目の前に、地圖を示めされ乍ら、不理由を言ふて、贖物の地圖を出して、誤魔化さうとする位に、道徳を重んじない、露西亞の政治家が、今は、此通りに閉口しても後日になれば、何を言ひ出すか判らない。假に、我々が、取極めるとしても、それ一切が、確定するものではないのであるから、兎に角、我々の名に依つて、樺太半分だけは、日本のものである、といふ事を、極めて置いて、其覺書の中に、幾分の餘裕を、存して置きさへすれば、又代つて、談判に來る者が、更に残りの北半分に就て、充



分の談判をすれば、南と一つにして、樺太全部を、日本のものにし得ない、といふ限りも無い。此場合に於ては、何う間違つても、南部の方だけは、日本のものになる、といふ位の根拠を、造つて置く、といふのは、必要な事であらう。是非、御同意を願ひたい」

「イヤ、折角の御辛勞ではあるが、此事は、拙者に於ては、御同意申す事はならぬ。元來、我々は、條約延期の談判に來たのが、其本旨であつて、樺太問題の如きは、餘事に過ぎぬのである。而も、其半だけを割いて、日本のものにする、といふやうな、談判に満足して、覺書の取交しをする、といふ事は、御同意申し難い」

と、頑強に、自説を固執して、下野守が、何うしても肯かぬから、そこで、石見守は、勃然として、  
「宜ろしい。さういふ譯ならば、御手前は、否と言ふて居れば、宜い。石見は、一己の責任として、假に覺書の取交しを致さう。萬一、幕府の御趣意に戻つた、といふ、御叱りのあつた節は、拙者も、切腹いたして申譯をいたす、覺悟で居るから、御同意下さい」

之を聴くと、下野守は、顔色を變へて、詰寄つた。  
「何と、言はつしやる。お手前一人の名義に依つて、大切な覺書の取交しをして、後日、間違ふたら切腹をしたら宜しい、と言はつしやるのか」

「左様」

「コリヤア怪しからぬ。お手前一人が、武士ではない。下野守も、矢張り武士の片端に、居つて見れば、切腹する位の事は、何でもない事であつて、お手前が、生命を惜まず、御國の爲に盡す、といふならば、下野守も、亦御國の爲に、切腹いたす事は、辭退いたさぬ。然るに、御自分一人が、武士である如くに、切腹を、鼻の先に掛けて、之を取扱ふ、といふならば、下野守は、飽までも同意は、出来ませぬ」  
「是程の事件を、是までに漕付けて來た、石見の苦心を、御察しが無く、事の妨げをするとは、何事か、此上は、刀

にかけても取計ふから、左様、御承知下さい」  
と、言ひ放つて、大刀の柄に、手を掛けて、詰寄つた。下野守も、同じやうに鯉口を切つて、詰寄つて來た。その場に立會つた連中が驚いた。そんな事で、兩人に、斬合をされた日には、此使ひは滅茶々に、なつてしまふのだから、先づ能登守が、仲に這入り、其他の者も、仲裁に這入つた。

「マア〜」

と、一時は治めたが、斯うなつては、仕様がな。一應は、重立つた者とも相談して、一同の意見を、尋ねる事になつた。

隨行員の重立つたる者が、段々、相談をすると、結局、此際に極める、といふのは、穩かであるまい、といふ事に、意見が一致して、大體の覺書は作つても、愈々といふ事は、來年、樺太の或る場所に於て、双方の委員が、面會の上決定する、として、此際は、何事も定めずに引揚げよう、といふ事になつた。

是ては、石見守の意見とは、全く違ふのだが、茲に至つては、石見守も、何うしやうもなく、殘念ながら、怵へるの外は無かつた。そこで、イグナチーフの方へは、此旨を答へて、翌年の七月、樺太に於て、日本の委員と、露國の委員が落合ふて、境界を定める、といふ事にして、南北に二分して、其一半を、お互に有つといふ、事の覺書は、作らずに済ました。今から考へると、石見守の意見を排して、下野守其他の者が、斯ういふ事に、取極めてしまつたのは、實に千載の遺憾である。

六

開港延期の談判は、日本を出る時に、豫め宜しい、といふ事に、なつて居たのであるから、延期するに極まつて居たが、唯、此使節として、樺太問題を、美事に片付けて歸れば、眞に使命を全うした事に、なるのであつた。惜しい



かな、今の言葉で言ふ、外交知識なるものが、石見守以外の人に、多くなかつた爲に、到頭、折角の樺太分割の證書を、交換するまでの運びにならず、其儘に、引揚げて来たのは、如何にも残念な次第であるが、併し、石見守は、其時代の人として、イグナチーフを、抑へつけた手段は、何としても、賞讃に値ひする。七十年の昔、舊幕時代に於て、外交の何物である、といふやうな事さへ、よく解らない時代の役人が、此用意をして掛つた、といふのは、返すくも、感心の至りである。

一行が、歸つて来て、幕府へ、此旨の復命に及んだが、其時の幕府には、樺太問題などを、考へる、餘裕がなく、幕府が、立つか立たぬかの、瀬戸際であつたから、一行の報告も、馬の耳に念佛で、更に取合ふ者も、無かつた位だ。到頭、其翌年には、露西亞の委員のみが、樺太へ行つて、約束の場所、待合はせて居たが、幕府の委員は、影も見せず、何の通知もしないで、其儘に棄て置いたのは、實に遺放しも、甚しきものであつた。縱令、幕府の基礎が弛んで、内外の紛紜に、堪へ得ないから、といふて、斯ういふ約束をしたものが、其儘になつてしまつた、といふのは、甚だ怪しからぬ事だ。是が爲に、露西亞では、日本が樺太に對する、領有の争ひは、其權利を放棄したものと看做して、一切を取計つてしまつた。

其後、慶應年間になつて、小出大和守が、函館奉行になつた。小出は、分別のあつた人で、頗に樺太問題を物にしようと思つて、自ら樺太まで行つて、露西亞の役人に、やかましく掛合つたので、また物になりかけたが、幕府へ、談判の衝に當りたい、といふ旨を、書面を以て、申出たが、更に何の手應へも無かつた。そこで、公の御用を兼ねて、江戸へ、上つて来る、と、其時は、已に幕府の運命が、且夕に迫つて、折角の、小出の苦心も、水の泡となつてしまつた。彼是する中に、幕府は、遂に倒れて、明治政府が起つた。

新政府の基礎が、漸く固くなつて、副島が、外務卿になつた。そこで、樺太の問題が再燃して、いくたびか、閣議

を凝したが、副島の意見では、何うしても、今の中に、日本のものにしてしまはなければ、將來の患ひをなす、といふ考へから、露西亞の公使に、談判を開いて、愈々、樺太全部を、買収し得る見込がついて、凡そ三百萬兩ばかりの金が、要る事になつた。大久保が洋行中、大蔵省は、大隈が取締つて居たのであるから、副島が、大隈に相談をする、と、何とか金の都合はしよう、となつたから、副島も、非常に勵みが付いて、いよく買収の、談判に掛かつた。折柄、朝鮮問題が起きて、閣議は、更に忙しくなり、樺太問題は、自然、閉却されてしまつて、副島の苦心も、今は誰一人として、力を入れて、相談相手に、なる者が無い、といふやうな有様に、なつてしまつた。朝鮮問題は、更に詳しく述べるが、兎に角、其騒ぎのあつた爲めに、樺太買収の事は、有耶無耶の中に、葬られてしまつた。殊に、征韓論が敗れると、副島は辭職してしまつたから、尙更、樺太の買収案は、全く打ち切りの形になつた。

然るに、其後、明治六年の九月になつて、露西亞の方から、樺太問題に就て、時々、思ひ出したやうに、談判などを起されては迷惑であるから、何れの領土であるか、といふ事を、極めて置きたい、といふやうな事を、逆振に申込まれた。茲に於て、我政府も、棄て置く事が出来ず、榎本武揚を、談判委員として、露西亞へ遣はす事になつた。榎本は、早く洋行して、海軍の知識は、なか／＼に有つた人で、我海軍に於ては、眞に先輩の一人として、尊崇しなければならぬ、一人であつた。幕府が倒れる頃には、釜次郎と、いふて居て、徳川の爲めには、譜代の家來ではなかつたが、一日養はれても、恩は恩である、といふので、到頭、最後の五稜廓まで、戦ひを續けて、一度は、朝敵の名に依つて、牢に入れられたが、朝廷の御情に依つて、死を免れて、海軍中將として、明治政府に仕へた。其榎本が、談判委員として、露西亞へ渡つて、段々、談判つた末が、遂に斯う極つた。『樺太は、全部を、露西亞の領土として、其代り、千島全部を、日本國の領土にしよう』と、いふのであつた。



樺本全權は、それに同意したのであるから、つまり、千島と樺太の交換である。千島は、元來、日本のものであつて、樺太を争ふ場合に、樺太を、露西亞のものとして、千島を、日本のものにするといふのでは、まことに驚き入つた事だ。

其時分に、外務大丞といふ、役を勤めて、傍、樺太境界談判委員の一人に、丸山作樂と、いふ人があつた。肥前島原の出身で、非常に和學の造詣が深く、常に我外交の振はざるを見て、嘆息して居た。折柄、樺太と千島の交換問題が起きて、非常に憤慨の餘り、到頭、東京へ出て来て、外務省へ、建白書などを出して、此交換が不條理である、といふ事を唱へ、樺太は、全然、何等の條件も要せず、日本の領有とすべきものである、といふ意味を、頻に痛論したが、その意見は行はれず、交換の條約が成立した。其條約が、公けになつた時、丸山は、白衣を着けて、白張の提灯を携へ、眞晝間に、外務省の表門から、ノコノコ這入つて行つた。此不思議な服装で、這入つて来た、丸山は、理に於いて、日本の領土たるべき、樺太を、露西亞に奪はれ、其代りに、日本の領土たる、千島を貰つて我慢するやうな、不條理な事が、外交の上で行はれるやうでは、日本國の滅亡も近きにある、といふて、それを申ふ、意味を以て、斯ういふ風をして、這入つて来たのだ。外務省でも、此扱ひには頗る困つた、といふ事であるが、丸山は、結局、職を免ぜられて、民間へ下つた。

▲樺太問題は、南洲傳にも、概略を述べてあるが、征韓論の閣議に入る前、之を述べて置く必要があるから、重複を厭はず、稍や詳細に述べたのである。

▲使節の一行が、日本を出る時、安藤老中から、樺太境界の事も、豫め定めて来るやう、内命をうけて居たのである。

▲條約延期は、安藤の力であつた。これを貶す人もあるが、それは、當時の國情を、解せざるの議論であつて、假りに交換條件として、關稅に、歩の悪い事は、あつたとしても、これ以上の事を、當時の外交に望むのは、苛酷

であると思ふ。  
▲昨今の外交でも、これ以上に、歩の悪い事を、平氣でやつて居るから、昔の事ばかり、悪くはいへぬ譯だ。



### 征韓論の由來

征韓論を、一番先に唱へたのは、佐田白茅といふ人で、通稱を、素一郎といふた、久留米の藩士である。夙に眞木和泉守に従ふて、勤王討幕の爲に、奔走した人だが、是が爲に、文久三年には、一度捉へられて、藩獄に投ぜられたといふやうな經歷を、有つて居る。維新の際には、小松宮彰仁親王に従ふて、軍務官知事であつた。奥羽征討には、相當に功勞のあつた人だが、政府に不平があつて、遂に辭職してしまつた。佐田の建白は、三度も出て居る、いづれも、征韓の意見であつた。その一つを掲げて、佐田の征韓に關する、意見の一斑を知る事にしやう。

佐田白茅、誠恐誠惶、昧死再拜謹白。白茅奉朝命入朝鮮、探討其狀情、謹奉貢探索紙若干。今又條上白茅之妄論、敢取進止、明治三年三月。

朝鮮近年、大興武官、練兵制、製器械、諸方作兵營、諸道蓄金穀、文官則惣然不問也。嚮天朝下一新之書、文官皆曰、宜以結交答之。武官皆曰、結交則日本終以我爲藩屬、須排斥其書。國王探武官之說、以有不遜之文字、擯卻之。嗚呼其擯卻之、是朝鮮辱皇國也。皇國豈可不下皇使以問其罪哉。朝鮮知守、不知攻。知我不知彼。其人深沈狡猾、固陋傲頑、覺之不覺、激之不激、故斷然不以兵力。

莅焉、則不爲我用也。況朝鮮蔑視皇國、謂文字有不遜、以與耻辱於皇國。君辱臣死、實不戴天之冠也、必不可不伐之。不伐之則皇威不立也。非臣子也。速下皇使、舉大義、問所辱皇國者、彼必屯遼路阻、不能降伏謝罪、唯命是聽焉。於是皇使忽去、大兵遂入、其十大隊向江華府、直攻王城、大將率之、其一少將率六大隊、進自慶尙、全羅、忠清三道、其一少將率四大隊、進自江原、京畿、其一少將率十大隊、溯鴨綠江、自成鏡、平安、黃海三道而進、遠近相待、緩急相應、角之椅之、必可不出五旬而虜其國王矣。若不然而徒下皇使、雖百往復、實下策却法、不若征討之最速、決非浪擧也。

朝鮮仰正朔於清國、而其實不欲事之、以其清祖與乎夷狄也。然荷仰正朔、則患難相救、義當然、故當天朝加兵之日、則遣皇使於清國、告所以伐之者、而清者出援兵、則可并清而伐之。

朝鮮有大院君者、國王之實父也。丙寅之年、朝鮮與佛蘭西戰爭之後、專握政柄、擅威福、唯好武而無深謀深慮、厚稅斂、蓄金穀、下民莫不怨讟焉。一日舉我三十大隊、以蹂躪彼之巢窟、則土崩瓦解。一夫大院七縱七擒、實易々耳。

全皇國爲一大城、則若蝦夷呂宋、臺灣、滿清、朝鮮、皆皇國之藩屏也。蝦夷業既創開拓、滿清可交、朝鮮可伐、呂宋、臺灣可唾手而取矣。夫所以朝鮮之不伐者有之、四年前、佛國攻朝鮮、取敗衄、懊恨無限、必不使朝鮮長久矣。又露國竊窺其動靜、米國亦有攻伐之志、皇國若失斯好機會、而與之於外國、則實失我唇而我齒必寒。故白茅痛爲皇國唱撻伐也。

今發出師之論、則人必以糜財盡國破其論。白茅謹按。伐朝鮮、有利而無損。一日雖投若干金穀、不出五旬而得其償矣。今大藏省每歲出金凡二十萬圓於蝦夷、未幾知幾年而成開拓矣。朝鮮則金穴也、米麥亦頗多、一舉拔之、徵其人民與金穀、以用之於蝦夷、則大藏省不唯取其償、省幾年開拓之費、其利害豈不浩乎。故伐朝鮮者、富國強兵之策、不可容易以糜財盡國論却之也。



今皇國實患兵之多而不患兵之少。諸方兵士未足東北之師、頗好戰鬪、翹足思亂、或恐釀成私鬪內亂之憂、幸有朝鮮之舉、用之於斯、而洩其兵士鬱勃之氣、則不唯一舉屠朝鮮、大練我兵制、又大輝皇威於海外、豈可不神速伐之乎哉。

佐田の建白は物にならなかつたが、それから間もなく、我政府より、朝鮮政府へ、國書を送つて、『從來の通り、交際を續けたい。又、年々の貢物も、送つて寄越すやうに』といふ意味の事を申送ると、朝鮮政府からは『徳川將軍とは、交際の約束は結んだが、日本の國王とは、そんな約束はしてない、今後の交際を、爲ると爲ぬとは、此方の自由にする』といふやうな事を、言つて寄越したから、そこで、朝鮮の間に、入釜しい議論が、起きて来て、征韓論の緒は、茲に開けたのである。

斯うなつて見ると、佐田が、征韓の建白をした、事は、先見の明が、あつたやうにも思はれ、愈々勵みが付いて、頻りに佐田は、朝鮮の有志を、説いて歩いた。然るに、佐田と同じやうに、征韓論を唱へる人が、出て来た。それは、外務官小録といふ、役を勤めて居た、森山茂といふ、者であつた。元は、大和天誅組の一人で、維新前にも、相當の活動を、仕た人である。豫て、日本全國に、散在して居る、五十餘萬の士族を、悉く朝鮮へ送つて、其力に依り、朝鮮國を征討して、朝鮮を、其等の士族に與へてしまふのが、最も良策である、と言ふて、其説を、唱へて歩いた。それが計らずも、佐田と一つになつて、研究して見ると、多少、手段方法に就いてこそ、異つた點はあるが、朝鮮を征討する、といふ事に於ては、少しも相違は無いのであるから、そこで、兩人が、互に提携して、此問題を物にしやうといふ事になつた。

一一

森山の説は、佐田に比べると、頗る整ふて居た。兩者の識見が、どう異つて居たか、といふ事を、知る爲に、森山説の要領を、掲げて見やう。

『韓國の故なくして、我に非禮を加ふる、元より之を膺懲せざるべからずと雖、今、卒如、兵を派して、之を討ずには、暴なり、假令、彼に責むべきありとも、我にして、亦責むべきあらば、これ決して、王者の師と云ふべからず。よりに、宜く彼に折衝せしむるに、我堂々の國師を以てすべし。宗氏は、多年、交際の事に、鞅掌し來りたる者なれば、彼を、我外務の一高官に任じて、交渉の任に當らしむるは、思ふに、問題を解決する、最後の一方策ならず、事、破るゝの、曉こそは、これぞ、我征韓の師を興す可きの時なれ、此時に當りては、五十萬の士族を擧げて、半島の地に渡海せしめよ。今や、御一新の革命、成を告げたりとは云ふものゝ、四方志を得ざるもの、英氣勃々として、竊に變あらんことを冀はざるなし。故に、彼等を、半島に移植するは、一には、此來るべき内亂を外に避くる所以なる可く、又一には、よりに、以て、國利を、海外に拓く所以にして、洵に一舉兩得の策たる可し。思ふに、韓國を伐つ、汽船軍艦は、殆んど之が用を見ず、只、我武士の輕騎に搭じて、海峡を横斷するあれば、ここに足る。我兵にして、韓土に上陸せんか、先、慶尙、全羅の二道を占領し、こゝに持久の策を施し、永居の法を定め、以てしばらく進軍を停止す可し、我幾萬無職の士族は、之によりて、優に其生業を得可く、果して然らば、財政當局は、幸に又、秩祿を、公債の道に求むるの窮策なきを得可し』

其時代に於て、一番の艱みてあつたのは、不平士族の處分である。苟も、士族の肩書あるものは、一人として、不平を抱かぬものはなく、政府に在る、士族にも、多少は、不平があつた位であるから、況して、野に取殘された士族が、満足して居る筈はない。



昭和の世になつて、失業問題が、頗るやかましくなつて來たが、それと同じやうに、明治の初年は、土族の失業者が多く、といふよりは、殆んど其全部が、從來の常職を失ふたのであるから、それ等の連中が、不平滿々て居た事は、疑ひもなき事實であつた。

時を得顔に、肩を聳かして歩く、薩長二藩のうちにも、失業土族の方が、多く居たのであるから、それを抑へつけろのに、先輩の苦むだ事は、一と通りでなかつた。

萩の土族が、富永大樂に、引摺られて亂をなしたのも、それが爲めである。それと同じやうな事が、どこの藩中にもあり、薩藩にさへ、その傾向があつて、西郷や、大久保の苦心は、矢張りそれであつた。

木戸が、大村を説いて、征韓の議を進めた、一半の事情は、土族の不平緩和からの念であつた。

森山の説にも、その事が、力強く唱へられてあるのを見ても、當時の失業土族を、いかにしてよいか、といふ事が、相當、問題になつて居る事が、推測し得るではないか。

勝安房の日記が在る。

文久三年四月廿七日の條下に、

「今朝、桂小五郎、對馬藩大島友之允、同道にて來る。朝鮮の事を論ず。我等は、當今、亞細亞洲中、歐羅巴人に抵抗する者なし、それ皆、規模狭小、彼が遠大の策に及ばざるが故なり。今、我邦より、船艦を出し、弘く亞細亞各國の主を説き、横縦連合、共に海軍を盛大にし、有無を通じ、學術を研究せずむば、彼が蹶躅を免るべからず、先、最初、隣國朝鮮より、これを説き、後、支那に及ぼんとすと、同人悉く同意」とある。

之に依つて見れば、勝は、亞細亞洲の大聯盟を、考へて居たりしく、木戸も、大島も、それには、異存がなかつた

やうに思はれる。

さうした、遠大の考を有つて居た、木戸と大島が、何時か知らず、征韓論者になつたのは、要するに、朝鮮政府の要人が、頑冥にして度す可からず、殊に、我國書に對して、非禮の答をなし、交戦も、敢て辭せぬ、といつた態度を示したからであらう。且、その背後には、支那の大きい手が、動いて居る事が、判然、解つて來たので、終に征韓の意見に、變つたものとして親る外はない。

大島は、對州の藩士であるが、幕末の當時から、いくたびか、自身に、朝鮮へ渡つて、その事情を究め、草梁紀聞と題する著書もあつて、日本人が、朝鮮を知るについて、唯一の指針ともいふ可き、書物であつた。

大島の名は、森山ほどに知られず、佐田の如く、現はれても居なかつたが、木戸の蔭にかくれて、常に對韓策を、吹込んで居た事は、見過し得ぬ事實である。

一一

征韓の空氣は、明治三年頃から、旺んになつて來た。朝野を問はず、大概は、征韓に、熱中するの狀態であつた。町人百姓は、武家政治から、既に解放されて居たのであるが、政論を、爲す自由は、有つて居ても、永い間の桎梏から、遁れ得たばかりで、未だ正面から、政論を爲すやうな、氣の利いたものは、殆んど無かつた。況して、對韓策などについて、堂々の論議を、吐くものは一人も無く、政論は、土族に依つて、聞くより外なかつた。従つて、當時の輿論は、土族の輿論であつた。

失業土族の意見は、征韓論に向つて、一文字に進んでゆく。政府の大官も、將た、藩の先輩も、ひとしく、それに一致して居るのであつた。

時に、薩藩の一青年、横山正太郎安武は、敢然として、征韓の議に、反對を叫んだ。佐田、森山、其他の征韓派を



歴訪して、さかんに其非を論じた。

『朝鮮征討の議、草莽の間、盛に主張する由、畢竟、皇國の萎靡不振を、慨嘆するの餘、斯く憤慨論を發すと見えたり、然れども、兵を起すに名あり、義あり、殊に、海外に對し、一度、名義を失するに至つては、縱令、大勝利を得るとも、天下萬世の誹謗を免る可からず。兵法に、知己、知彼と云ふことあり、今、朝鮮の事は、姑く舍き、我國の情實を察するに、諸民は、飢渴困窮に迫り、政令は、鎖細の枝葉のみにて、根本は、今に、不定、何事も、名目虚飾のみにて、實效の立所、甚だ薄く、一新とは、口に唱すれど、一新の徳化は、聊も見えず。萬民憫々として、隱に土崩の兆しあり、若し、我國勢、充實盛大ならば、區々の朝鮮、豈、能、非禮を、我に加へんや。慮、此に出でず、只、朝鮮を、小國と見侮、妄に無名の師を興し、萬一、蹉跌あらば、天下の億兆、何と云はん。蝦夷開拓さへも、其土民の怨を受くる多し。且、朝鮮近年、屢々、外國と交戦し、頗る兵事に慣るゝと聞く。然らば、文祿の時勢とは、同日の論にあらず、秀吉の威力を以てすべし、尙、數年の力を費す、今、佐田某輩、所言の如き、朝鮮を、掌中に運さんとす、欺、己、欺、人、國事を以て戯れとするは、此等の言を云ふなる可し、今日の急務は、先、綱紀を建て、政令を一にし、信を、天下に示し、萬民を安堵せしむるにあり、姑く蕭牆意外の變を圖る可し、豈、朝鮮の罪を、問ふに暇あらんや』

横山の意見として、征韓反對の一篇から、之を摘録したものであるが、餘りに朝鮮を恐れ、日本の力を、弱く見て居る憾みはあるが、その所説には、多少の道理もある。

横山は、森有禮と同胞であつたが、明治三年七月廿六日、集議院の門前に於て、自殺してしまつた。懷裡には、時弊、數ヶ條を數へて、之を痛論した意見書があつた。反征韓論も、その中の一つである。

或日、佐田を、訪ねて来た人があつた。氏名を言はず、是非會ひたい、といふのだ。一度は斷つたが、強ひて面會を求めたので、それならば會はう、といふ事になつて、座敷へ、通して見ると、意外にも、其人は、丸山作樂であつた。段々、話を進める中に、丸山も、佐田も、同じやうな性質の人であつたから、議論の投合が宜かつた。所謂、一見舊の如し、とても言はうか、兄弟同様に、往來するやうになつて、征韓の同志が、殖えた譯だ。

丸山の意見は、

『今の政府なぞを當にして、朝鮮征伐が出来る、と思ふのが、大違ひである。斯んな政府は、逆も當になるものではないから、朝鮮征伐は、有志の力を以て、之を行ふ外はない。現に、自分は、樺太境界の談判委員に、なつて居たが、不條理千萬な、露西亞の要求を容れて、當然、日本の領土であるべき、樺太を、先方へ渡して、日本の領土である、千島を買つて我慢するといふやうな、馬鹿々々しい事にさへ、甘んずる程の、日本政府が、朝鮮を征伐して、其後の經營を續ける、といふやうな、氣の利いた事が、出来る筈はない。朝鮮の事は、民間の有志が、自から任じて、之を行はなければならぬ。それに就ては、横濱の獨逸人に逢ふて、屢々、懇談を遂げてあるが、朝鮮を取つた後に、或る利權を與へる事にしてやれば、差當り二十萬弗の、資本金は、貸して呉れる、といふのである。茲に二十萬弗の金があれば、何うか、斯うか、間に合ふだらう。之を征討費として、兎に角、民間有志の力を以て、事を起さうてはないか』

と、いふのであつた。

佐田も、斯うした、突飛な遣方を、好きな人であるから、今こそ、政府に、迫つて居るが、若し、茲に二十萬弗と、いふやうな大金を、出す人があつて、同志を募集して、民間の有志の力を以て、やる事が出来る、となれば、却つて宜い、といふので、頻に乗氣になつて来る。そこで、丸山の紹介で、獨逸人にも會つて見ると、確かに引受ける、と



いふのだから、佐田も、大いに喜んで、段々、同志の募集に掛つた。征韓運動の第一は、是れであつた。

四

幕府を倒して、新政府が、成立つて、政治文物、其他一切のものが、舊から新に移つて行く。斯うした時代には、必ず新舊思想の衝突が起つて、それが、意外の邊に、爆發して来るものである。同じ政府の中に、居る者でも、其暗闘で、始終、紛擾して居る、といふのは、何處の國にもある事であるが、殊に、明治の初年に於て、我國內に、新舊思想の暗闘は、實に甚いものであつた。

新政府に這入つて、實權を、握つた者は、盛に舊制度の破壊を試み、何でも、新しい事を行つて、此國を、世界的に、進めて行かう、といふやうな氣になる。不遇にして、政權に近付かないで、民間に、居居つて居る、連中は、之を見るに、非常に、不平を懷いて、何時か代つて、政權を握らう、といふ事を企てる。不平の連中は、所謂、日の寄る所へ玉で、色々の關係から、結び付けられて来て、初は、五人か六人であつたのが、何時か知らず、多人數となつて、其結果、段々、不平は、大きくなるばかりである。勿論、同じ議論を有つて、同じ主義の下に、進んで行く、といふのではなく、一人宛に、離して見れば、逆も一緒には、進む事の出来ぬやうな、説を有つて居る者でも、唯、目の前に見える、政府を倒さう、といふ事に就て、其心が一つである、といふ所から、一致の態度を以て、進んで行くやうになる。

長州には富永有隣、大樂源太郎があり。久留米には小河眞文、古松簡二、熊本には高田源兵衛、小倉には澤野拙三、秋田には初岡敬二、土州には岡崎恭輔、といふやうに、藩の所屬も違ふし、意見も違つて居たけれど、新政府に對する、不平の點に於て、異なる事は無かつた。斯うした連中が、或は直接に、或は間接に、それ／＼款を通じて、東西、同時に、事を起して、新政府に、一撃を加へよう、といふやうな企てが、追々、進んで来た。

富永と大樂の事は、既に述べてあるから、今は略すが、此中で、秋田の初岡はあまり、世間に知られずに、殺されてしまつたけれど、實に才略の勝れた上に、膽力も太かつたし、立派な人物であつた。總ての計畫は、初岡の胸算から成つたやうにも、聞いて居る。又、土州の岡崎は、才氣煥發、實に珍らしい程の、才物であつたが、此事件で、牢から出て来ると、井上馨や、山田顯義に、巧く懐柔されて、政府の御用新聞を引受け、それから、ぐれ出して、終に失脚、晩年は、小さい印刷所の校正掛で終つた。その新聞といふのは、例の大東日報の事であるが、原敬は、岡崎に知られて、しばらく、論説記者として、此社に居た。岡崎の晩年は、この通り寂しかつたが、此事件を、企てる當時、岡崎は、實に一個の快男子であつた。

此連中は、何といふ事なく、政府に、反對の意見を、有つて居て、何でも一度は、政府を、倒してしまはなければならぬ、といふ考へを、有つて居たのだ。

その中には、薩長二藩の、是れまでの遣方に就て、不平を懷いて居る者もあるし、幕府を、倒す時の手段が、如何にも横暴であつた、といふ事を、怒つて居る者もあるし、兎に角、新政府を倒す、といふ事に就ては、一致して居たのだ。

それに、關係を結んだのが、帝都を、江戸へ遷した、といふ事に、不平を懷いて居る、公家の愛宕通旭一派であつた。愛宕卿を、説きつけたものは、岡崎であつて、岡崎から説かれた、愛宕は、自分の獨力を以て、事を成す事は出来ぬが、京都を、西京へ引戻す、といふ事に就ては、公卿の間で、異存を、言ふ者も無いので、兎に角、澤主水正を、説きに掛かつた。澤は、忽ち同意した。

關係の範圍が、擴がつて来て、舊諸侯の間にも、不平な人は、大分あつたのだから、それからそれへと、仲間が、殖えて来た。久留米の有馬頼成が、親戚同様にして居た、石州津和野の舊藩主、龜井候を説いて、仲間に入れやう、としたので、龜井は、自分の家來、福羽文三郎に相談した。是が例の僞僕、福羽美靜のことであるが、主人から、謀



叛の相談を受けて、福羽は驚いた。  
 福羽から、此秘密を、木戸に訴へたから、騒動が大きくなって、政府の方から、段々調べてみると、連類の範圍も廣く、大きな計畫のやうであるから、一時に、手を廻して、一同を捕縛する事になつた。是が明治になつてから、例の雲井龍雄の事件に次いで、大きな謀叛であつた。  
 茲に於て、一同も、此儘に過ぎれば、空しく捕縛されてしまふのだから、其中の一部の者は、征韓黨の佐田一派と、欸を通ずるやうになつた。岡崎が、幸にして、英吉利一番館の番頭で、同じ土州人の、吉田健三といふ者と、極く懇意であつたから、吉田を説いて、遂に英吉利一番館の持船たる、蒸汽船を一艘、借り受けることになり、一同が捕縛されざるに先立ち、之に乗つて、朝鮮へ押出さう、といふ事に、漸く手筈が極まつて、其準備に掛つた折柄、政府の方でも、此秘密を知つて、朝鮮へやつては、却て面倒である、と見て、一網に被せてしまつた。それは、明治四年十二月三日の事である。

五

此謀叛を企てた、連中が、征韓論に結び付いたのは、征韓論を、唱へて居る人の爲には、聊か迷惑な次第ではあつたが、詰り、征韓論を唱へる連中も、矢張り、政府に對しては、不平を懷いて居る者が、多かつたのであるから、自然、同じやうな性質の者が、互に引合ふて、一つになつたので、是は止むを得ない事であつた。併し、此事件が露顯して、一網に被せられて、それぞれ處刑になつた爲に、單純に、征韓論を、唱へる者と、征韓論を利用して、政府に、不平を漏さう、とする者の區別が、明かに判つたので、後に残つた、純粹の征韓論者の爲には、雨降つて地固まる、といふ諺の通り、或は幸であつたかも知れない。  
 明治政府の初に、木戸が、征韓論を思立つて、大村益二郎と、相談した事は、前にも述べて置いたが、それは、大

村の變死と共に、立消えになつてしまつた。又、民間から起きて來た征韓論は、前に言ふた、謀叛の一條と共に、漸く其勢ひも、弱くなつて來たが、岩倉大使の一行が、洋行した後、又再燃して來て、愈々、事は、面倒になつて來た。  
 西郷が、征韓論に、漸く意を傾けて來たのは、維新の論功行賞に漏れて、不平を懷いて居る士族が、各藩に澤山あるから、その調節を計らう、としたのも、一の動機であつた。其等士族の處置を、何とか付けなければならぬのであるが、それには、何うしても、征韓論へ、此士族を結び付けるのが、第一である、と見たのである。又、西郷自身から言へば、功成り名遂げて、身退かなければならぬ境遇ではあるが、それは、四邊の狀況が許さぬから、そこで、使節として、朝鮮へ乗込んで、日本國の犠牲となつて、自分は、征韓論の血祭にならう、といふやうな考へから、頻りに朝鮮へ、目を着けたのであつた。  
 折柄、朝鮮政府は、日本政府へ對して、甚だ無禮な處置を加へるばかりでなく、日本人で、釜山邊りへ行つた者が、酷い扱ひを受けて、甚だしきは虐殺される、といふやうな事もあつたから、何うしても、是は棄て置いてはならぬ、といふ議論が、内閣に起つて來たのを幸に、西郷は、自から遺韓大使として、彼の地に乗込み、さうして、談判の衝に當らうと、決心した。巧く行けば、それでよし、若し失敗つて、自分が、朝鮮人の手に掛かつて、斃されるやうな事があれば、それが原因に、戰鬥を開くやうにならうが、其代り、朝鮮國は、日本の版圖に、なるのであるから、日本國の爲には、損は無い、と見て、頻りに自分が、朝鮮へ行く事を、主張したのであつた。  
 乍併、さうした考へは、唯、西郷の腹中に藏する考へであつて、口に出して言ふた、議論ではないのだ。表面に於ては、飽までも、「朝鮮政府は、日本政府へ對して、無禮な處置をして、今まで通りに、交際を肯じないから、それを懲す爲に、談判をする」といふのが、口實にはなつて居たのだが、實は、何れにしても、兵を起さなければならぬ、といふ事は、誰も皆感じて居たのである。



後に、之を征韓論と、名付けたのであるが、當時の閣議の上から言へば、西郷を、朝鮮へ遣はすに就ての事件、即ち、遣韓使派遣問題といふのが、正當である。征韓論と、露骨に言ふてしまつては、穩かてないのだ。

内閣で、此相談に、掛かつた時分には、板垣、江藤、副島、後藤の四參議は、西郷を派遣する事に、同意であつた。太政大臣の三條實美は、勿論、西郷の味方であるから、是も異存は無い、さうなつて見ると、岩倉、木戸、大久保の三人を除いて、跡に残つた者は、大木喬任、大隈重信位の者であるから、何うにも、仕様が無かつた。

其時代の大隈は、内閣の中でも、伴食參議の一人て、殆ど何等の實權も、握つて居なかつたのであるから、堂々と議論を立て、西郷等を動かす、といふやうな力は無かつた。

乍併、西郷を、朝鮮へ派遣すれば、それが原因になつて、開戦しなければならぬ、といふ事は判つて居るから、大隈や大木の、立場から言へば、さういふ事は、仕たくない、といふ考へがあつて、そこで、岩倉の出先へ、使者を出して、一日も早く、歸朝を促したのである。

所が、征韓派の方は、殆ど大隈や大木を、眼中に置かず、閣議を極めてしまつて、西郷を、派遣する事に、内定したので、陛下に於かせられても、それは宜からう、といふやうな、御説が下つた、といふ事であつた。さうなつて見れば、縱令、岩倉が、歸つた所で、最早、閣議の大體が、極つて居るのだから、何うしても、之を覆へす事は出来まい、と誰も考へて居たから、西郷派の參議は、安心の胸を撫下して、岩倉一行の歸朝を、待受けたのである。

### 所謂征韓論の閣議

岩倉大使の一行が、獨逸滞在中に、本國政府から、木戸、大久保に、歸國の命を報じて來た。そこで取らず大久保が、歸途につく事になり、木戸は、それから二ヶ月ばかり遅れて、佛國のマルセイユから、歸途についた。明治六年七月二十三日を以て、横濱に上陸し、即日入京したのである。九月十三日には、岩倉の一行が、横濱についた。

大久保は、大藏卿であるから、問題の遣韓使節の閣議に、參列する事は出来ない。そこで岩倉が、三條に説いて、十月の十二日に、參議の列に加へる事にした。同時に、副島も、參議となつたのであるが、是までは、副島は、外務卿をして居た丈で、參議にはなつて居なかつた。一方に於て、大久保を、參議にする以上は、副島も左様しなければ、征韓派が治まらぬ。そこで、斯ういふ事にしたのだが、斯うした情實を、用ひるやうになつては、如何に顏揃ひの内閣でも、前途が、思ひ遣られる。

愈々、十月十二日を以て、閣議を開く事になつた。西郷首め、征韓派の參議は、何れも威勢よく出頭したが、待てど暮せど、岩倉は、出て來ない。大久保や木戸も、顔を見せないのので、何時まで経つても、閣議を、開く運びにならなかつた。三條太政大臣は、止むことを得ず、

『この儘に、閣議を開く、といふのも、穩かてないやうに思はれるから、更に重ねて開會いたす事にしよう、と思ふ



が、各位の御意見は、何うであらうか』  
と言はれて、西郷は、

『三條さんの仰せぢやが、己どんな、同意が出来ませぬ。岩倉さんなどは、洋行から歸られてから、既に一ヶ月にも、相成つて居るのぢや。其間を、己どん等は、遠慮な申して、差控へて居つた。岩倉はん等に、何ういふ都合があるか知らぬが、己どん等を、今日まで、待たせて置いて、愈々、閣議が開ける、といふ場合になつて、また出頭をせぬ、といふのは、己どん等を、嘲弄するにも等しい仕方である、と思ふ。苟も國家の樞機に與る者が、斯ういふ勝手な、勤め振りをするのは、甚だ怪しからぬ事ぢや。依つて、速に今日な、會議を開いて、決すべきものは決してしまふたら、宜か思ふが、それでも、貴下は、延期しようと言はしやるのか』

三條は、頗る困つたやうな様子で、暫くは答へも出なかつたが、西郷は、重ねて迫る。

『何ぎやしなさる、つもりか』

『さア、さう仰せになると、我等も、洵に困るのぢやが、此上は、長うは延期せぬから、一兩日の間を、待つて下さる事は出来ぬか』

『そや、出来ませぬ』

『一日か二日を待てぬ、と言はしやるのか』

『無論の事でごわす。岩倉さん等が、出て來ぬのは、詰り、己どん等を、朝鮮へ、使者に出す、といふのに対して、反對の考へがある爲に、出て來ぬのぢやらう、と思ふが、己どん等を、朝鮮へ使はず事な、既に一度、決して居る事でごわす。貴下は、畏れ多くも、陛下にまで、其事な、申上げてある、といふ事さへ、答へられて居るでは、ごわへんか、して見れば、縱令、岩倉はん等が、出て來なはつたにしても、此事な、既に決して居る事ぢやから、何ぎやにもならぬのぢや。そいを理由なく、一日々々と、日な延ばして置く、といふのは、甚だ不都合な事と考へる。』

此閣議な、岩倉さん等の閣議では、ごわへんからな』

何時もは、是程までに、理窟を言ふた事の無い西郷も、今日は、思ひ切つて、理窟を言ふて迫るのであるから、三條も、殆ど其取扱ひに苦んだ。副島は見兼ねて、

『イヤ、西郷さん、貴下の仰せになる事は、決して無理でないが、併し、今日まで、閣議を開かず居て、漸くに開く事に、なつた場合に、岩倉さん等が、來て居らぬのに、閣議を開いてしまふ、といふ事は、穩かでないやうにも考へて、三條公も、あれまでに、仰せになるのぢやから、一日か二日を待つ、と致したら何うてせうか。此次には、岩倉さんも、出て來るであらう、と思ふが、貴下は、待つ事は出来ぬかな』

『そや、御免蒙る。三條公は、前の閣議に参列して、同意せられて居る事では、ごわへんか、而て見れば、岩倉さん等が、何ぎや事をいはうと、三條さんが、決めて然るべきぢや。全體、誰を憚つて、太政大臣の職に在る者が、斯ぎや、遠慮をなさるのでごわすか』

仲裁役に這入つた、副島も、是で黙つてしまつた。三條は、愈々窮して、何も言はぬ。唯、西郷が、頻に延期の故障を、言ふ聲が、激しく響くばかりである。

併、三條は、他の参議に向つて、延期の事を、承知して貰ひたい、といふ。他の参議も、西郷の唱へる事は、正論には違ひないが、今、此場合に押切つて、閣議を開くのも、少し穩かでない、といふ意見を、有つて居るので、段々、一同から、西郷を宥めるやうにする。西郷は、言ふだけの事を、言ふては見だが、行はれさうにもないし、他の参議が、あまりに心配するから、

『そいぢや、己どんな、三條公の御都合で延期しなはるのなら、それでも、宜か』  
と、言ふて呉れたので、三條も、漸く胸を撫下した。是から、宮中へ伺候して、陛下へ、延期の旨を、上奏に及んだ。



唯、是だけの事で、押合つて居たのだが、存外に、時間が掛つて、もう燈の點く時分に、なつて居たので、畏れ多くも、陛下より、酒肴の御下賜があつた。そこで、一同は、御馳走になつてから、控所へ下つて、雑談に、時を移した。時に、西郷は、まだ御前から、下つて來ぬ三條を、頻りに嘲つて、如何に公卿なればとて、あまりに意氣地が無い、といふやうな事を言ふので、一同も、殆ど挨拶に苦んで、只點頭ばかりだ。之を聞いて居た、江藤新平が、

「西郷さん、貴下は、さう言はしやるが、對手が、三條さんでは、さう怒つても、無理ぢや」

「何故、三條さんなら、怒る事はならぬのか。初めから、極つて居る事を行ふ、といふのに、何の遠慮がある。大臣の三條さんが、既に一旦、内決してある事を、決行するのに何て出來ないか。あまりに決断に鈍いから、己どんな、斯ぎや、言ふのでござす」

「それは、西郷さん、貴下が、違つて居る」

「何故、違つて居る」

「三條公に、決断をせい、といふのは、比丘尼に擧丸出せ、といふのと、同じ事でござるからな、ハツハ、、、」

之を聽いて居た、他の參議も、一同に、手を拍つて、笑ひ出した。是が爲に、儼かしい顔をして居た、西郷も、思はず笑を漏した。

「マア、さう言はれて見れば、もう一言も無か。成程、比丘尼には、擧丸は無いからな、ハツハ、、、」

江藤が、此奇抜な一言を、吐いた爲に、西郷も、到頭、黙つてしまつた。

一一

次の閣議は、十四日に決した。是は一々、陛下の御意を、伺つてから極めるのであるから、十二日の晩には、未だ極まつて居なかつたが、翌日になつて、十四日を以つて閣議を開くやうに、といふ、御沙汰が下つたのである。

若し、三條が、決断のある人であつたら、西郷が、朝鮮に使用する事は、直に決してしまつたのであらうが、何分にも、三條が、穩かな人で、斯ういふ風に、激い反對が、出て來ると、それを押切つてまでも、事を行ふ、といふやうな、決断の無かつた爲に、自然、閣議の日も、延々になるやうな譯で、岩倉大使が歸朝してから、既に一ヶ月も、閣議を開かずに、其儘にして居つた、といふやうな事は、全く三條が、優柔不斷であつた、といふ證據だ。

岩倉と三條は、全く其性格が、違つて居た。岩倉は、公卿の出身ではあるが、何處となく、豪傑肌のある、公卿離れが、仕て居た人であるが、三條は、それと違つて、穩かな人であつたから、岩倉から、睨み付けられてしまへば、思ふやうに、太政大臣の、權威を振つて、閣議を決めてしまふ、といふやうな事は、出來なかつたのである。是が反對に、三條が反對して、岩倉が、西郷の味方であつたならば、斯んな問題は、逆も争ひになるものではなかつた。

愈々、閣議が、十四日と極つたので、今度は、岩倉も、缺席する事は出來ぬ。何うしても、此日は出頭して、何か問題を、極めなければならぬのだ。それに就て、熟々、考へて見れば、西郷が、朝鮮へ使ひする、といふ事は、何うしても、日本の爲に良くない、と、考へて居るし、又、此際に於て、朝鮮と、不幸にして、干戈を交へる、事になれば、益々、日本の不利益になる、といふ意見を、有つて居るので、何うかして、西郷を壓へたいが、何しろ十二日の閣議に於て、西郷が、あれまでに、剛情を張つた位で、何時になく、自分等の事に就ても、嘲罵の言を放つ位であるから、逆も、正面から向つて、西郷を壓へる事は難かしいから、何とか策を設けて、側面から、西郷を、壓へつけ度いと、考へた。岩倉は、さうした事になると、智慧の廻る人であつたから、色々に考へた末、板垣と副島を、口説落して、先づ兩人を、軟化させてしまはう、といふ事になつた。

板垣と副島は、極めて好人物であつて、何方も剛情で、理窟は言ふけれども、元來が、正直な人で、殊に涙脆い。それが、此兩人の後半生に於て、あまり牙えた事を、成し得ずに、不遇の間に、世を去つた原因であらう。岩倉が、再人に、目を着けて、西郷を壓へよう、としたのは、洵に巧い考であつた。